資料① 戸田会長の仏法御書講義（戸田会長全集 第6巻）

般泥洹経に云く「当来の世仮りに袈裟を被て我が法の中に於て出家学道し懶惰懈怠にして此れ等の方等契経を誹謗すること有らん当に知るべし此等は皆是今日の諸の異道の聚なり」等云云

当来世において、すなわちこれから先の世において、大乗を学しない懶惰懈怠にして、法華経を誹謗する悪い僧が生まれてくるというのです。どういうのが悪い僧となって生まれるのかというと、いま釈尊の出た時に外道のバラモンをやって、仏法の悪口をいっているのが、そういうふうに生まれてくるのだというのです。

そうなってくると、大聖人様の時代に良観とか、あるいは法然とかの弟子などになる連中は、いったい過去にどういう者だったかというと、昔、仏法をくさした外道の者が生まれてきて、形だけ仏法をやって、こんどは正法に邪魔するのです。大聖人様を迫害した良観たちが、いま生まれてきて仏立宗等の坊主になっているのです。ほんとうです、この原理からいうとそうなります。

そうでないとしたら、大聖人様がウソついたことになります。大聖人様をさんざんいじめた悪い者が、仏立宗日蓮などという徒輩になったのです。いま仏立宗の坊主などをみたら、〝ああ大聖人様をいじめた者だな〟と、こう思えばいいのです。

霊友会でも立正交成会でも、天理教の教祖でも、みんなあれは仏法を悪くいってきた者が、あのようになって出てきたのです。それでいま、日蓮正宗が本尊流布するにあたって、邪魔をするのです。こんど、それではどうなるのかというと、あのような連中が死ぬと、こんどは日蓮正宗のなかに生まれてくるのです。そして蓮華寺の僧侶みたいになってくるのです。まことにこれはおもしろいものです。それがいまの議論なのです。

此経文を見ん者自身をはづべし今我等が出家して袈裟をかけ懶惰懈怠なるは是仏在世の六師外道が弟子なりと仏記し給へり

大聖人様は明確に、この経文に自分を恥じろといわれています。霊友会や仏立宗の連中に、ここをみせてもそうだというでしょうか、みえないでしょうし、わからないでしょう。僧侶にあったら折伏などしないで、ここのところを見せてやればいい。「此経文を見ん者自身をはづべし」のところに赤線を引いて、とんとんと三度ただいてみせてやればいい。折伏なんかしなくてもいいのです。

法然が一類大日が一類念仏宗禅宗と号して法華経に捨閉閣抛の四字を副へて制止を加て権教の弥陀称名計りを取立教外別伝と号して法華経を月をさす指只文字をかぞふるなんど笑ふ者は六師が末流の仏教の中に出来せるなるべし

私が仏立宗だ霊友会だと、いまあるものをいうと、戸田というのはよっぽどきらいとみえて、悪口ばかりいうと、こういうでしょう。だが大聖人様のいまの御書をみなさい。法然の一類あるいは大日が一類と、みんなこれらは六師外道の命をもった者が生まれてきているのだと、大聖人様がはっきりとこういっている。大聖人様のほうがずっと私たちよりひどい。私も弟子であるから、一生懸命まねして悪口をいおうと思うのですが、大聖人様の十分の一も百分の一もいえないのだ。よほど気がやさしいとみえる。

いまの御書ではっきりわかったでしょう。邪宗・邪教の者たちは、過去世において、大聖人様に敵対した者が生まれてきているのです。すなわち、法然の一類である念仏者、あるいは大日の一類である禅宗の者たちは、釈尊の時代の六師外道が、大聖人様が三大秘法を広宣流布するにあたって、僧侶になって生まれてきて敵対しているのであると。

いま、わが創価学会が広宣流布をして、日本民衆を救わんと立つにあたって、それを邪魔するのは大聖人様の時に邪魔した僧侶が、いま日蓮宗の仮面をかぶって生まれてきているのです。そういう原理がきちんと出ているのだから、こわいものです。三世の生命観に達すれば、きちんとわかるのです。三世の生命を信じなければ、この理論はまだわかりません。

（昭和三十一年二月七日　大阪・中之島公会堂）

崎尾師書

前略一風聞に依り寺院系とか一然し時に於て学会員の授戒並に法要は一ん。尚本年一月下い学会員信徒全部削除致します。従年二月以来三十年日迄の御本尊を返く、二月一日以後き事なれば氏名理を略し、御本尊の受取り致します。

昭和卅年一月二

大阪市北区
日蓮正
大阪支部長
白木義一郎殿

天魔の血脈系譜（戸田会長の指導から）

（現在）―（戦後の草創期）―（大聖人在世）―（釈迦在世）

阿部（日
邪宗（実
極楽（
六師（

先生は
智の徒輩
や。
検事・判
官も憲兵
尊者も・
上に大法
先生の法
法を捨て
破廃戒罪
の遺風を

資料②

● 名誉会長の本幹等の指導

・(昭和５４年問題に言及されながら) 北条、秋谷は私の事を週刊誌に売った。裏で全部流していた。幹部が売ったんです。女がいるとか、そういうことを勝手に作って売ったんです。
＜※以前から敵方が喧伝している、秋谷→矢野→内藤国夫のルートのことか？＞
・秋谷、山崎（尚）は「Ｐは大学を出ていない」とバカにしていた。
・山口県は総理が出ているところ。戸田先生から行けと言われた。小泉、和泉が嫉妬して行かせないようにしたんだ。
・壇上の秋谷前会長に、「お前が２７年会長やって矢野、竹入を出したんだ！」と火を吐く指導も。「会長勇退の時、私は絶頂期だった。しかし、全幹部が私を裏切り、私を辞任させたんだ」
・「北条は山崎正友と毎晩、飯を食い、そして８０億も騙し取られた。それを見ていた秋谷も同罪！」
「２７年も会長をさせたのに！私は最高幹部に裏切られた！陰で言うのはいやだから、皆の前ではっきり言っておく！」
・今は、学会が貴族仏教だといわれている。難もなく、金があって・・・将来、ダメになります。衰亡しますよ。私は戸田先生の言うとおりにやってきた。私は自ら難を起こしてやってきた、なのに今はなんだ？
・(選挙が終わったら？) 総入れ替えする。私以外のことなら、どんどん言っていきなさい。
(先生にお伝えするというより、本人に言って突き上げろというようなニュアンス)
・私を勇退に追いやった裏切り者１０人の名前を公表する。いまは、家族とかいてかわいそうだから、しないけど、死んだら、除名にする。
・私は戸田先生のために一人、抗議にいった。全国どこにでも。秋谷は、矢野を責めないで、・・・２７年間、難を全然難を受けないで、私ばかり攻撃させて……。(私が) どれほど、お前を守ったか。
私を本当に守ったのは、奥さんただ一人だけです。原田(会長)もあぶない（！？)。
・昭和５４年に触れられ、若いきれいな奥さんをもらって、嫉妬して。無慈悲な学会、おそろしい創価学会、やっかみの学会になった。なっ。
・当時の読売新聞（の尊敬する人ランキング）で私は５番目、４人は故人、生きている中では私は１番でしたよ。
(原田会長に向かって) 誰だ、悪いのは？
(原田会長) 北条・野崎・和泉・辻・山崎・・・・・・（あと数人、聞き取れず）
山崎って誰だ？
(原田会長) 尚見です。
もっと悪いやつがいるだろう。
(原田会長) 正友、原島です。
そうだ。竹入、矢野もそうだ。秋谷にも言っとけ。北条死にました、会長になってすぐに。山崎正友も死にました。８０億ですよ。５億５千万とって。原島も死にました。皆な仏罰です。全部勝ちました。ねっ。

※昭和６３年当時、藤原行正の衝撃証言。
「矢野絢也クン、秋谷会長も池田大作打倒計画を画策した！！」(SPA!　1988年7月7日号)
「矢野委員長は反池田の情報源だ　内藤国夫氏への情報リーク」(週刊朝日 1988年8月5日号)
→山崎正友「池田スターリンを裏切る矢野公明党委員長、秋谷創価学会会長の面従腹背あばく」という爆弾手記（週刊現代 1988年9月17日号)。原島嵩が見せてもらったという「留言録」の内容。

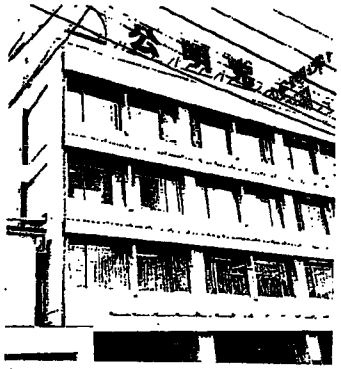
創価学会 公明党 問題 独占 藤原行正 都議／大橋敏雄 代議士 激白対談

盗聴、偽証、裏工作、替え玉投票……すべて事実だ

『矢野絢也クン、秋谷会長も 池田大作打倒計画 を画策した!!』

矢野絢也氏(56) 昭和42年衆院初当選。61年公明党委員長。「代表辞任はごめんだ」とか

秋谷栄之助氏(67) 昭和25年創価学会入会。55年第5代会長。池田氏"側近"のひとり



"池田独裁"のためなら自民党議員を怪すこともある公明党。「いっそのこと政教一致と公言してしまえば気が楽になるのに……」などという外野からの声もチラホラと聞こえだしてきた

池田大作氏(61) 昭和27年創価学会入会。35年第3代会長。54年「四月部会」を結成。名誉会長

「池田氏の口ぐせは"私を守れ"。日蓮正宗の一信徒団体である創価学会の"帝王"池田氏は、信仰の根本である"ご本尊"まで偽造。池田教をつくり天下取りの野望を抱いている」

創価学会、公明党、そこに君臨する池田大作名誉会長……。この三者は、一体、ナニをしてきたのか、そしてナニをしようとしているのか!? 最もその"暗部"を知る男——藤原行正・大橋敏雄両氏が、また"爆弾"を投げた!!

藤原 戦いは始まったばかりだけどぼくらの目的をはっきりさせておこうと思うんだ。

大橋 宏年で議員辞めなきゃならないから、その覚悟せ……という感じやなくてね(笑い)。

藤原 学会と公明党、つまり池田だけど、そのリアクションにはヒステリックなものがあった。

大橋 矢野委員長などは、私に汚職という汚名を着せて除名したくせにいまごろになって「政治の代表責任はごめんだ」などと言ってるらしい。

藤原 池田大作から圧力がかかったことを、自ら告白しているわけだ。

大橋 池田から厳しくいわれると、あの人、ビビっちゃうからね。

藤原 池田大作はいまできえ、こんなことをやるんだから、政治権力を握ったら徹底的に人間を奴隷にしてブチ込むぐらい鬼メシ喰だよ。それが怖いと私らいっているわけだ。

大橋 学会内部で変なことやっているもふんには、コップの中の嵐だけどそうじゃない。それが問題です。

藤原 そう、彼は必死になって権力奪取に入り込み、権力を行使しようとして「自公民」を画策し、それがダメなら「野党連合」とか、公明党を権力に近づけようとしている。来年であるままの公明党が政権に参加すると、大変なことになる。今度の私の池田告発の本心は、そこにあるんですよ。

藤原 みんな公明党や池田を甘くみているけど、そうじゃない。ヒットラーだって第三党で政権に入り、みんなが油断しているうちに、第一党になってしまった。池田大作もヒットラーと同じなんだ。いまのうちに倒さないと危険この上ない。

大橋 政権を奪取するためには、平気でウソをつき、盗聴、偽証、裏工作と、なんでもやる。そこが問題でね。福岡1区の田中恒一さんを降ろし、58年に検事だった神崎武法を出馬させたのも、結局、盗聴事件でモミ消しに暗躍した神崎に対する大作の口封じと恩をきせてオレをさせたんだもの。

藤原 池田親子に関係した弁護士は何人も国会議員になっている。例の東大等の教授にしてもらったのもいる。名誉と金を与えれば回収する、と池田は考えているんだ。

大橋 それにしても「大石寺文書偽造事件」にはあきれたね。自分たちにとっては信仰の根本である富士本山の現法主(法主)の発言をひやかたに偽造したんだもの。

藤原 彼は家柄の悪さ対抗を自分の絶対性にすり替え、有名人の権威を利用したりして自分を日蓮大聖人の生まれ変わりだと思っているわけだよ。だから、なんでもする。国の法律なんかより自分が上だと考えてるんだ。

大橋 自分の地位を自分の絶対性にすり替え、有名人の権威を利用したりして自分を日蓮大聖人の生まれ変わりだと思っているわけだよ。だから、なんでもする。国の法律なんかより自分が上だと考えてるんだ。

藤原 池田大作は45年の「宮本共産党委員長宅盗聴事件」、本山や反対勢力への盗聴事件などをやらせているんだが、神崎は現職の検事なのに、盗聴問題対策委員会に入り、学会のために働いたわけだ。ぼくも一緒にやった仲だからよく知っているよ。

大橋 それがバレて、検事を辞めざるをえなくなった。

藤原 そう。そのとき池田は「お前は検事総長になれる男だけど、その代わり検事総長を使う男にしてやる ぞ」と神崎にいって、福岡1区から衆議院に出したんだ。

大橋 神崎は検事時代に少し福岡に勤務しただけ。関係ないのに公明が強いところだからというのでもってきた。エゲツないですな。

藤原 池田親子に関係した弁護士は何人も国会議員になっている。例の東大等の教授にしてもらったのもいる。名誉と金を与えれば回収する、と池田は考えているんだ。

大橋 「大石寺文書偽造事件」にはあきれたね。自分たちにとっては信仰の根本である富士本山の現法主(法主)の発言をひやかたに偽造したんだもの。

藤原 彼は家柄の悪さ対抗を自分の絶対性にすり替え、有名人の権威を利用したりして自分を日蓮大聖人の生まれ変わりだと思っているわけだよ。だから、なんでもする。国の法律なんかより自分が上だと考えてるんだ。

大橋 創価学会の「政教一致」、それを言葉の魔力術のために利用し、私物化しているとして、池田大作創価学会名誉会長を広明、それが国民に公明党から除名され、だが、「公明党は、刑法の無化政教分離原理まで持ち出し、政治献金の強要や大石寺聖地までを強奪けんかんして、問題をスリ替えた」として、まちも徹底追及している。

矢野クンが池田スキャンダルをリークした

大橋　それに、学会や公明党の幹部逆中は、みんな大作への忠誠心競争に必死だから、なんでもやる。学会関係の裁判で、学会員が平然と偽証するのも、そのことに誇りを持つように教育されているからですね。

藤原　（偽証）いえば、43年の「新宿区替え玉投票事件」。あれはね、アパートの部屋番号などに入れられている投票所の入場券を全部、グーッと何千枚と盗んできて、年格好の合った学会員に投票させた事件でね。何千人と替え玉投票したのに、「捕まったのは10人かそこら。関係した人間を集めて偽証させたからなんだ。

大橋　藤原さんが指導を？

藤原　うん、直接やった（笑い）。胸張ってウソをつくように〝補償犯〟をつくっていった。信仰心に燃えてやったんだ、だから国法なんか犯していいんだ、と指導したんだ。そうすると、みんなウソをつくことが平気になるんだよ。

大橋　九州でも替え玉投票をやったな。藤原がくる前に弁護士と一緒に偽証工作をしましたよ。

藤原　池田大作は、そういう民主主義の根本に反する違法行為をやらせた挙げ、〝法難〟とか称して違反者にメダルまで与えている。みんな信仰上の確信犯でウソも平気。だから、複数の手が伸びないんだな。で、池田大作は、やっていない、関係ない、シラを切ることができる。

大阪で自分が逮捕された選挙違反だって、学会員の偽証で無罪になれた。その時代に、ジャリ紙問題で暴露された公明党参議院（部隊）の田代富士夫だったんだから皮肉だよ。

大橋　引き続き「月刊ペン事件」（注）。池田氏の女性スキャンダルが争われた。学会側は、自分らが新たな月刊ペン社側に対し2000万円減、池田を出廷させないでくれ、と証工作をしましたよね。あれも当初、シラを切っていたけど真実だった。

大阪で自分が逮捕された選挙違反だって、学会員の偽証で無罪になれた。その時代に、ジャリ紙問題で暴露された公明党参議院（部隊）の田代富士夫だったんだから皮肉だよ。

大橋　引き続き「月刊ペン事件」（注）。池田氏の女性スキャンダルが争われた。学会側は、自分らが新たな月刊ペン社側に対し2000万円減、池田を出廷させないでくれ、と証工作をしましたよね。あれも当初、シラを切っていたけど真実だった。

替え玉投票事件では全員偽証

藤原　みんな平気。時間がせまってきて後戻りを見びかせ、世間が忘れてしまうのを待つ作戦なんだよ。

大橋　公明党は池田の私党私兵だから、そのお手伝いをする。ただ、大阪府議員だって昭和26年代の「時期は、反池田だったわけでしょ。

藤原　うん。52、53年ごろは、彼と「池田プライバシー暴露の内部機関」と称したものだよ。あの当時、池田がマスコミに流れ出たけど、あれは金銭、女問題がリークしたんだ。

大橋　あれはすごかった。大作が学会幹部の子供の頭にスミを塗っている写真も流れ出たりしたころですね。

2000億もの集金はどこへ

藤原　中身はゼロだ。いま、学会は7月27日の締め切り日に向けて「財落」に走り回っているでしょ。なんせ、学会員から1500億円、2000億円もを集めようというんだから、矢野氏もカッコいいことといって、学会を徹底洗脳したいんじゃないかな。

大橋　私のところにも「もっと池田批判をやってくれれば、財務で寄付をしなくてすむ」と電話してくる学会員がたくさんいる。99年に、正本堂を建てる時、これが最後といって360億円も集めた。最後どころか、これが金集め始めだったんだ。

藤原　ぼくの家にも電話があるよ。

大橋　お金といえば、（注）駅舎、つまり大作への上納金もひどいよね。池田の遺産だ、外遊だ、5月3日の会長就任記念日だ、地方視察だというたびに2万、4万、5万、最高7万円まで徴収から天引きされてる。

藤原　ぼくら総事長のときは、職員から2万円、3万円と徴収して直接、第一庶務（池田民衆葬）に届けたもんだよ。これは強制的申告しなければならないんだが、「何はしてないな」全部、ポケットに入れている。脱税はする、違法行為はさせる。池田こそ〝闇の帝王〟というべきだな。

大橋　そういう不正を正すことこそ、職員のすることなんだけど、現実に不正を知っていていかに暴し、池田を守るかが第一になる。民社党と仲良くしたり、自民党の反相関事件的な職員を科学に招いてとにかく楽しくやりましょうなんていうことをする。不正が本当かどうか、本当なら正していかなければいけないなんて考える公明党職員は、残念ながらいない。

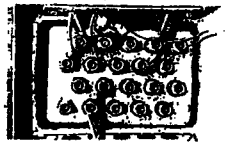
藤原　選挙協力なんていっても、中曽根政権批判を口にしている中で、土地の不正入手などが本山（静岡県富士宮市）周辺になった時に、長から手を回し助けてもらった右民党関係者、金々と支援して、学会の恩を回したりする。それが現実だ。

大橋　日蓮正宗全体は大聖人の「公場対決」が根本精神なのに、大作は裁判やマスコミなどの場に出たがらない。暗い所が好きなんだ（笑い）。

藤原　まさに闇商売。だから、どんな事件が起きてもトカゲのシッポ切りで生き延びてきた。池田の側近や部下も処罰しても意味がないんだ。

大橋　大作のような血統書は、健全な民主主義の敵なんだから、これをぼくらは闘うために戦っている。それをわかってほしい。

藤原　池田という人間の怖さを、他人事と思っていたら、とんでもないことになる。彼の野望をいま摘み取らないと、大変なことになるんだ。池田打倒は学会と公明党内の問題じゃない。日本全体の問題なんだ。



創価学会は戦後絶大の共産党の出現をかわすため、創共10年協定という〝仲良条約〟を実現。その裏では富士宮支部長宅の電話盗聴などの犯罪行為もしていた。時効で刑事罪は逃れたものの、反社会的行為が続々明るみにでた

2000万円で裁判の裏工作

藤原　だからね、（注）矢野氏が「池田スキャンダル」を学会内部に流出させたりしてはいかん、と考えていた。チャンスがあれば潰さなければいかんと思っていたんだよ。そんな矢野氏の思いと矢野氏の思惑が一致して池田スキャンダルが流出した、という図式だな。

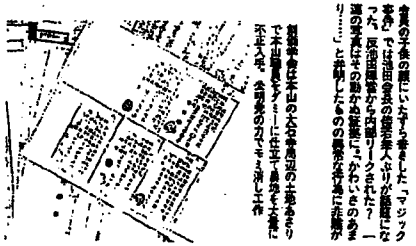
大橋　しかし、大作は黙れなかった。

藤原　うん。で、顧問、参謀、参謀との対立問題は、学会側が本山に銭を入れ、池田が名目上学会員に引きずられる作戦に出て勝決した。矢野氏も矢野氏も、また勢力を盛り返した池田の側に回ってしまった。それが現状だ。

大橋　矢野氏は学会のことはよく知っているが、委員長になると豹変したね。党内反対派の旗になった。公明党を維持、発展させるためには、創価学会の力が絶対必要である。そのために大作の支持が必要……と。

藤原　でも、世間には「池田を利用しているだけ」というポーズをとるわけだ。彼は世間や政治評論家などに100%池田に屈服していると思われたくないわけさ。かといって池田に殺されても困るから、巧みにバランスをとりながら泳いでいる。しかし本当はキンタマ、もう握られている。矢野氏なんか、池田に言いたい放題、いっぺんにつぶされるよ。

大橋　どこかの週刊誌でおち上げていた「公明党解党論」なども、やはりポーズの一つだな。



創価学会は本山の大石寺周辺の土地ふくりで本山関係者グループに仕立て悪質な不正入手、公明党の力でモミ消し工作

食事の会の席にたすき掛けした「マジック軍団」では池田会長の盗聴犯人ぶり自慢になった。反池田組織から内部リークされた？　一連の事件はその動かぬ証拠に。「かわいそうのあまり……」と弁明したものの裏方役者に正義が

証人になった盗聴通子元参議

秋谷会長は池田押さえ込みのチャンスを狙った

夏の一歩は大きい。

ちょっと踏み出せば大きくはずみがつく、夏は青つ季節です。あなたの日頃の夢を充実させる絶好のチャンスです。

ボーナスは〈ダイワ〉でまとめて

ALL in ONE オール・イン・ワン

明日のユメは、ダイワの運用プランで確実に…。
期日指定定期、アセットミックス（DAM）など

今日のプランは、ダイワのローンですぐ実現…。
カードローン、大型フリーローン（マイライフ）など

大和銀行
Daiwa Bank

藤原行正都議の衝撃発言

「矢野委員長は反池田の情報源だ」

「池田批判」をつづける藤原行正都議

内藤国夫氏へ情報リーク!?

創価学会の内幕を長年にわたってマスコミに流していたのは、現公明党委員長の矢野絢也氏だ――。池田大作名誉会長を「文芸春秋」誌で糾弾した大橋敏雄代議士が公明党から除名されて以来、「反池田」を旗幟鮮明にしている、造反派の闘将・藤原行正都議が爆弾発言した。

「気の毒で見ておられん。狂っちゃったんやろな」と、当の矢野委員長は言うのだが……。

――藤原さんを池田名誉会長の「元側近ナンバーワン」と紹介している記事が多いようですが。

藤原　池田が学会の会長に就いてまもない昭和三十六、七年ごろ、私は、渉外局長、広報局長、体育局長の三つあった局の局長を兼ね、池田とほとんど行動をともにしてましたから。

――その藤原さんが、また、なぜ、池田批判なのですか。

藤原　小さな不満というか、彼の、宗教者としてどうにも納得いかない面が私の中でだんだんに膨らんできたといえるかと思います。

――具体的に言うと？

藤原　一例を挙げると、渋谷区松涛町に学会の会館があり、彼はそこで寝泊まりしていたのですが、毎朝、僕と秋谷（栄之助・現会長）とで報告に行っても、十時ごろまで頑きてこない。何かと言うと、本人は「不眠不休」なんて いうのに、夜、寝る前には、三十代なのにマッサージです。そのことを自体を思いとは思いませんが、僕ら、側近の前で言ったりしたりすることと、一般の学会員の前とではまるで違い、いい気がしませんでした。宗教団体の長なのに、昔から裏表がありすぎるんです。本山・大石寺での研修で、ある朝、みんなで勤行しようとしたら「まだ、池田先生が休んでらっしゃるから、ガを出さないように」と言われたこともあります。

また、あの大騒きになった出版妨害事件のときだって、池田は世間に非を認め、政教分離を宣言しながら、学会や公明党幹部の前では、「政教分離なんてことは、世間にそう思わせておけばいいんだ。竹入（義勝・前公明党委員長）、お前、分かっているだろうな」と言ってました。松下幸之助氏と対談したりした頃も、そのときは美辞麗句を並べていながら、陰では「あのおいぼれが……」です。ずっと以前、中曽根代議士（前首相）に会った後なんかでも、「あいつは小僧だ。総理になりたいと言っていたので、よしよしと言っておいた」……。

――しかし、いわゆる出版妨害事件では、藤原さんが、学会側の窓口として、藤原弘達氏と親しく渡り合ったわけですね。弘達さんのほうは、あなたのことを「思い出しても不愉快」というふうに言っています。

藤原　藤原弘達さんのところへ行ったのは確かに私です。池田に、行ってなんとかしてこいと言われて、いろいろお話ししたが、相手にしてもらえない。そうしたら、今度は、秋谷と二人で行けということで、また行った。そのときのやりとりを弘達さんがテープにとり、言論弾圧の証拠だ、国会で大問題になるぞと言い、それを週刊誌も書いた。このため、池田はすっかり怯え、竹入を通して田中角栄（角栄・元首相）に泣きついたわけです。ところが、角さんが弘達さんに話したばかりに話がかえって広がってしまった。

――「政教分離」を世間には嘘伝しながら、学会内部は違というのではどうかと思います。でも、創価学会は自ら理想とするところを現実の政治に生かすんだと、政教一致を貫いたほうが、むしろ自然なのではありませんか。

藤原　私もかつてはそう考えてました。「学会幹部が自に見えて悪くなってきたのは、やはり、昭和四十五年に政教分離を言ってからですから他」外部には「政教分離」、なかでは「一致」といった嘘をついているうちに、嘘が嘘を呼び、その綻びを繕うために、また嘘を重ねるという中で、お互いの信頼感も崩壊感も失われ、何もかもおかしくなって、いまでは、ただひたすら、池田への忠誠心競争に明け暮れる、全くいびつな組織になってしまいました。

「池田は千年に一度の怪物」

――もう少し具体的に……。

藤原　「政教一致」の中身を見れば、とてもあなたのように言うわけにはいかないということです。たった一人の個人が宗教の名を借りて、政治上の行動までをも決め、他はその盾蓋にひれ伏すだけという、現在の学会の姿が社会全体に及んだら、それは恐ろしいことになる。

――しかし、宗教団体をバックにしている公明党が「政教分離」を言うこと自体に非常な無理があるのではないでしょうか。

「鉄の四縛」を持った創価学会に何が起きているのか。右とは矢野絢也公明党委員長。左は池田大作創価学会名誉会長

――「政教分離」を世間には嘘

1988-8-5

藤原　そうした言い方はできると思います。だから、矢野（絢也・公明党委員長）君も先日、「週刊朝日」（七月一日号）で「公明党解党論」をぶっていた。要するに、私は、政治を支配するのはあくまで生身の人間であって、宗教というものが抽象的に支配するのではないのだと言っているんです。政治と宗教が一緒でいいということは、実際上、「池田大作」といった個人が、宗教の教義や権威でもって、政治も日常の行動も支配して構わないというのと一緒です。実際はもっとひどいが、イランのホメイニ体制を想像されたらいかがでしょうか。百年に一度、あるいは千年に一度、池田みたいな怪物が現れても、市民の生活に影響ないような制度をつくっておかなくてはなりません。

——でも、やっぱりよくわかりません。そんなにひどい池田さんを、大多数の学会員は、それこそ盲目的に信じ見ておられる。むしろ、藤原さんたちのほうが圧倒的に異色が強い。どうしてでしょう。

藤原　二つあると思います。まず、大多数の会員は池田名誉会長を表面的にしか知らない。たとえば、以前、創価学園の入学式で、池田が挨拶している最中、赤ん坊が泣き出した。こういう場では、通常、池田は黙殺するのがいいのですが、虫のいどころが悪かったのか、「つまみ出せぇー」と怒鳴った。でも、その場にいなかった人は「あの優しい先生がそんなことを言うはずがない」と思うので、実際に聞いた人がそれを口にすれば、ためにする話だと思われる。損で危険ですから言いません。

創価学会本部のある創価文化会館（東京・信濃町）

一方、幹部は徹底的に分断され、互いに疑心暗鬼になっているうえ、生活を池田に握られているため、池田の行動について見て見ぬふりをしている。それどころか、一般の学会員に接するときは、「池田先生、池田先生」の連呼です。隠しテープが池田に渡って、忠誠心が薄いと、いつやられるか分からないから、みんな、必死です。

生活を握られているということは、たとえば、こういうことです。私のところは、家内が当初、小学校の教師をしていました。三十五年秋、家内が池田に本部に入るよう言われ、すったもんだの揚げ句、二学期の終わりで退職しました。ところが、いざ本部に行ってみると、池田はそんなことを言った覚えはない。行正によく相談しろ、とこうです。私は私で、池田に、職会に専念するよう言われて、やはり会社を辞めました。こうやって、学会や党の幹部は、学会、つまりは池田に頭らないことには家計が成り立たないようにしむけられる。くみしやすしとみれば直ちに、てごわいとみれば時間をかけての違いはありますが、どっちみち、池田の思いどおりです。でも、面白いものですね。そんな池田が、「吹けば飛ぶ男」と本人にも言っていた大橋さんに嘲みつかれたわけですから。もっとも、同じ国会議員といっても、矢野君は例外で、立派な感覚を先年、自力で通てたというのですから、ちょっとしたものです。歳暮は大橋さんと同額だったはずですから……。しかし、その矢野君だって、竹入君だって、党の公認、ということは、池田の了承なしに選挙に出れば単なる泡沫候補です。だから、池田には刃向かえない。

——そうしたなかで、池田氏に弓を引いておられるわけですが、

「ホテルでの原稿チェックも」

——大橋議員が、学会員の女性に出したとされる恋文が、党機関の創作というのは本当ですか。

藤原　大橋さんや奥さんは、まったくの原物だと言ってます。字体を似せた手紙をデッチ上げるぐらいのことは平気でやるのがいまの学会です。

——党が私信をデッチ上げ、それを外部に発表するなんて、たとえ、組織防衛のためだといっても、破廉恥極まる犯罪です。本当にデッチ上げなのですか。

藤原　僕は大橋氏の言うことを信じます。筆跡鑑定すればすぐ分かることだ、と大橋さんは言ってます。ただ、いずれにしても、大橋さんは池田を批判したことで党を除名されたのです。これだけはっきりしています。検察も問題にしていない単なる政治献金、しかも、きちんと届け出てあり、福岡県本部や県議会議員だって同様に受けていた政治献金を受託収賄の疑いがあると党は中傷したのです。では、砂利運搬船汚職で逮捕された田代（富士男・参議院議員）の場合はどうか。

こちらは、地検が証拠ありとして逮捕までしたのに、委員長の矢野君は、無実だという田代の「弁解を信じたい」と言うのです。この差は何か。田代は関西で、池田教のナンバーワンといわれている男です。つまり、矢野君としては、池田の手前、彼を厚く遇えない。一方、池田に刃向かった大橋さんのほうは、デッチ上げでも、幹八百でもなんでも並べて、池田の歓心を買おうとしているということです。

——ところで、今年は二千億円を目標にした特別財務、寄付集めがこの十七日あったのですか。

藤原　去年は千五百億円を集めたということのようですが、今年は、藤原や大橋の「腐」が出たのだから、去年を下回れば、腐に食わけたことになると、ずいぶん金が飛んでました。一口二万円で何口でも自由ということになっていますが、実体は、地区ごと、支部ごとの競争で、老人世帯も母子家庭もお構いなしですから、大変です。

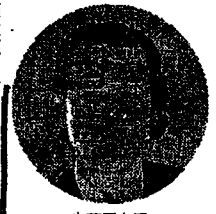
——「財務」が嫌で、いまは活動をやめているという非藤原派の中堅学会幹部にお目にかかったことがある。やはり「血も涙もない集め方」とか憤慨してました。

秋谷栄之助氏

藤原　いくら集め、何に使ったのかもいっさい明らかにしてませんしね。かつて、われわれが「カネ集めする邪教」といっていた天理教や、立正佼成会その他から、われわれがいま激しく批判されているんです。このことを学会幹部によく考えてもらいたいと思います。私のところには、いま、実に多くの方から、財務のことで助けてくれと訴えてきてます。

——矢野委員長の「公明党解党論」については、どうお考えですか。

藤原　矢野君は変わったです。心の中までは分からないが、ほんとに変わったと私は見ています。このことはまだ全く表に出ていませんが、内藤国夫さんは学会中枢部での出来事を密かにリークし続けていた一人は矢野君です。



内藤国夫氏

警視庁のSP（要人警護係）を帰した後、ホテルで密かに会い、顔を寄せて、雑誌に載せる原稿をチェックしてました。だから、内藤さんのリポートもあれだけのことが書けた。内藤さんに情報を流していた幹部らもやがて次々に顔面を脱ぐでしょうが、矢野君のことはもう明らかにしておいていいでしょう。

「内藤氏は偽名で電話連絡」

——それは本当ですか。驚くと言ったら失礼ですけど、ためになる話なら、重大な結果を招くことになります。

藤原　だって現に、内藤さんに情報を流して、書いた文を訂正しながらやっていたことは百パーセント知ってますから。百パーセント、はっきり知ってるから断言しているんです。そうでなければ言いません。

——いつどころからですか。

藤原　二人の関係がいつからのことかは知りません。五十三年どろからなのか、もっと早い時期からなのか、僕より先の関係ですから、いつからそうなのか、僕は知りません。二人と一緒に川崎国際にゴルフに行ったこともある。とにかく親密ですよ、二人は。

——いや、ゴルフぐらいは「内藤さん、少しお手やわらかに頼んまっせ」ということで、行くこともあるでしょう。

藤原　その程度の関係なんかではないと申し上げているんです。

——いつどころからですか。

藤原　二人の関係がいつからのことかは知りません。五十三年どろからなのか、もっと早い時期からなのか、僕より先の関係ですから、いつからそうなのか、僕は知りません。二人と一緒に川崎国際にゴルフに行ったこともある。とにかく親密ですよ、二人は。

——いや、ゴルフぐらいは「内藤さん、少しお手やわらかに頼んまっせ」ということで、行くこともあるでしょう。

藤原　その程度の関係なんかではないと申し上げているんです。

要するに、池田を破滅したい、できれば倒したいということで、有能な内藤さんの力を借りた。それはもうはっきりしているんです。もし、名誉毀損で敗訴になったら証言を……。まあ、そんなことになるはずはないですがね。池田はいま矢野君を切れません。

——でも、矢野委員長は、藤原さんが「矢野さんもかつては改革派だった」と言われたことを否定している。

藤原　しかし、ホテルニューオータニで、一緒になって原稿を直していたことを私は知っています

から。そして、内藤さんは「新宿の田中」の偽名ということが、明らかになりました。矢野君ご自身は、偽名を使ってまで連絡していたが、いまは、違う名前かもしれませんが。ですから矢野君が何を言おうが関係ない。

——もう一度うかがいます。そのときの矢野さんの狙いはどういうことですか。

藤原　ですから、内部ではどうしようもないほど、池田の力が影響力で、外部の力を借りたということです。

——このことは、だれとだれが知っていますか。

藤原　内藤さんと矢野君と僕と、たぶん、秋谷さんですかね。

——えっ、秋谷会長も。

藤原　はい。で、大橋さんを切った矢野君らの言動を見てると、単に、僕らを裏切ったというより、自分自身の良心を裏切っていると考えざるを得ないんです。

——では、解党論について。

藤原　はい。これには、いくつかの解釈と見方があるんです。一つは、池田の支配力をなんとかそぎたいという考えが、もともと彼にはある。ですから、さっき言ったように、学会ウオッチャーたち、中心は内藤さんですが、そういう外部の人たちの力を借りながら、ご自身は部員を次の選挙で降ろされた後、どうされるのですか。こうお聞きするのも、藤原さんをめぐって、不動産業界や大手建設会社との癒着がいろいろウワサされているからですが。

藤原　そうしたウワサを流しているのも、また、党らしいのは残念ですが、私に関してはどうお調べになっても何もありません。過去、私が関与した案件について、党は一切合財当たったけれども違に何も出てこなかった。したがって除名もできない。多少とも返り血を浴びる恐れがあれば、僕も今日、こうは元気でいられません。

ら、池田を牽制し、政権一致を改めたいという面がある。つまり、政界再編成的な方向へ持っていくことで、池田のクビキから逃れるという道です。ただ、政界再編だって、池田が学会に言っている限り、できないということは、矢野君だってよく知っているはずだ。

「矢野委員長こそ池田批判の急先鋒で、内藤国夫氏への最大の情報提供者だった」という藤原都議の証言は衝撃的だ。

内藤氏は元毎日新聞記者。昭和四十四年に「公明党の素顔」（エール出版）を発表以来、池田氏の動静を中心に、創価学会"奥の院"の出来事を精力的にリポートしてきた。

この「公明党の素顔」は、同年公刊された、評論家・藤原弘達氏の「創価学会を斬る」（日新報道）とともに、学会の出版妨害事件のもとになった。その内藤氏に内部情報をリークしていたのが矢野氏であると、藤原氏は言うのだ。

当の矢野氏は、真っ向から否定してこう反論した。

「内藤さんとは二十年越しでお付き合いしている。それは事実だ。ジャーナリストと、党の書記長、委員長の関係とあれば、付き合いがあって当然ではないか。電話での問い合わせはときどきある。『（学会や公明党で）これこれのことがあったと聞いたが……』と、事実関係を聞いてくるから、『それはデマだ』と言ったりもする。なにもかゆくもない宗教法人課税の強化を、矢野君が言い出しているのと一緒で、要するに、ごまかしです。公明党の場合、参院選挙では国民会議の非学会員が多くて二期約束しているから、どっちみち、選挙に熱が入らない。そんなことなで、党勢が目いっぱいのところとなると、いま、彼があいうことを言い出す意味は何か。週刊誌を中心とした池田批判の圧を緩めようとしているのではないか、という見方が出てくるわけです。それに今度の解党論はまず参院選挙で導入しようというのでしょ。創価学会の特別財務にとって痛くもかゆくもない宗教法人課税の強化を、矢野君が言い出しているのと一緒で、要するに、ごまかしです。公明党の場合、参院選挙では国民会議の非学会員が多くて二期約束しているから、どっちみち、選挙に熱が入らない。そんなことなで、党勢が目いっぱいのところまできているこの時期の解党なら、池田の子承も得やすい。そんな計算が見えみえですが、池田は何が自分にとってプラスかマイナスかを測る一種の天才ですから、矢野君の下心などとうに見破っているはずです。

本誌・永栄 潔

取材に応じただけ 矢野氏
取材源は明かせぬ 内藤氏

✓「それも違う」とかなる。

内藤さんのもとに入る内部情報と称する話は、百が百、ねじ曲がっているので、こちらとしてはきちんと真実を証明する。なんら、やましいことはない」

「ニューオータニで、内藤さんの原稿をチェックしたとか、電話での確認とかは、話に具体性を持たせるための、藤原氏の創作だろう。池田名誉会長と、秋谷・矢野とを離間させようとの狙いだろうが、痛くもかゆくもない。私が、内藤さんに何事かをリークしたというのなら、いつ、どういうことを内藤さんに漏らしたのか、藤原君も具体的に挙げたらいい」

そして、

「デタラメもいい加減にせんと、いくら温厚な矢野さんでも怒りまっせ」

と結んだ。

一方、内藤氏は、

「ジャーナリストに、その情報源を聞いたって、答えるわけがないでしょう。藤原さんが何を言おうと、関知しない。いっさい、ノーコメントです」

という。こんな場合のノーコメントは、事実上、肯定していることにならないかとあえて尋ねても、

「どう解釈しようと、あなたの自由」

ただ、内藤氏は、聞いてもいないのに、

「矢野さんとゴルフをしたことだって、この間、矢野さんに言われて思い出したぐらい」

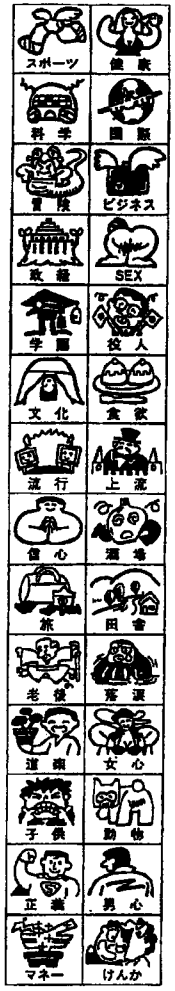
と付け加えた。矢野委員長は、

「内藤さんとは、もうしばらく話してないなあ。ゴルフの話？いや、そんな話は全くしてないけどね」

と話している。この差は、内藤氏の単なる思い違いか、矢野氏の単なるモノ忘れなのか。

ブナンでアルバイト

カット・清川 信敏



お見合パーティーのあの色男 みんなこぞってサクラだったの？

東京都渋谷区に住むOLのN子さん（さいは、六月五日の日曜日、目白の椿山荘で開かれた、上野の結婚情報サービス会社主催のお見合いパーティーに参加した。費用は一万五千円。

その日、会場には男女五十人ずつ計百人が集まった。男性は医者、弁護士、商社マンといったエリートばかり。女性が丸く円陣をつくって座り、外側を男性が取り囲む。そして、三十秒ほどお互いに自己紹介しながらずれていく。

会が終わると、担当者がN子さんのもとにやってきた。

「お気に入りの方がいらしたら、名簿に丸をつけてください」

N子さんはためらわず、青山に事務所を構える、二十五歳のインテリア・デザイナーのOさんに丸をつけた。若さといいスーツの着こなしといい、オジさん然としたメンバーばかりのなかで、彼一人異彩を放っていたからだ。

それから三日後、N子さんは担当者立ち会いのもと、Oさんと再会した。するとOさんは、担当者が電話で席を立ったスキに、サッと名刺を取り出してこういった。

「こんなこと、本当は違反なんだけど、よかったら電話ください」

実はこの会は、三十五万円の費用を払って、会員になってからでないと、相手と交際できない規則になっていたのだ。

その後、二人は何度か会って食事したが、彼女がいざ交際を申し込むと、Oさんは約変した。

「君が会員にならないと付き合えないんだよ。ボクと本当に付き合いたいんなら、早く会員になってよ!!」

と言い出し始めたのである。Oさんと交際したい一心のN子さんは、とうとう夏のボーナスをはたいて三十五万円を払い込んだ。晴れて会員になった彼女は、担当者を通してOさんに正式に交際を申し込んだが、こんどは担当者が、

「彼はアメリカ留学を控えた身ですからねえ。ほかの人を探したほうがいいですよ」

と、横目ながらOさんをあきらめさせようとするのだった。それからしばらくして、N子さんはパーティーで知り合った女性二人の話から、おかしな事実を突きとめた。この二人も当然ながらOさんを指名したのだが、件のOさんは、彼女たち二人にも、

「ボクと付き合いたいなら、会員になってよ!!」

と勧めていたのだった。

え・大川 清介

酒飲み運転 警官も酔っぱらい 恐怖く

バンコク在住のH子さん（さい）宅に、日本人の友人二人が訪ねてきたのは、七月十九日の夕方。その日は、たまたまH子さんの知人のタイ人も訪ねてきて、八人で酒盛りが始まり、四時間ほどでメコンと呼ばれるタイのウイスキー四本が空になった。

友人二人は、その日の深夜便で日本に帰る予定で、夜の十一時、すでに足元も危うい酩酊状態のタイ人のMさん（さ）が、トラックで空港まで送ることになった。

タイでは酒酔い運転など日常茶飯事らしく、周りのタイ人は、「マイペンライ、マイペンライ」しかし案の定、Mさんは出発して間もなく交通事故を起こしてし

リバブル 輸入家具・雑貨
LIVABLE
高橋金物出版中

●大反響！

山崎正友 創価学会元顧問弁護士 爆弾手記

第3弾

『池田スクープ』を裏切る 公明党 矢野委員長、秋谷創価学会長の 両従腹背あばく』

池田氏のスキャンダルをもらす一方で、忠臣ヅラしてかつての同志を弾圧する矢野、秋谷の両氏。この二人を、池田氏は「秋谷はずるい男だが、私にすべて握られている。矢野は頭の病気なんだ」と語り、すさまじい喧嘩が……

▲公明党本部と矢野委員長

「情報源は矢野」と前会長が

大橋敏雄・藤原行正連合軍のターゲットは、いまや池田大作のみならず、大橋氏を除名した矢野絢也公明党委員長、その黒幕たる秋谷栄之助創価学会会長にも及んでいる。

私が55年、池田大作批判に立ち上がったとき、私を弾圧した直接の下手人も秋谷氏と矢野氏だった。とくに矢野氏は、警視庁と検察庁方面への働きかけや自民党首脳との裏取引を担当し、私を逮捕、起訴させた張本人である。

もっとも私は、ターゲットを池田に絞り、雑魚は無視した。しかし、大橋、藤原両氏の立場は私と違う。実は彼らにとって「秋谷、矢野両名は、かつて共に池田を批判し、その引き降ろしを画策した同志であった」大橋氏と藤原氏が初志を貫き、いま池田批判に立ち上がったのに対し、学会会長、党委員長に取り立てられた秋谷・矢野コンビは、逆にかつての同志を弾圧する側に回ってしまった。大橋、藤原氏にとって、その汚い裏切り行為は許せないだろう。

実をいえば私が創価学会にいたころは、秋谷、矢野、藤原グループと対立関係にあった。彼らが池田大作に対する陰謀を企てていたころ、"創価CIA"と呼ばれていた私は、それらの動きをキャッチして池田をガードしていたのである。

昭和52年ごろ、マスコミへ創価学会の極秘情報が大量に流出したことがあった。"特別財務1400億円集金の実態"といったものから池田大作の私生活に至るまで、そこにはごく限られた幹部しか知り得ない事実が含まれていたのである。さらに流出した情報には、池田のガード役としての私を攻撃する材料も含まれていた。私たちは事態を深刻に受け止め、対応策を検討した。

そのときマスコミへの情報リーク源として、当初から名前が上がっていたのが、矢野、藤原両氏である。53年4月、北条浩理事長（後に会長。故人）を中心とする秘密会議が開かれた。出席者の一人であった原島嵩教学部長（当時）による会議のメモが、いま私の手元にある。それには次のような結論が記されている。

「これらマスコミによる学会批判については、矢野の影を拭い難い」

●原島嵩元教学部長「会議内容も記録した大学ノートは、いまも持っています。それによれば『情報源は矢野』、と北条さんがハッキリ言っています。要するに矢野さんはクロ、と判断していたんです」

後に私は公然と池田批判に踏み切り、学会から除名された。そして多くのジャーナリストたちと接する機会を得た。その結果、当時の結論が間違っていなかったことを確信した。いわゆる創価学会首脳陣のなかで、マスコミの情報源だった人物は十数名にのぼっていた。なかでも秋谷、矢野、藤原の三者が、とくに重要な役割を果たしていたのである。

最近もあるマスコミ関係者から、こんな話を聞いた。

「矢野さんは、"新宿の田中"などといった偽名で電話をくれたり、『ここはちゃうで』とか『これはもっとおもろい話なんや』などと言いながら、自らゲラ直しもした」

別の出版社首脳によれば、秋谷氏も負けてはいない。

「池田のことなら思う存分、大いに書いて下さいよ」

とマスコミを"大いに"煽っているのである。

秋谷、矢野氏らは、マスコミに情報をリークすることによって、池田大作の専横を牽制し、また自分たちが権力を握るのに邪魔な幹部を巧妙に脱落としていったのである。

秋谷氏は、池田側近といわれた福島源次郎元副会長、原島嵩氏らをしだいに追い落とし、北条浩前会長の死後、池田側近ナンバーワンとして会長の座におさまった。

一方の矢野氏も、だれかが竹入義勝前公明党委員長の子息のスキャンダル（東海大医学部不正入学疑惑）をリークしたことにより竹入氏の退陣が早まり、その後釜に座れたのである。

ここに至って、かつての"反池田"の同志であった藤原氏、大橋氏が公然と造反した。二人の期待にもかかわらず、秋谷、矢野両氏にとって、もはや同調するメリットは何もない。無情にもこれを打ち据える側に回ったのである。

▲創価学会本部と秋谷会長。右上は山崎氏。中央は池田大作名誉会長

1988・9・17

情熱の白鶴

白鶴ドライ
生貯蔵酒缶
さらりと新発売

清酒二級
350ml詰 350円

ハクツル
ドライ生貯蔵酒
アルミ缶
白鶴酒造株式会社

1988-9-10号

かつて「月刊ペン事件」への対処に当たり、秋谷・矢野ラインは示談に反対、強硬に裁判を主張した（『政界裏面史』）。が、いま思い返せば、池田が証人出廷せざるを得ないように、故意に仕向けたのではなかったか。

池田による最近の狂気じみた金集めも、秋谷・矢野ラインは黙ってなすがままにしている。池田に自滅の道を歩ませ、相対的に自分たちの支配力確立を図る作戦とみられる。

そのため、ときには池田のスキャンダルをマスコミにリークしたり、あるいは忠臣面をしてかつての同志を弾圧する。"面従腹背"とは、彼らのための言葉である。池田が暴逆非道の限りをつくし、築き上げた巨大な帝国とその莫大な資産様様を狙って、手段を選ばないのだ。

「池田大作は、スターリンと並び、今世紀でもっともアグリー（醜い）な権力者だよ」

先日、大学の先輩に当たる作家と話をしたとき、彼は池田をこう定義した。スターリンは、血の粛清をともなった暴政で大国ソ連をつくり上げ、権勢並ぶ者なき状態にあった。しかし、死後は「悪党」のレッテルが貼られ、「スターリン」の名を冠した都市や街路、記念碑からその名が一掃された。

いま"生き仏"といわれ、「池田」と名付けた建物を全国に何十棟も建てさせる池田大作も同じである。死後はスターリン同様、1年もしないうちに悪党にされ、あらゆる施設から名前が一掃されるに違いない。

竹入に比べたらチンピラだ

"ポスト池田大作"を狙う秋谷・矢野ラインは、そのときに備えてあらゆる権謀術数をめぐらせている。しかし、池田が悪業の限りをつくして集めた金を、手を汚さず、きれいな顔を表って受け継ごうとしても、そうはいくまい。池田もそんな二人の魂胆を知りつくしている。

かつて私は、秋谷、矢野両者の密かな逆心を池田に伝えたことがある。そのとき池田がこう言ったのだ。

「秋谷なんてヤツはな、私が小指1本動かせばビリビリする男だ。友さん、ヤツはずるい男だが、私にすべて握られている。心配ないよ。矢野は頭の病気なんだ。ときどきおかしくなるから気をつけなくてはいかん。だが竹入に比べたら、ほんのチンピラだよ」

池田の自尊心は、そんな彼らを許せるはずがない。二人の本性を知りつくしたうえで、いまは懐に蝮を飼う心境で用いているはずだ。やがて驕ぎがおさまれば、"殺気死して花街様ら"の時どおり、秋谷・矢野コンビに対する報復が始まるのは間違いない。

かつて原島氏は池田の"遺言状"なるものを見せられたことがある。そのなかに「次の者、絶対信用すべからず」という項目があり、小泉隆、和泉覚、辻武寿氏ら、初代牧口常三郎会長以来の中枢幹部の名が記されていたという。彼らがかつて先輩面をして自分を見下した、という理由であろう。池田大作という男は、実に執念深いのだ。

■原島嵩氏「私が見たのは『留言状』と称するものです。内部が白紙の『仏教哲学大辞典』のつか見本に、『代々の会長は池田家を守れ』などと世間知を匂わす遺言的なものを含め、池田氏の思いがさまざまな項目にわたって書き記されていました。たしかに『使用すべからず』として、和泉さんをはじめとする何人かの名前が書かれていましたね」

おそらく『遺言帳』の続きには、『秋谷栄之助』および『矢野絢也』の名が追加されているはずだ。

矢野氏は創価学会問題が起こるたびに、世論の批判をかわそうと"公明党解党論（亡の時党と合体して新党をつくる）"なるものをブチ上げる。池田大作も言論問題（45～46年）や本尊模刻問題（53年）など、危機に陥るたびに民社党や社会党に対し、公明党を譲り渡すかのような言辞を弄して巧みに批判をかわしてきた。ところが世論の批判が沈静化するとともに、彼らの話は空証文に終わるのが毎度のパターンである。

●藤原行正氏「公明党解党論というのは、中軌で議論されたものではなく、矢野君が勝手に唱えていることです。かつてマスコミに情報を流し、池田を批判、牽制することにより、その影響力をそこうとしました。解党論も同様、池田を守るポーズをとりつつ、実際は党に対する池田の影響力排除を企図したもの。ところがいまや池田批判をかわす方便に使っているんです」

かつて社会党右派の江田三郎氏との江公民連合を掲げて動き回っていたころ、他党幹部との会合を終え、学会本部へ報告に来た矢野氏がうそぶいた。

「イヤあ、まったくやる気がないのに、いかにもやる気があるように芝居せにゃあアカンのやから、ごっつう疲れますワ。わしもエエ役者になりましたワ。ガハハハハ」

今もきっとこうボヤいているに違いない。

「公明党解党論なんてわけのわからん、できもせんことをもっともらしゅう言うのは、ホンマ疲れまっせ」

税制国会での協力を餌にし

55年の落れ、造反した私を何としても遮断させ、さらに自民党創議連（創価学会問題対策議員連盟）の活動を封じるため、創価学会・公明党は当時の鈴木善幸首相や二階堂進氏らと取り引きした。その結果、公明党はにわかに自民党にすり寄り、その延長線上に二階堂擁立劇があったのである。

今度はどのような政治取引が展開されるか興味深い。おそらく池田は、竹下政権にすり寄り、税政国会で公明党が推議に協力することを餌に、国会や検察が創価学会問題を静観するように要請したと思われる。そしてそれは成功したかに見える。

政府自民党にとって、池田大作ほどありがたい存在はなかろう。池田のスキャンダルたれ流しのおかげで、彼を人質に取ったも同然で、創価学会・公明党もいつでも自由に操ることができるからだ。

そんな池田の周囲を固める秋谷・矢野コンビは、宗教家としてはもちろん、政治家としても卑怯すぎる。

●矢野絢也公明党委員長「山崎氏は造反者で、しかも創価学会を恐喝したとして裁判沙汰になっている人物です。したがって彼の発言は、はじめから中傷意図をもって、事実でないことを捏造していると思われます」

藤原氏らは、「1年以内に池田を倒す」と豪語しているが、政府・自民党や秋谷・矢野ラインの思惑もあり、池田が簡単に倒れるとは考えにくい。

池田大作が倒れるのは、次のようなケースしかないだろう。

●三越の岡田茂前社長の例にしたがい、最高幹部会員が造反し、池田名誉会長の追放を決定する。

●日蓮正宗管長が、池田を破門する。かつて16世日達上人がこれをチラつかせ、池田を会長辞任へ追い込んだ。

●国会あるいは司法による手入れ――いずれも動く気配はないが、唯一、矢野グラスが造反すれば可能である。

●造反が全組織に及び、選挙で公明党が惨敗する。可能性としてあり得るが、道は遠い。

●病気や不慮の事故により、池田自ら退陣せざるを得なくなった場合。これは常にあり得るケースといえよう。

（おわり）

情熱の白鶴

北大路に吹く風。

ひんやりとした口当り。さわやかなノドごし。それは、北の大きな路を吹きぬけていく涼風のようだ。ハクツル冷やし生貯蔵酒。生の風味が大変おいしい。白鶴独自の仕上げ法で酔いさめもいい。風味はもちろん容器まで特に若い女性の間で人気がある。香りがよくて飲みやすいからだ。夏に向けては、まず、涼味が優れる。

ハクツル
冷やし生貯蔵酒
蔵出しのうまさが生きている。
白鶴酒造株式会社

資料③　現最高幹部の指導

【参考】正木理事長指導（2009年1月）

そしてもう一つ、私が今日一番申し上げておきたい点、皆さんにお伝えしたい点がこの点なんですが、「創価の新時代を開くために」こう言われました。この「創価の新時代」ある意味で何度か先生はお使いになっている言葉ですし、ある意味で受け止める側によってはありふれた言葉に聞こえるかもしれませんが、重大な意味が、私はこの言葉に込められていると思います。そのことを申し上げて、私のお話とさせていただきたいと思うんですが。

数年前から池田先生は54年の勇退の問題についてかなりストレートに触れられるようになりました。皆さんもお気づきだと思います。本来であればきっと活字にはならないだろうなと思われるそういう54年問題に触れたご指導が、もう夏の最高協議会そして本部幹部会のスピーチ等で活字にまでなってまいりました。私は何故、今、先生がこの54年問題に触れられるのか、そのことの意味を自分なりに解りたい、こう思ってそのことを考え続けて参りました。

一つこれは誰もがお気づきになる点かと思いますが、いよいよ小説「新・人間革命」が昭和50年代に入ってきている。まさに52年から54年にかけてのあの問題を学会の歴史にどう残すのか、それがまもなく問われてくる。先生はそういう思いであの54年問題を語り始められたのだと。そのことは即座に気づきました。

しかし逆にいつを目指しての先生の戦いであるのか、そんな何年間というような期間を経ての、準備はそれでいいかもしれないが、この時に決着をつけるという先生が射程に置かれている年はいつなのか。当初、私は明年の80周年、学会創立80周年だと思っておりました。茫漠と考えておりました。しかしそれは違うということに今、自分なりに気づきました。その先生が目指された年は今年だったんだと。

その事に気づかせてもらった出来事は、去年12月29日に山崎正友が死んだという出来事でした。その約半年前の7月に原島嵩が死んでおります。もう皆さんお解りの通り54年問題というものを考えたときに、最もその根源にあって悪逆の限りを尽くした人間をあげるとすれば山崎正友であり、その手下となった原島嵩であります。もう先輩の皆さんはよくご存じのことであります。12月29日という（暮れも）押し迫ったこのときに山友が死ななければならない。これは単なる偶然ではないと私は思いました。まさに先生の一念が、その戦いの決着をつける現象を出されたんだと。こう思いました。

そうすると去年の12月29日という日に山友が死ぬという出来事を信心の眼でとらえれば、本年という年がまさに先生にとって決着の年である。こうまず自分自身、受け止めました。ならば、いかなる決着の年であるのか、それを考えました。

そう考えていたとき、本年の年頭の最初の随筆で先生は重大なことを述べられました。54年問題という言葉は一つも出てきません。そして当然ながら勇退という言葉も出て行きません。しかし、皆さんも覚えおられると思うんですが、今年最初の随筆に地涌の菩薩について先生が触れられた箇所があったのであります。

もう一度、皆さん是非読み直していただきたいと思います。**何故地涌の菩薩が出現したか、又地涌の菩薩の出現の意味とは何であったか。**それを先生はこう言われております。**「釈尊という大師匠は、彼らが漫然と決めつけていたような、小さな存在ではない。永遠の生命力を具えた、桁違いの仏なのだ。その師匠の真の実像を、久遠の弟子である地涌の菩薩たちが電撃的に示していったのである。それは、「師匠はこんなものだ」という思い上がりや慢心、「自分はこれまで十分、戦ってきた」という惰性や傲りなど……弟子たちの抜きがたい胸中の限界を打破した。そして、もっと偉大な、もっと尊高な力に気づかせ、さらに、元初の師弟の誓いに目を覚まさせていったのだ」**（聖教2009年1月6日付人間世紀の光　上）とこうありました。

私はこの随筆を読んだ瞬間に、ある意味でこれこそが54年問題の本質だったのだと気づきました。次元はもちろん違いますが、皆さん今の先生のご指導で気づかれたように、あの地涌の菩薩の出現の意味はさまざまな多面性があるわけですが、一つ言えることは、それまで声聞の弟子たちは、釈尊のことをこの世で修行を積んで初めて悟りを開いた始成正覚の仏としかみておりませんでした。しかし、我々の師匠はそんなものではないと地涌の菩薩は宣言をしました。久遠の本仏なのだということを地涌の菩薩は宣言をしました。

あの54年問題の本質とは、師匠をどう見たか、どうとらえたか、弟子の側の問題です。先生をただ三番目の会長としかみない、歴代の会長の一人としかみない。そういう弟子の師匠をとらえる視点。もし池田先生が学会永遠の魂であり永遠の師匠であるととらえたら、あんな対応になっていただろうか。こ

う私は思います。まさに年頭最初の随筆で先生がこのことを言われた意味、それはまさに54年問題の本質ではなかったかと。そう考えれば、もう側近にいた誰かが悪いなどという浅薄なとらえ方で、人の責任に押しつけて澄ました顔をしているような問題ではない。自分自身もまさにその一人ではないか、先生が言われる不肖の弟子、師を守りきれなかった弟子の　自分も一人だと猛反省をして立ち上がらなかったら先生が今指導されている意味がない。私はそう思います。

それはもっと根幹で言えば、根本的な信仰観の問題であった。あの54年は極論をすれば大御本尊と本山と先生とどちらが大事かという問題について愚かな決断を下したということでありました。根本的な信仰観が問われた。今、私たちは思います。いくら正しい本尊があろうと正しい信仰がなければそんなものは何の意味もなさないんだということを、今、私たちは平気で言っていますが、54年は違ったのだと。どちらが大事かを問われて愚かにもそちらを選んでしまった。それで納得をしてしまった、という問題ではなかったかと。

そう考えるとまさに30年目のこの決着の年、その年に先生が本当に築かれようとされている時代、新たな時代とは、まさに創価学会における地涌の菩薩よ、出でよと。そして本物の時代を作れということを私たちに呼びかけて下さっている。そう思えてなりません。

そう考えていた折に、あの1月の本部幹部会の先生のご指導の中に、これもさりげなく出てきました。でも出てきた、おっしゃる意味を考えたときには重大な一節だったと思います。大聖人の御書の「今年は仏法の邪正ただされるべき年か」という一節を引かれ、先生は、それを解説するような言い方ではありましたが、「今年は仏法の正邪が正されるべき年であると仰せである」と、こうあの1月の本部幹部会の上のご指導の中で言われておりました。

＜「一、建治2年（１２７６年）の正月の１１日。大聖人は御手紙にしたためられた。「今年は殊に仏法の邪正たださるべき年か」（御書８９３ページ）と。今年は、特に、仏法の正義と邪悪が明確にされるべき1年であろう、との仰せである」（聖教2009年1月12日付1月度本幹　上）＞

54年問題とは、まさに先生をどうとらえたかという弟子の側の問題である。根本的な信仰観を問われた問題である。そこを間違える学会であっては、そんなものが後世に残っていって何の意味があるのか、ということが問われた問題であったと思います。そう考えれば、私たちはよく今年のことを「正義」の御揮毫30周年という言い方をしますが、でもあの54年の5月に先生がむしろ「正義」という言葉に託された思いに、私たちは思いをいたすべきだと思います。若干、変な言い方になってしまいますが、先生は「正義」と本当にお書きになりたかったのか、私はその「正義」というむしろそうとしか表現できなかった先生の思いがあると思います。

それは「師弟」だと思います。だからこそ「我一人正義の旗持つなり」と書かれた意味は、「我一人師弟の旗持つなり」という意味であったんではないか。30年間先生が戦い抜かれて、いよいよ今本当の信心を教える、本当の師弟の道を教える、それは根本的な信仰観の問題なのだ、ということを私たちに語って下さっている。

そう受け止めれば、本年がどれほど重大な年であるかということが明確になってくると感じます。今年を勝つこと、それは単なる一回の戦いの勝利ではない、むしろ本門の師弟のドラマ、師弟の勝利のドラマを永遠の原点として残すべき戦いなのだ。こう決意をして又それぞれの地域で、それぞれの仕事の分野で断じて勝利をしていきたい。こう思いますのでどうか宜しくお願いいたします。以上でございます。

資料④　小説「人間革命」第10巻

【参考――師弟の道と師弟不二の道】小説「人間革命」第１０巻

●もともと広宣流布の活動は、宗教革命を基本として、それによって広く遠く人類社会に貢献する活動であり、日蓮大聖人の仏法が、行き詰まった現実の社会を見事に蘇生させることを目的とする以上、この宗教活動が、いつか社会化していくことは必然の道程であった。戸田城聖の構想の遠望は、水滸会や側近の人びととの会話で、しばしば語られていたのだが、未聞の活動領域であっただけに、現実の問題として認識するものはほとんどいなかったといってよい。戸田の壮大な構想を耳にしても、心地よいユートピアの夢として歓喜するにすぎなかった。

かろうじて唯一人、師弟不二の道程を着々と歩んできていた山本伸一だけは、戸田の予言的展望を脳裏に刻んで、秘められた理想を現実化するための窺い知れぬ多くの辛労を戸田とともに分かちあったのである。構想が未聞であっただけに、辛労の質もまた未聞であった。

●戸田は彼の膝下から多くの指導者の輩出のために心を砕いていたものの、時期はまだ熟していなかった。

彼の弟子たちは、**師弟の道**は心得ていたが、広布実戦のうえの**師弟不二**のなんたるかを悟るものはほとんど皆無といってよかった。不二とは合一ということである。

昭和三十一年の戦いに直面したとき、彼の弟子たちは戸田の指導を仰いだが、**彼らの意図する世俗的な闘争方針を心に持しながら、戸田の根本方針を原理として聞き、結局、彼らの方針の参考としてしか理解しなかった。**戸田の指針と彼らの方針とは、厳密にいって不同であったのである。**師弟の道を歩むのはやさしく、師弟不二の道を貫くことの困難さがここにある。**

ただかろうじて、山本伸一だけが違っていた。彼は関西方面の最高責任者となったとき、戸田の膝下にあっての久しく厳しい薫陶から、戸田に言われるまでもなく、ひとり多くの辛労を堪えながら、彼は作戦を立てた。

その彼の作戦の根本は、戸田の指針とまったく同一であった。不二であった。**彼には戸田の指導を理解しようなどという努力は、すでに不必要であった。**

以来、戸田の時々刻々の指導の片言隻句は、彼の闘争方針の実践にますます確信を与え、いよいよ渾身の力量を発揮する縁となったのである。

彼は一念において、すでに戸田の一念と合一したところから出発していた。

ともあれ大聖人の仏法が師弟不二の仏法であるならば、一切法がこれ仏法であるがゆえに、広布実践という現実的な昇華のなかにも、**師弟不二の道**が貫かれていくことは当然の理といわなければならない。

後の話になるが、戸田が深く尊敬申し上げていた堀米日淳上人のご説法が思い出される。

「戸田先生は師弟の道に徹底されておられたがゆえに、あの深い仏の道を獲得されたのである。……創価学会は何がその信仰の基盤をなすかといいますと、師匠と弟子という関係である。この関係に徹すれば、仏法を得ることは間違いない。……戸田会長ほど初代牧口先生のことを考えられた方はない。親にもまして初代会長に従ってこられた。……この初代会長、二代会長を経て、皆さま方の信仰のあり方、また今後の進み方の一切ができ上がっている」

まさしく、**創価学会の実践的生命もまた、師弟不二である。師弟不二の道は、一念における荘厳な不二にあるといわなければならない。**

●戸田城聖の永年手塩にかけた弟子たちが、全国に散って活動したわけだが、**広布実践における師弟の関係を単なる師弟の道ととるか、師弟不二の道ととるかが、はじめてあらわにされたと見なければならない。師の意図するところが、現実にあらわれるか、あらわれないかは、弟子の実践の姿を見れば容易に判断のつくことである。師の意図が脈動となって弟子の五体をめぐり、それが自発能動の実践の姿をとるとき、師弟の連結は、はじめて師弟不二の道をまっとうすることが辛うじてできるといわなければならない。**師弟に通ずる生命の脈動こそ、不二たらしめる原動力である。そのためには、師の意図の脈動が何を根源としているかを深く理解し、みずからの血管のなかで消化する強信にして困難な信仰作業を必要とする。その本源の師弟の力は、いうまでもなく御本尊につきる。

たとえば山本伸一が大阪闘争に先立って、数か月にわたる一念に課した億劫の辛労は、この困難さを避けることなく乗り越える作業であった。そして、師弟一体の実践の姿をあらわしたのである。

多くの弟子たちは、この困難さを避ける。

師の意図に叛く考えはさらさらないものの、師の意図をただ教条的にしか理解しない。そこで厳しい

現実に直面すると、周章狼狽して師の意図を生のまま機械的に同志に押し付けて事足れりとするか、あるいは師の意図が気になりつつも、直面した現実を特殊な場合として、浅薄な世間智をはたらかせて現実に適合しようと焦る。ここにいたって、師弟の脈動が断たれていることに気がつかない。まことに師の考えるところと、弟子が懸命に考えることとが冥合するとき、信仰の奔流は偉大なる脈動となって迸る。師の意図に教条的にただ追従することは、弟子にとってきわめて容易なことだ。師の意図からその根源にまで迫って、その同じ根源を師とともに頒かちあう弟子の一念は、まことに稀だといわなければならない。しかし、この稀なる一念の獲得にこそ、微にして妙なる師弟不二の道の一切がかかっているのである。

日蓮大聖人に常随給仕の誠をつくした日興上人が、六老僧のなかにあって唯一人、師弟不二の道をまっとうすることができたのも、この困難な師弟の道に徹したからである。ここに五老僧の単なる師弟の道が師に敵対するにいたってしまった事実と、日興上人の師弟不二の道が大聖人の仏法の血脈をよく厳護し得た唯一の理由がある。そして大聖人没後、今日に至るまでの七百年の長い歴史が、すべてを語って余りあることに誰でも気づくであろう。

次元は異なるが、広布実践のうえで戸田城聖と山本伸一における師弟という不二の道も、また今日の創価学会形成発展の原動脈であったことは、今にして思えば一点の疑いもなきところである。ただ昭和三十一年当時、草創期の激流のなかにあっては、この原動脈は人目につかぬ底流に潜んでいるしかなかったが、大阪の激闘の成功は、ときにこの師弟不二の道の実践がいかなるものであるかを、ほのかにあらわしていたといってよい。

資料⑤

資料⑤　「八重の相対」について

①内外相対……同じ宗教でも、外道はダメで内道（＝仏法）でなければならない【釈尊】

②大小相対……同じ内道でも、小乗教はダメで大乗教でなければならない【竜樹・天親】

③権実相対……同じ大乗教でも、権教はダメで実教（＝法華経）でなければならない【天台・伝教】

④本迹相対……同じ実教でも、迹門中心の天台仏法ではダメで、本門中心の日蓮仏法でなければならない【日蓮】

⑤種脱相対……同じ日蓮仏法でも身延・池上・中山等ではダメで大石寺でなくてはならない【日寛・戸田】

⑥宗創相対……同じ大石寺の流れをくむ中でも、宗門はダメで創価学会でなければならない【池田】

⑦池創相対……同じ創価学会であっても、池田先生との師弟がなければならない　※「先生を３番目の会長とみるか、永遠の師ととらえるかの違い」（正木指導）

⑧師弟の道・師弟不二の道相対……同じく池田先生を永遠の師と仰ぐ弟子の中でも、単なる師弟の道ではダメで、師弟不二の道でなければならない。平成の「五一相対」

「八重の相対」「宗創相対」「池創相対」「師弟の道・師弟不二の道相対」という名称は用いられていないものの、そこにある考え方は、三代会長の指導そのものです。また、日蓮大聖人の説く「四重興廃」や日寛上人の「五重の相対」といった仏法の原理から自ずから出てくるものだと思っています。直接的には、戸田会長全集第六巻に収録されている佐渡御書講義が典拠です。

戸田会長は、“大聖人を迫害した極楽寺良観らは、インドに釈尊がいた当時、釈尊を迫害した六師外道の生まれ変わりだ。その良観たちが、今（戸田会長当時）生まれてきた仏立宗等の坊主になっている。立正佼成

会や霊友会の教祖も同じだ。今度、それではどうなるかというと、日蓮正宗の中に生まれてくる。蓮華寺の僧侶（崎尾正道）のようになって出てくる”と予言されました。この予言は、正本堂を破壊する前年、創価学会員に信徒除名のハガキを送りつけてきた日顕によって、見事に証明されました。

戸田会長が、五重相対の次に、第六の相対ともいうべき宗門と学会の勝劣を明らかにする相対が来ることを予見されていたことは明らかです。それを便宜上、「宗創相対」と読んでいます。

問題は、戸田会長が「ほんとうです。この原理からいうとそうなります」とおっしゃっていることです。天魔がその時々の正法の内側へ、内側へと入り込むという原理です。

この原理を認めるなら、宗創相対の次には、宗門の高僧らに取り憑いた天魔が、創価学会の一部幹部らに入り込むと考えるのは理の当然ではないでしょうか。

私は創価班の一員や「創価新報」の記者として、宗門と戦ってきましたが、そこで得た実感として、第一次宗門事件（や第二次宗門事件）で、学会から離れ宗門についた人々の中には、昭和２０年代、３０年代の身延や立正佼成会などとの折伏闘争では、一級の闘士であった人やその子どもが多いという事実があります。

彼らは、第四の本迹相対（同じ実教＝法華経＝を根本とする中でも、迹門中心の天台仏法ではダメで、本門中心の日蓮仏法でなければならない）や、第五の種脱相対（同じ日蓮仏法の中でも、身延や立正佼成会、仏立宗などの日蓮系教団ではダメで、日蓮正宗大石寺でなければならない）までは、ついてくることができたけど、その次の第六の「宗創相対」（便宜的に「宗創相対」と呼びますが、内容的には、学会指導から逸脱することを語っているものではありません）の時代になると、脱落してしまう。

戸田会長の言う「こんど、それではどうなるのかというと、あのような連中が死ぬと、こんどは日蓮正宗のなかに生まれてくるのです」ということが信じられない。天魔が入り込むのは、身延等の邪宗日蓮系教団

までで終わりであり、日蓮正宗の中には入り込まないと信じ込んでいるからです。

問題はこれと同じです。戸田会長の言う「原理」は、日蓮正宗までは適用されるが、創価学会の中には入り込まない、と信じるかどうか。

今の宗門の坊主や法華講らが、“極楽寺良観が日蓮正宗の中に日顕という形で生まれてきた”“天魔が内に入り込んだ”ということが分かっていないのと同じように、日顕らに取り憑いた天魔が今は、学会の中に入り込んでいるということが分かっていないのではないかと思われるのです。

信心の畷が堅固な幹部は大丈夫ですが、天魔は高僧に憑くと御書にある通り、幹部こそ気をつけないといけないことは、これまで幾度となく、池田名誉会長が指導されてきたことだと思います。

天魔が入り込むのは宗門までと思いこむのは、非常に危険なことです。創価学会にも入り込むと捉えるべきだと思います。

創価学会会員規程で“会の秩序を乱す行為をしない”ことや“会もしくは会員の名誉を傷つけない”こと、“会もしくは会員に迷惑を及ぼさない”ことなどが定められていることは当然としても、それが“幹部の言うことには服従する”こと、“幹部の不正や間違いを見ても言ってはならない”こと等にすり替えられる時、とんでもないことになる可能性をはらみます。

なぜなら、先にも述べたように、天魔は幹部に取り憑くからです。すべての幹部が信心の畷が堅固であれば問題ありませんが、実際は、山崎正友や原島嵩や矢野絢也などのように、最高幹部でも、天魔に取り憑かれたようなことをしてしまうことがありました。いや、御書の原理からすれば、最高幹部だからこそ、困難な正しい判断と、仏法に照らした正しい振る舞いが求められるのです。

この困難性を伴う故に、池田名誉会長は、学会の組織が絶対ではないということを弟子に教える意味で、２１世紀に入った頃から、本部幹部会や全体会議等で、矢野絢也を糾弾し、秋谷前会長に土下座までさせたのではないでしょうか。

本部幹部会等で、名誉会長も明言されましたが、この二人は第一次宗

門事件の最中、名誉会長をマスコミに“売り”ました。昭和５２年路線を掲げ、宗門との戦いに突っ走る名誉会長を見て、このままでは創価学会は破門される、公明党は選挙で戦えなくなるとの危機感を抱いて、名誉会長の“暴走”に歯止めを掛けるために、マスコミに名誉会長を貶める情報をリークしました。名誉会長が机の上に女の子を座らせ、頬にマジックを塗っている写真の流出などが象徴的です。

これは、秋谷前会長が聖教新聞社の写真資料室から入手し、それを矢野に渡し、矢野が内藤国夫に渡してマスコミに流れたと、藤原行正が週刊誌等で暴露しました。名誉会長も、本幹等で秋谷前会長を糾弾する前に、第一庶務に命じて、当時の資料や週刊誌等をすべて調べさせて、間違いないと確認させたといいます。

問題はなぜ、秋谷前会長や矢野がこんなことをしたか、です。私は、創価学会、公明党をる守ためであったと思います。二人は、いわば池田名誉会長と創価学会（公明党）を相対して、創価学会（公明党）のほうを守ろうとしたと言えます。

これに対して、第一庶務の峰尾次長が自分の一代記を語るなかで、こうおっしゃっていたそうです。「私は、創価学会に全く興味がない。学会活動もやったことがない。池田大作という人間にしか興味がない」と。

当時は、“創価学会なんかつぶれてもいい。池田先生さえお守りすれば、今よりも何倍も凄い学会を作ることができる”という意気込みだったとも。峰尾次長らは、創価学会と池田名誉会長を相対して、名誉会長を守った。

これは、現在の最高幹部の一人が繰り返し語っていた話ですが、「あの54年問題の本質とは、師匠をどう見たか、どうとらえたか、弟子の側の問題です。先生をただ三番目の会長としかみない、歴代の会長の一人としかみない。そういう弟子の師匠をとらえる視点。もし池田先生が学会永遠の魂であり永遠の師匠であるととらえたら、あんな対応になっていただろうか。こう私は思います」と。

秋谷前会長や矢野は結果として、池田名誉会長を「ただ三番目の会長」と見ていたとしか思えない振る舞いをした。場合によっては引きずり下

ろしてもいい会長。決して、永遠の師匠とは見なかった。対して、峰尾次長らは、創価学会（の組織）を絶対の存在とは見なかった。その上に、名誉会長の存在を置いた。

このように、同じ創価学会の流れをくむ中でも、池田名誉会長を永遠の師匠と見るか、「ただ三番目の会長」と見るかの違いがあります。このことを分かりやすく言うために、池田名誉会長と創価学会の相対だから、便宜的に「池創相対」と。これは、全く私の自作ではありません。池田名誉会長の本部幹部会や全体会議等の指導からも、現在の最高幹部の話からも裏付けられるものです。正当な学会指導だと思います。

永遠の師匠との師弟、池田名誉会長の魂をわが魂としなくなったら、創価学会の最高幹部といえども、天魔に食い破られます。その幹部が、名誉会長との師弟ではなく、創価学会の組織を絶対化し、必要以上に「会の秩序を乱さないこと」等を強調し、悪しき幹部の実態や行状の告発を「学会批判」「幹部批判」とスリカエ、「学会批判や幹部批判は絶対に許さない」と言い出す時、永遠の師匠との師弟の血脈は断絶し、名誉会長の魂は通わなくなってしまいます。

また、「名誉会長との師弟」が重要であると言う時の「師弟」とは、単なる「師弟の道」ではなく、小説「人間革命」第１０巻に描かれた「師弟不二の道」のことだと思います。

「昭和三十一年の戦いに直面したとき、彼の弟子たちは戸田の指導を仰いだが、彼らの意図する世俗的な闘争方針を心に持しながら、戸田の根本方針を原理として聞き、結局、彼らの方針の参考としてしか理解しなかった。戸田の指針と彼らの方針とは、厳密にいって不同であったのである。師弟の道を歩むのはやさしく、師弟不二の道を貫くことの困難さがここにある。」

「師の意図に叛く考えはさらさらないものの、師の意図をただ教条的にしか理解しない。そこで厳しい現実に直面すると、周章狼狽して師の意図を生のまま機械的に同志に押し付けて事足れりとするか、あるいは師の意図が気になりつつも、直面した現実を特殊な場合として、浅薄な世間智をはたらかせて現実に適合しようと焦る。ここにいたって、師弟

の脈動が断たれていることに気がつかない。まことに師の考えるところと、弟子が懸命に考えることとが冥合するとき、信仰の奔流は偉大なる脈動となって迸る。師の意図に教条的にただ追従することは、弟子にとってきわめて容易なことだ。師の意図からその根源にまで迫って、その同じ根源を師とともに頒かちあう弟子の一念は、まことに稀だといわなければならない。しかし、この稀なる一念の獲得にこそ、微にして妙なる師弟不二の道の一切がかかっているのである」

この単なる「師弟の道」と、本物の「師弟不二の道」の違いを分かりやすく説明するために、第八番目の相対を想定しましたが、これも、小説「人間革命」第１０巻に基づくもので、私の勝手に考えたことではありません。正当な学会指導だと思います。

宗門の高僧らに取り憑いた天魔が、創価学会の一部幹部らに入り込んだとして、それは、いつ頃からか。私の実感としては、正本堂が消滅し、自公連立政権が始まったあたりからではないかと・・・。そう考えると、いろいろ合点がいくのです。

実際、この頃から、創価学会が原告や被告になった裁判で負けが続きます。２０００年まではなかったことです。矢野絢也の手帖裁判では、創価学会が証拠の音声データを改竄していたことを東京高裁、最高裁が認定し、確定してしまいました。あってはならないことだと思います。

また、教学部長が「日精問題」で日顕に法論を挑んで返り討ちに合い、以後、一言も反論できないまま、亡くなってしまいました。

こうした現状認識の上に立ち、１９９０年から１０年間続いた宗門との攻防戦を勝利に終えた後の創価学会に、少しでも希望のもてるパースペクティブ（見通し）はないかと思って、学会指導を忠実に紐解き、整理したのが、「八重の相対論」と言われているものの中身です。

資料⑥ 怪文書「天鼓」事件　報恩社社員と関西メンバーの会話

２０００年　１２月９日　２１時～２３時　　新大阪駅前　居酒屋むらさきにて
参加者　Ｈ社Ｉ・Ｈ太郎・うさ・３名
Ｉとの対話の要旨

太郎　：ＩさんはＳ班の教宣部ですか？

Ｉ　：はいそうです。

太郎　：広宣部の中に教宣部があるのは関東だけじゃないですか。
私もＳ班の県委員長や、教宣部企画室を旗坊さんと担当していました。宜しくお願いします。本日はズバリ、お聞きしたい事があります。

Ｉ　：はい

太郎　：天鼓はＨ社が書いたとお聞きしています。関西の我々にまで情報が伝わっていると言うことは、東京では皆さん周知の事実ですよね。

Ｉ　：……あ、はい。（少し動揺）

太郎　：なぜ暴露したのですか？
兵庫に来た時のＡ氏は傲慢でしたから、私もきらいな幹部の一人ですが…。
Ｐに、二度と帰ってくるなと言われたそうですね。

Ｉ　：Ａ氏がＨ社を潰そうとしたからです。それに対抗しました。

太郎　：Ａ氏だけですか？

Ｉ　：他にもう一人います。

太郎　：誰ですか？

Ｉ　：ちょっとこれ以上は申し上げることが出来ません。

太郎　：会長ですか？

Ｉ　：あなたたちも一度はお世話になったかたです。これ以上は勘弁してください。
Ａ氏がいなくなったとしても、まだまだ危険性がなくなったわけじゃないんです。ここでの話が１０年先、２０年先に出ないとも限りませんから。

太郎　：（笑い）そうですね。河辺メモみたいにね。

天鼓に書かれた事は事実ですか？

Ｉ　：事実です。

太郎　：どうしてＨ社に入ったのですか？

Ｉ　：Ｓ青からいわれました。

太郎　：どういうことですか？

Ｉ　：Ｓ青から「不破優をまもるんだよ！」といわれました。
はい、それでしたらお受けします。とね。

太郎　：ということは、Ｔ川とＳ青は反Ａ氏なんですね？

Ｉ　：・・そうです。
社長のＫは本当に凄い人です。Ｋが来ると未だに緊張します。今近くでお手伝いをさせてもらっていますが、たいがい親方に近づくと粗が見えたりするものですが、どこを切っても金太郎アメで、Ｐの為というその一点だけです。
地湧からの通信も自費出版で１０億かかっています。
先日加藤が一夜にして裏返りましたが、あの前日、Ｋは野中幹事長と会っているんです。私は運転手として外で待機していました。
ＫとＴ岡の関係も本当に深いんです。

太郎　：Ｔ岡さんは例の電柱に登った方ですね。

Ｉ　：そうです。

太郎　：なぜ地湧からの通信は絶版になったんですか？Ａと関係があるんですか？

Ｉ　：時期が終わったからです。

太郎　：確か今年の冬頃、関西で仏敵破折研修を行いましたよね…
関東と比べて関西は本当に意識が低いと思います。特に兵庫は…。

Ｉ　：確かに感じました。兵庫で参加された方は本当に少ないです。しかし、関西は怖いですね。

太郎　：怖いですか？

I　：先輩から聞きましたけど、T川さんなんかは、来るなと言われたそうです。

太郎　：それは知りませんでした。関西のある人が長をしていた時に、S男は絶対呼ばない関西に入れないと言ってたことは聞きました。
ですから、兵庫でSと一回しか会ってません。

I　：私も前に、ある関西の副男に突然、御書講義しろと言われました。頑張ってしました。それが凄く評判が良くてお褒めを頂いて、それから、ちょくちょく関西に来るようになりました。

太郎　：それは良かった。誰かは想像できます。話は変わりますが、政治の世界も大変ですね。O田さんの秘書が自殺したりして。

I　：来年本当に大変なことがおこります。新党ができます。

太郎　：えっ、何ですか？

I　：これはH地さんに言わないで下さいね。まずいから。
人気のある議員だけで一つの政党をつくる動きがあるんです。与党、野党問わずにです。

太郎　：それはえらいことですね。

I　：そう言う動きがあるんです。それを潰そうとK等が動いているんです。
Kはいろんな所に間者を放っています。
正信会、法華講、学会本部、公明、自民、等。間者がいたから、C作戦がわかったんです。その情報があったから、すぐに戦いの準備、姿勢がとれたんです。
九州で坊主に近づいて、酔った振りして情報を聞き出して、気分が悪いと言ってトイレ行く振りして、慌ててKに電話をしてきた人がいるんです。
そのために、お金をばらまいているんです。そのためにH社をつくったんです。
学会は、使うだけ使って、使命が終わるとそれまでなんです。後は面倒をみない。Kは、一生面倒を見るから心配するなと言って、使命をあたえるんです。

太郎　：S青やT川にもお金は流れてる。

I　：使ってますね。

太郎　：自民と学会が引っ付いた原因は？

I　：自民と引っ付いた方が得だからでしょう。

太郎　：学会包囲網をとくため？Ｐを護る為？ですかね。

Ｉ　　：どちらが得か、損かでしょう。野党も票が欲しいだけですから。

太郎　：勤行は５座してますか？

Ｉ　　：題目だけです。嫁によく指導されます。しかし、悩みを抱えてる男子部員が来た時には、一生懸命、一緒に題目を上げます。また時々、やはり仏壇の前に長時間座りたくなります。

太郎　：後に出来た大石寺の化儀ですから、私も５座の勤行をする必要はないと思います。どうしても気になる人はした方がいいでしょう。スナフキンさんという先輩と３ヶ月試してみようということで実験しました。先生が勤行を短縮してもよいと話されたとお聞きした時、朝の勤行は、２座の部分だけにしました。その代わり題目を５座にかかる時間分をあげました。先輩共々、益々元気になりました。

Ｉ　　：５座する必要はないのですが、こんなこと誰彼かまわずいえませんね。
随方び尼です。私は自分では信仰者とは思ってないんです。

太郎　：私は、信仰のエネルギーは怒りだと思っています。
悪に対するいかり、庶民をくいものにする権力者に対する怒り、
先生をいじめる奴に対する怒り。今日は本当に有り難うございました。

****

Ｈ社……報恩社
Ｈ太郎……ほがらか太郎
Ｓ班……創価班
I……伊藤雄教
Ｐ……名誉会長
Ａ氏……浅見茂
Ｓ青……佐藤青年部長
Ｔ川……谷川
Ｋ……北林芳典
Ｔ岡……竹岡誠治
Ｓ男、Ｓ……佐藤男子部長（当時）
Ｏ田……太田昭宏代議士
Ｈ地……波田地

****

資料⑦ 怪文書「天鼓」事件. 報恩社社員と東海道広宣部の会話

この事実一つで今なら職員クビでしょう。加えて、アクセンチュアからのキックバック、伊藤由佳子との不適切な関係等々。こんな人間が会長でいいのか？

今度、「学会の最高機密漏洩の犯人はだれか？」というテーマでお話しようと思ってます。第一次宗門事件の時の、いわゆるマジック事件写真。これは矢野・秋谷の仕業です。浅見さん落としの怪文書「天鼓」。これは報恩社が犯人。ヒロシは証拠がないと新井さんに弁明していますが大嘘ｗ

usaさんや朗らか太郎さんが聞いた天鼓作成者・伊藤裕教の自慢話もありますが、決定的なのは東海道広宣局長だった赤染氏の証言です。天鼓第一号が出る一週間前、神奈川広宣部ナンバー２の大平というメンバーの結婚式が横浜ランドマークタワー界隈でありました。二次会を近くのロイヤルホストで。

その場に居たのは、伊藤裕教、赤染ほか広宣局の中心メンバー数人。そこで裕教が唐突に浅見FKの悪口を言い出し、伊藤園、ビックカメラ等との癒着や、会員から「本部で使っていただきたい」と出された一千万円を金沢、岡松と山分けしたことなどベラベラじゃべった。「それと全く同じ内容が天鼓に、出ていたので、ああ、裕教がやったのだな」と思ったと赤染。

その後、「天鼓」は平成１１年１月末まで１カ月半の間に１０号まで出て中断。２月に赤染が裕教に会った際、「最近、出ないけどどうしたの？」と聞くと、「選挙がありますのでしばらく休みますけど、またそのうちやりますから」ときっぱりｗ

こんな事実なんか、犯人探しの責任者に任じられたヒロシが本気で調べて出ないわけがない。何より、報恩社犯人説を唱えていた私に聞いてこなかった事自体が変 (笑)　ちなみに、波田地犯人説を口にしたのは報恩社の皆本です。渡辺茂夫が「天鼓の犯人はだれ？」と聞くと「波田地さんじゃないですか」と。

これで私はぶち切れたわけです、「お前ら、自分でやっておいて俺を犯人に仕立てるつもりか。もう許さん」と (笑)　ヒロシは私を切れやすいと誹謗するけど、これで切れなかったら切れる時がないｗ　報恩社を庇い事実を隠蔽したヒロシが早稲田ＯＢの浅見送別会で悔しいと泣いてみせたのは有名な話 (笑)

話が横道にそれましたが、２００３年のテーミス、２００８年のフラッシュによるＣ１離婚情報の漏洩、２００５年の弓谷解任事件報道（週刊新潮）、２００７年温家宝会見アブラギッシュ記事（週刊文春）、去年１０月の南元センターＣＰ病状記事（週刊文春）など、これらはT川が庇う広報室のO川が犯人。

「天鼓」が「T川のスキャンダルを探せと指示を出した浅見への報復」であったように、ここ１０年間の最高機密漏洩はT川会長擁立へ向けて、邪魔者を追い落とし、障害（たとえば矢野・T川裁判）を取り除くための工作であった。自分が会長になるためだったらCPやC1も売る。これがT川及び一派の正体。

ヒロシが新井さんに語っている大嘘の一つは、妙観講がわが家の電話の会話を盗聴録音したテープを渡辺茂夫から入手した北林が、わが家に無断でテープ起こしし、裁判所に提出していた事実を新井さんから問い詰められると、「あれは大山さんが悪い」と述べていること。これは完全な話のスリカエです。

資料⑧　谷川氏の「374919（ミナヨワイク）」事件ほか

私の方から、時が来たのでまず皆さまにのみ公開します。
374919音声ファイルです。

これは、波田地問題が再燃の記事を見て顔色が変わったというT川が、
表沙汰になることを最も恐れている374919事件の証拠となるものです。
２００２年２月２５日、東京・四ツ谷の居酒屋で、ヒロシと千葉の転輪
会の新井憲夫さんが飲みながら３時間にわたって懇談した時の全記録です。

前年、私が天鼓事件や妙観講盗聴事件裁判のデタラメ訴訟指揮等で、
報恩社の悪事を徹底的に追及していたことを受け、T川、Y尋の指示を
受けたヒロシが、年明け早々、「波田地さんが、アメリカ創価大学の
CPの宿泊施設はここだとマスコミに情報を流している確たる証拠がある」
とかまして来ました。

私は未だに、どこにそんな施設があるか知らないわけで（笑）、全く痛く
もかゆくもありませんでしたが、１月９日、ドミサイルの一室で、ヒロシ
と対面。私が天鼓事件等でヒロシを攻め、ヒロシは、「隣の創価学会」を
やった上遠野という文芸部員と私との関係を問いただすというやりとりが
続きました。

音声の最後のほうでも出てきますが、この上遠野がCPの宿泊施設云々を
波田地から聞いた、証拠もあるとのデタラメを広報室の寺崎さんに話した
ことが火元でした。角野を多賀さんが新井さんにセミナー講師として紹介
し、新井さんが私に角野を紹介した関係で、新井さんが絡む羽目になり、
ヒロシとの懇談に。

音声は３時間２６分ありますが、二人が居酒屋に入って２７分５０秒から
会話が始まります。３時間ありますが、私も１０年ぶりにじっくり聞いて
みると、とてもおもしろいですね。角野、寺崎、多賀といった名前の出る
ところは流して、谷川、ヒロシ、北林、大石といった名前が出たらじっく
り聞いて下さい。

居酒屋で周囲がうるさくヒロシの声が聞きづらいところが多いですが今回、
肝心の新井さんの声はバッチリ入っています。この懇談は新井さん自身が
買って出てくれたもので、録音も新井さんから申し出てくれました。面白
そうなところはファイル分割して取り出してあります。まずそちらをお聞
き下さい。

分割ファイルの谷川女①は51：40～1:05:03。谷川女②は1:42:51～1:44:08。
谷川女③は2:58:33～2:59:15。谷川女④は3:02:50～3:03:14。谷川酒・遊び
は2:56:25～3:03:14。佐藤オカマ・遊びは3:01:18～3:13:00。

谷川カネ・天鼓・大石は2:38:20～3:03:14。最後はお勘定をし、二人が別
れの挨拶、新井さんが私に終了報告の電話をくれて終わっています。特に、
谷川女②は強烈でしょうねｗ　03:01:40では、オカマ追及されたヒロシが
「不徳の致すところ」発言も（笑）。まあ突っ込み所満載ですｗ

今、聞き直してみて、ヒロシが何度も、谷川の輪姦事件を蒸し返して聞い
ているところを見ると、ヒロシの最大の関心がこの真偽判定にあったことが分
かりますね。谷川とはこの件で話したことはないと言っていますが、そんな
バカなｗ　谷川の意を受けて新井さんの考えや状況を探っている感じがします。

ヒロシと谷川は歴代青年部長で唯一、一緒に飲みにいける間柄です。一枚剥
いても二枚剥いても二人は仲いいですが、三枚、四枚と剥いてくると、ヒロ
シが谷川をガンガンにかます関係です

ヒロシは役者じゃのお～と改めて思いました。カマシや脅し、透かし、泣
き落とし、論理のすり替え、飛躍等々、なかなかのもんですね（笑）。

１月９日の私とヒロシのやりとり音声もありますが、新井さんが私の話を
不確かにしか理解してない点などを突いて、その場を優位に運ぼうとする
手管も美事ｗ

新井さんも自分の身を守りながら私もかばいつつ、ヒット＆アウェイで攻め
込んでいますね。特に2:38:20以降は新井さんの圧勝でしょう。ヒロシの特
徴は、ごまかしがきかない時や、図星で反論できないと、とたんに沈黙する
ことです。新井さんは谷川・ヒロシの遊びの追跡調査をしてますので強い！！

最終的にはyoutube等にアップしてもいいと思っていますが、勝手にやらない
でくださいね(笑) それで仮に訴えられた場合は名誉毀損に当たるか？
当たりません。なぜなら、創価学会の次期会長候補がどんな人間か、早稲田
のスーパーフリーみたいな人間でいいのかと問うのは名誉毀損になりません。

名誉毀損の構成要件は、①目的の公益性②利害の公共性③事実の真実性もし
くは真実であると信じるに足る相当性です。創価学会の会長の公人性はCPの
月刊ペン事件裁判の時の団藤判決で公認されています。①②はクリア。録音
された新井さんの証言を聞けば、誰だって真実だと信じるでしょう。③もクリア。

この事は田口さん解雇翌日、福島弁護士にも言ったことです。「中央ジャー
ナルには、T川の女性問題と書いてあるけど、それは間違い。女性を酔わせ
てみんなで回すという刑事事件です。こんな人間が創価学会会長になってい
いのかと問うことは構成要件を全てクリアしてるので名誉毀損になりませんよね」。

福島さんは黙ってました。この時の私とのやりとりは、当然、Y尋、T川に
も伝わっているでしょう。T川は０６年６月、私を査問する前段階で、新井
さんに数度会い、取り込みました。今の新井さんなら別の証言をするでしょ
うけど、この録音で言っている事のほうが信憑性が高いと当然判断されるで
しょう。

この音声ファイルの所有権等で争ってくるかも知れませんが、このファイル
は私のICレコーダーで録ったもので、録音後そのまま私に返されました。
当然、新井さんにはコピーを差し上げました。以来、１０年一度も返せとも
使うなとも言われたことはありません。新井さんが善意で録り、くれたものです。

私は、この録音音声で、こんな人間が創価学会の次期会長になっていいのか
ということを全学会員に問い掛けたいと思います。私がT川を会長不適格と
判断する理由は主に３つ。①６年前の参院選愛知選挙区を指揮して、箸にも
棒にもかからず負けたこと。これに勝利していれば私もT川でOKだと思います。

②仏敵との攻防戦に弱い。内弁慶。日顕宗との戦いは言うまでもなく、矢野
絢也打倒をCPから託されたにもかかわらず、負けてしまい、結局、和解した。
③CPが全体会議でT川に突きつけた条件、「谷川は表と裏がある。仮面をつけ
ている。その仮面が取れたら会長にしてもいい」をいまだに満たしてない。

CPはT川に対して、「会長になろうとして派閥を作っている。とんでもない」と
叱責しましたが、T川の職員人生はまさに、自分が会長になるために邪魔な人間
を裏で抹殺する謀略の連続。兵藤さんしかり、弓谷しかり、新平さんしかり。
このT川会長の勝ち馬に乗り、旨い汁を吸おうという取り巻きも最低。

法匪、報恩社、S藤、T治、O石、マル金等々。これに本六、新六の多くや、
それに準じるFKクラスも加わっている。T川の仮面を剥いだら現れる素顔が、
スーフリーの和田さんｗ　それだけでなく新井発言には、夜な夜な女性に言
い寄っているハレンチな素顔、銀座のクラブ等での豪遊女性遊びも。

活動派遣の数十万を使い込んじゃって子供に自転車買うカネもないとか言って、
一般会員の新井さんから何十万ももらっていたという証言も出ていますが、

この事実一つで今なら職員クビでしょう。加えて、アクセンチュアからのキックバック、伊藤由佳子との不適切な関係等々。こんな人間が会長でいいのか？

今度、「学会の最高機密漏洩の犯人はだれか？」というテーマでお話しようと思ってます。第一次宗門事件の時の、いわゆるマジック事件写真。これは矢野・秋谷の仕業です。浅見さん落としの怪文書「天鼓」。これは報恩社が犯人。ヒロシは証拠がないと新井さんに弁明していますが大嘘ｗ

usaさんや朗らか太郎さんが聞いた天鼓作成者・伊藤裕教の自慢話もありますが、決定的なのは東海道広宣局長だった赤染氏の証言です。天鼓第一号が出る一週間前、神奈川広宣部ナンバー２の大平というメンバーの結婚式が横浜ランドマークタワー界隈でありました。二次会を近くのロイヤルホストで。

その場に居たのは、伊藤裕教、赤染ほか広宣局の中心メンバー数人。そこで裕教が唐突に浅見FKの悪口を言い出し、伊藤園、ビックカメラ等との癒着や、会員から「本部で使っていただきたい」と出された一千万円を金沢、岡松と山分けしたことなどベラベラじゃべった。「それと全く同じ内容が天鼓に、出ていたので、ああ、裕教がやったのだな」と思ったと赤染。

その後、「天鼓」は平成１１年１月末まで１カ月半の間に１０号まで出て中断。２月に赤染が裕教に会った際、「最近、出ないけどどうしたの？」と聞くと、「選挙がありますのでしばらく休みますけど、またそのうちやりますから」ときっぱりｗ

こんな事実なんか、犯人探しの責任者に任じられたヒロシが本気で調べて出ないわけがない。何より、報恩社犯人説を唱えていた私に聞いてこなかった事自体が変(笑)　ちなみに、波田地犯人説を口にしたのは報恩社の皆本です。渡辺茂夫が「天鼓の犯人はだれ？」と聞くと「波田地さんじゃないですか」と。

これで私はぶち切れたわけです、「お前ら、自分でやっておいて俺を犯人に仕立てるつもりか。もう許さん」と(笑)　ヒロシは私を切れやすいと誹謗するけど、これで切れなかったら切れる時がないｗ　報恩社を庇い事実を隠蔽したヒロシが早稲田ＯＢの浅見送別会で悔しいと泣いてみせたのは有名な話(笑)

話が横道にそれましたが、２００３年のテーミス、２００８年のフラッシュによるＣ１離婚情報の漏洩、２００５年の弓谷解任事件報道（週刊新潮）、２００７年温家宝会見アブラギッシュ記事（週刊文春）、去年１０月の南元センターＣＰ病状記事（週刊文春）など、これらはT川が庇う広報室のO川が犯人。

「天鼓」が「T川のスキャンダルを探せと指示を出した浅見への報復」であったように、ここ１０年間の最高機密漏洩はT川会長擁立へ向けて、邪魔者を追い落とし、障害（たとえば矢野・T川裁判）を取り除くための工作であった。自分が会長になるためだったらCPやC1も売る。これがT川及び一派の正体。

ヒロシが新井さんに語っている大嘘の一つは、妙観講がわが家の電話の会話を盗聴録音したテープを渡辺茂夫から入手した北林が、わが家に無断でテープ起こしし、裁判所に提出していた事実を新井さんから問い詰められると、「あれは大山さんが悪い」と述べていること。これは完全な話のスリカエです。

資料⑨ 丹治一派一掃事件

資料⑨　裏_oni_倶楽部の投稿から

Date:　2009年10月29日(木) 午後5時13分
タイトル:　きょうの出来事です。

こんにちは、隠居です。
問い合わせが多いので、こちらでまとめて……w

きょうの全体会議で、前々から噂されていたT治一派追放の人事が発表されました。T治のシマ・報道第3部（聖教の座談会や池田大作の軌跡等々担当）は、全員、編集局から追い出されました。

T治は、戸田平和研究所に異動。片腕の松岡、小泊という編集局次長は、それぞれ業務局、広告局へ。
第3部部長の楠本は、業務局の副部長に降格。学生部長をやった森山（新宿総区男）は東京書籍部へ。そのほか、地方へ転勤などなど、何人もの若手が飛ばされました。

T治を野放しにした責任と、ガン手術後の体力低下を理由に、本多編集総局長が編集総局主事に棚上げ。
新たに、学会本部からかつて創価新報編集長を務めた緒方さん（浅見さん時代の組織局長）が総局長に。T治の後任の編集局長に小島（豊島区総区長、7期、T川一派）が就きました。

今回の経過、処分について、先生にご報告した際、次のようにおっしゃっていたそうです。

「ぎりぎりのところで、聖教城が守られたんだな。

上が戦わないからこんなことになるんだ。
だれが戦ったんだ。ほめてあげて」

といったお話があったそうです。さらには、

「もっと遠くへ飛ばせないのか」

とも。

「丹治については東哲行きの話もあったようですが、八尋さんがかばったそうです。今回の告発の際に名乗りを挙げた人は、相島さんと教学解説部長の川瀬さん。お二人の名前はPの耳に入ったと聞いています」

との連絡もありました。

「上が戦わないからこんなことになるんだ」は、原田代表理事、本多総局長に投げつけてやりたい言葉ですね。ホント、この二人は、T治と同罪です。
打ち首獄門市中引き回しがふさわしいと思います。

T治一派と戦った人間として、相島、川瀬の名前があがっていたようですが、ほかにも大勢、頑張った人間がいます。私が知るかぎりでは、資料室の佐久間さん、大白編集部の宮地さん、地方部の松本民雄さん、部署は忘れましたが、S大卒の山口さん等々です。
これらの人々は、賞賛に値いすると思います。

T治の後任の編集局長・小島は棚からぼた餅を待っていただけで、戦ってないです。その意味で、もう一山、二山ありそうですね。
聖教の三変土田の始まりです。

ともあれ、聖教の城が守られたことに、
心から、万歳です＼(^o^)／。

隠居
****
Date:　2009年11月3日(火) 午後4時08分

ご隠居さん　みなさん
こんにちは　金星です

T治の件についてSPでは副部長以上を集めて説明があったと聞いています。

私の聞いた処分人数は１５人でした。
T治の処分理由はパワハラと金で男子部人事への介入やパワハラと『池田大作の軌跡』の取材費で桁違いの金を目的外に使ったという話になっているようです。

またT治は一派を立ち上げ学会を乗っ取ろうとしたとも言われているようです。

パワハラをして、不正人事をして、巨額の金を不正使用して
それでも解雇や損害賠償をされないというのは異常なところですね。

T治にゲロされると困るトップ幹部が沢山いるのでしょうか。
トップ幹部は自ら身辺調査を受けてもらいたいものです。

****

資料⑩　矢野との和解と週刊文春の舞台裏

●矢野絢也と学会の和解と週刊文春CP病状記事の舞台裏

週刊実話 7/19号 (2012年07月05日発売)
◎短期集中連載　池田創価学会崩壊のXデ――①
勃発した次期会長レース泥沼の暗闘
～ジャーナリスト・山田直樹～

>二審はどこをどうみても学会側の敗訴は決定的だったはず

裁判の形勢がどうであったかは藪の中ですが、確実に言えることが二つあります。
①矢野との和解でT川の脅迫発言の事実も認定した一審判決が永久に残ることになった。
シアトル事件裁判で宗門が学会との和解に応じたことによって、日顕の売春婦とのトラブルの事実を認定した一審の判決が永久に残ることになったの同じです。
②矢野と和解したことで、学会は裁判所に改竄した音声データを提出する謀略団体であるとの汚名を返上するチャンスを永久に失ってしまった。

詳しくは柳原滋雄日記 2009/06/28「次は矢野絢也が真実性の立証へ　公明OB3氏が新たに提訴」を参照。ソースは公明新聞記事。“製造元ソニーのデータ解析によって同データに改ざんなしと科学的に証明されていた“と言っていたのに、和解でこの主張も取り下げ。

実話の記事が言うように、絶対に勝てる形勢にあったのなら、T川や創価学会の汚名返上の絶好のチャンスだったはず。和解するにしても、二審の判決が出てからにすればよかったのでは？と誰もが思うであろう。では、なぜ、慌てて、あの時期に、T川も学会も永久に汚名を被る選択をしてまで和解したのか？

山田直樹の記事の最大の欺瞞は、和解に至った本当の理由を隠蔽している事である。
その理由とは以前も紹介したアクセスジャーナルの報道。
「矢野和解、お蔵入りした本の中身」
「矢野和解の仕掛け人は仙谷由人」
ここに出てくる「週刊朝日」の記事「仏敵・矢野と歴史的手打ち　お蔵入りした『暴力団』本の中身」によると、“学会と暴力団”がテーマの矢野の暴露本第二弾が和解の直接のきっかけ。聞く所では、矢野がゲラを学会のY尋に提示、Y尋が驚愕し手打ちを。

第一弾の『乱脈経理』を読んでも分かる通り、矢野に暴露されて困るのはCPよりもむしろ、Y尋をはじめ側近幹部たちのほうである。第二弾は第一弾以上にY尋らをビビらせた。
「幸い、CPは再起不能状態。矢野と和解するなら今だ。和解すればT川会長擁立の障害も消える・・・」と考えたに違いない。

アクセスジャーナルによれば、矢野和解の仕掛け人は仙谷由人だったという。矢野の息子を第2秘書として抱え面倒をみている。仙谷は野田首相の後見人。消費税法案通過に政治生命をかける野田の活路は小沢一派を切り、自公と大連立を組むしかない。この方向に舵を切るのに矢野カードを使えるとふんだ。

ただ、最大の障壁CPが元気な間は和解は無理と諦めていたところへ、昨年10月、週刊文春のCP病状記事。「この記事を見た仙谷氏は、池田名誉会長は再起不能と見て、学会の弁護団のトップと親しいある経済人を送り、和解の件を打診したんです」

ここから和解、T川会長、大連立が一気に進んだ。

仙谷・矢野とY尋・T川が腹のさぐり合いをしていた時期に、仲立ちをしたのが仙谷と近しい野中であり、野中と昵懇のT岡・K林であった。アクセスジャーナルの“昨年12月、竹岡長男の結婚披露宴にT川・S藤、白浜の他、仙谷の代理の経済人、野中も出席していた”との下りはこの舞台裏を伺わせる。

週刊文春の病状記事の掲載も、この仙谷、野中、竹林の裏交渉で出てきたものであろう。CPの再起はないから和解をとの学会側の言辞を信用できなかった矢野が、踏み絵を踏ませたのが、あの記事ではないのか。CPが元気であればあんな記事出されて黙ってるはずがない、そもそもY尋らが出せるはずがない。

ところが、その記事が出た。CPも無反応だった。矢野、仙谷はCPの再起は本当にないと確信し、和解に応じた。条件は①矢野の既刊本を増刷しない②学会の名誉を毀損する新刊本を出さない。こんな条件で矢野が和解したのは何故か？巨額のカネが動いたとの話もあるが、息子清城の出馬密約もあるのでは？

こう考えてくると、あの週刊文春の病状記事をY尋がO川を使って書かせたというの当然ですね。だいたいあんなちっぽけな、どこにあるか分からないお詫び文で手打ちしたこと自体が怪しいんですけど。居もしない看護師立てたり、デフォルメした内容にしたのは即打ち消せるようにとの配慮でしょうね。

池田大作 担当していた元看護師が語る「厳戒病室」本当の病状

2カ所の脳梗塞、車イス、夜も病室の電気を消さない理由

相光センター

4月19日に撮影されたという矣人とのツーショット（五月三日付聖教新聞）

「新聞や雑誌では、池田先生が今も元気で活動されているように書かれています。しかし、私がお側で世話をした数カ月前には、歩くこともままならず、読み書きや他人と話すことも難しい状態でした。二十四時間体制で医師や看護師が常駐し、病室には、秘書が先生の様子を見守っている。いつ何があってもおかしくない状況だったのです」

緊張した夜間でそう語るのは、東京・信濃町にある創価学会の医療関連施設「南元センター」で看護師として勤務していたAさんだ。

彼女が語る「池田先生」とは、今なお創価学会のカリスマとして君臨する池田大作名誉会長（83）のことを指す。Aさんによると、池田氏は現在、南元センターの五階にある特別な病室に入っているという。

昨年の五月中旬以降、池田氏が公の場に姿を見せなくなって一年以上が経過している。そのため、これまでも重病説が囁かれてきた。

Aさんによれば、学会内でも池田氏の健康状態や入院先に関しては、ごく一部の関係者しか知らない超極秘事項だ。数カ月にわたり看護を担当したAさんが、池田氏の病状を明かす。

「先生の病気は、脳梗塞です。梗塞は二カ所にあり、もともと糖尿病という持病をお持ちなので、合併症を誘発する恐れもあります。自力で歩くことはできず、移動は車椅子でした」

Aさんが池田氏の担当になったのは昨年のことだ。

そもそも南元センターは、創価学会の健康保険組合に所属する組合員が健康診断を行う医療施設である。一階から四階までは普通の病院と大差はないと、Aさんは説明する。

「おそらく南元センターで働いている職員の大半が、五階に池田先生がいらっしゃることを知らないと思います。下のフロアで勤務していた私も、まさか最上階に先生がいるとは夢にも思いませんでした」

Aさんは婦長から五階の勤務を命じられ、最上階へ向かった。エレベーターを降りると、制服に身を包んだ看護員の制するような視線が容赦なく注がれた。フロア全体のピリピリとした空気を感じながら病室の扉を開けると、生花の香りが鼻の中に広がる。そして、大きなベッドに痩せた老人が横たわっていたのである。

「それが池田先生でした。尊敬する先生が目の前にいらっしゃって驚きました。大変名誉なことだと思い、嬉しくて涙が出そうになったことも覚えています。

私が担当し始めた頃はまだお元気で、週に一、二度、屋上で外の空気を吸ってらっしゃいました」

著作や写真を投げ始め……

その後、池田氏の容態は悪化。病室の外へ出ることができなくなったと、Aさんは振り返る。

「担当した当初から、先生はご病気の影響で言語障害が出ることもあり、お話も聞き取りづらい部分はありました。でもその頃は、なんとか会話もでき、幹部の方などご関係者がお見舞いに来ていろいろお話しされていたようです。

食事も自分でされ、病室の大きなテレビを見たり、読書をなさっていました。ただ、屋上へ上がったり、読み書きができたのも今年の一月頃までだったと思います。高齢や脳梗塞のせいで認知症の症状が進行してしまったからなんです」

池田氏の"不在"は一年以上に（上）
右は、対談が収録されている「潮」（2011年11月号より）

東日本大震災が起きる前、池田氏の病室である"出来事"が起こったという。

「病室には、池田先生の著作や、各界の著名人と撮られたお写真などが飾られていました。一月の終わりから二月のはじめ頃だったと思いますが、先生が車椅子に乗ってらっしゃったとき、突然、奇声を上げてご自分の著作や写真を投げ始めたのです。慌てて、秘書や看護スタッフでお止めしました。

この後、先生の近くにモノを置いておくのは危ないということになって、そういった展示品は撤去されました。メガネも自分で割られてしまうかもしれない、と外すことになりました」

三月に入ると、池田氏の症状はさらに進んだという。

「他の人を認識できていないのでは、と思う日もあり、看護師や来客の方とも意思疎通ができないこともありました」

担当していたAさんが重い口を開いた。車椅子、言語障害、意思疎通も困難――。厳戒体制の病室で何が起きていたのか。衝撃の証言。

また、その他の能力も日を追うごとに変えていった。

「口腔が困難になり、食事もきちんと摂れなくなりました。看護する側としても、誤嚥が怖い。誤嚥性肺炎を起こしてお亡くなりになる高齢者が非常に多いからです。そこで首から一日三回、経管注入で栄養剤を入れることになりました。口から食事を摂れないと、どんどん痩せていきます。みなさんがご覧になられている写真より十キロ以上痩せ、お元気な頃の面影がなくなっていました。頬のつやがなくなり、頬がこけてゲッソリした感じでした」

車椅子ごと入れる浴槽を使用

なぜ、熱心な学会員でもあったAさんが池田氏の病状を明らかにすることを決意したのか。

「私は池田先生をお慕いして創価学会へ入りました。今も、その尊敬の思いは変わっていません。

私が先生の看護スタッフを始めた頃は、まだ先生もお元気で、"神様"だと思っていました。しかし、先生のお世話をするうちに、先生も寿命のある人間なんだ、と痛感したのです。

幹部の方々は、心配する我々学会員に対して『先生は元気です』とアピールするばかりです。しかし、それは学会員を欺き、池田先生を冒瀆しているのと同じではないでしょうか。

末端の学会員にも先生の現状をお知らせして、先生のために大動行会を開いたほうがいいと思うのです。それが、今回、私がお話しした理由です」

話を池田氏の病室に戻そう。

Aさんは、衰弱してゆく池田氏の看護をしながら心を痛める日々が続いた、と振り返る。

No. 14

「以前は病室の隣に大理石のお風呂があってよく入られていたのですが、その浴室は使われなくなりました。大理石の浴槽のそばに車椅子ごと入れる介護用の浴槽があって、そちらを利用するようになったのです。入浴は四、五人がかりの作業でした。回数も、私が勤務していた当時は週二回ほどになっていました。

看護師がオムツを交換し、婦長など地位の高い方が、病衣を着た先生のお顔などを拭いていました」

池田氏専用のフロアにいる看護師は、日勤三名、夜勤二名の計五名。二十四時間体制で勤務していたという。そのほかにも警備員が警備室に三名、エレベーター前に一名、病室の前に一名配置されている。病室には秘書とともに、監視カメラが設置され、ナースステーションでチェックできるようになっていた。

階段には防火扉が設置され、普段は鍵がかけられていた。そのため、昇り降りできるのはエレベーターのみ。そこで警備員が出入りの人間を見張っていた。

「まず驚いたのは、最上階の物々しい雰囲気です。警備員は第一警備の方々でした。どの人も体格がよくて、何か格闘技でもやってらっしゃるような人だと思います。目つきが鋭くて、通常の業務をしている私たちも常に監視下に置かれているような感じでした。四階以下は金城会の方が警備をしています」

第一警備や金城会とはどんな部署なのか。学会に詳しい人物によれば、

「第一警備は、池田名誉会長直属のエリート警備部隊。また、金城会は全国各地域から集められた一般の会員で、柔道や合気道の有段者が多いことでも有名です。こちらも池田会長の警護が主な業務といわれています」

警護体制だけでなく、病室の作りにも秘密が隠されていた、とAさんは話す。

「先生の病室は縦が約七メートル、横が約五メートルの広さです。白っぽい壁は鉄製で、『マシンガンで撃たれてもびくともしない』と説明を受けました。病室の窓ガラスも防弾ガラスだと聞きました」

まるで軍事施設のような堅牢さだが、一歩病室へ入ると、そこには清潔な洋間が広がっているという。

「先生の病室にはキングサイズのベッドがあり、シーツ、掛布団カバー、枕は全て金色のペーズリー柄でした。ベッドの側には、小さなテーブルと椅子が置いてあり、お元気なときには、そこでよく筆ペンを手にとって和歌を詠んでいらっしゃいました。

他に来客用の応接セットもあります。テーブル、ソファーと椅子が二つ。

また病室には絨毯が敷かれているのですが、『バッキンガム宮殿に使われている絨毯と同様のもの』と言われました。一般の病室とは全く違い、外国の洋館みたいなお部屋なのです」

備え付けの棚には、大きなテレビ、先述した著作や写真などが並ぶ。花瓶には様々な種類の生花が飾られていた。

病室でも髪型はオールバック

「香峯子夫人が週に何度か病室にいらっしゃって花を取り換えていました。エレベーターで五階へ上がるときは、警備員や看護師などのスタッフは整列してお迎えするのです。夫人は長居することもなくて、一時間くらいでご自宅に戻られることが多かった」

また、池田氏の病室では重要なルールがあった。

「一番初めに注意されたことは『病室の電気は切ってはいけない』ということでした。先生は明かりが消えるとよく眠れないそうなんです。昼夜逆転することも少なくなく、昼間に眠ってらっしゃることも多かったでずね。病室の天井は折上天井になっていて、蛍光灯が何十本も取りつけられていました」

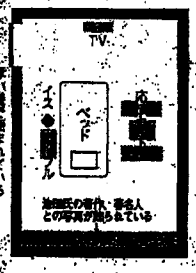
実際、南元センターの周囲から池田氏の病室とされる場所を見上げると、配管が確認を行った夜には、いつもブラインドの隙間からかすかに明かりが漏れていた。

厳重に警護された池田氏の病室。そこに足を踏み入れるのは夫人など池田氏の家族と医療スタッフ、ごく限られた学会の幹部だけだったという。

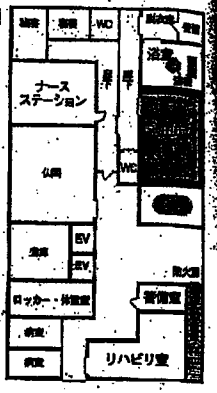
「池田先生の側近の方はいらしています。幹部の中でも本当に重鎮の方がいらしていました。先生が話ができたときには、病室の隣にある会議室でいろいろ話をされていたようです。

髪の毛やお顔は来客があるので、二日に一度くらい手入れしていました。髪型も皆さんがご存知のオールバックです。先生はいつも綺麗にしていらっしゃいました。鬚は電気カミソリなどで丁寧に剃らせていただいています。夫人から

病室の配置



フロアの間取り図



出来るような
お体ではない
のに……(Aさん)

確かに、学会の機関紙『聖教新聞』によれば、池田氏は一月二十一日、震度五強の三月二十一日、池田名誉会長は東京・新宿区の創価学会第二別館で勤行を行ったと報じた。また、五月三日付の同紙には夫人とのツーショット写真が掲載されており、キャプションには〈4月19日、東京・新宿区で〉と記している。

南元センター取材は「拒否」

学会系の総合誌『潮』でも、海外の要人たちとの対談を連載。六月号からは、モスクワ大学総長、ヴィクトル・A・サドーヴニチィ氏との対談が掲載された。この連載対談の中では、東日本大震災などにも触れられ、池田氏が、「本年五月、ロシア国立交響楽団が来日公演し、各地で大きな反響を呼びました」と言及しているが、そんなことが可能なのか。

創価学会に尋ねると、

「(聖教新聞の夫人との写真は)今年の四月十九日に撮影されたもの。また、連載対談は近年の往復書簡をまとめたものです」

さらにAさんの真摯な証言に対しては、

「ご指摘は全て事実無根です」(創価学会広報室)

否定するのであれば、南元センターの五階を見せてほしいと求めたが、「部外者の方を入れたことはありません。もしそこに名誉会長がおられなければ、どこかに移した、と言われるだけでしょう」と受け入れられなかった。

別の学会関係者も百下に否定する。

「南元センターは一般の学会員も利用する施設。五階に入ったことはありませんが、そこに池田先生がおられるなら、隠しておけるはずがありません。

今も池田先生は、秘書を通してさまざまな指示をなされています」

だが、先述したように、下の階で働いていたAさんでさえ、五階勤務になるまでは、そこに池田氏がいるなどとは、想像だにしていなかったのだ。そもそも家族やごく一握りの幹部を除き、池田氏の所在や現状が、彼の健在を祈る一般の学会員にさえ隠し通されていること自体に無理があるのではないか。一刻も早い真実の開示が待たれる。

●個性豊かなおだしたち
フィメトリクスジャパン……(二九)
ロネックス……(二五七)
ルイ・ヴィトン……(表二)
●貴金・宝飾
赤福……(五七)
石野味噌……(一二三)
キリンビール……(中口絵)
三和酒類……(特表二)
日本鉄粉……(一二九)
浪田酒造……(特表三)
ロックモック……(前口絵)
ロッテ……(二五五)
●旅の風景
近畿日本鉄道……(後口絵)
JTB……(八七)
パラダイスインター
ナショナル……(中口絵)
ホテルグランドパレス
……(後口絵)
●趣味・娯楽
アミューズ……(表四)
●金融・保険
三井住友銀行……(四五)
●あなたの健康に
啓芳堂製薬……(九三)
第一薬産……(四〇)
東京印刷……(六九)
ビオフェルミン製薬
……(後口絵)
●ゆとりある暮らし
アイウエル……(八二)
阿倉宗……(表三)
エルピーガス協会……(中口絵)
KDDI……(七八)
JT……(五八)
大明化学工業……(八八・八九)
大和ハウス工業
……(九六～九九)
日本放送……(七一)
日本板バルブ商事……(前口絵)
ノエビア……(中口絵)
佐運の星……(一二一)
ユニバーサルエンター
テインメント……(八〇)
理研化学工業……(五二)
ワンポイント情報……(六〇)
●読書へのいざない
朝日新聞出版……(一四一)
市田印刷出版……(一四〇)
講談社……(一四三・一五一)
光文社……(一五一)
財界にっぽん……(七五)
実業之日本社……(一四六)
小学館……(一五一)
新潮社……(一五一)
星雲社……(一五一)
中央公論新社……(一三九)
東京出版……(一五九)
日本印刷学会……(七五)
文芸社……(一三八)
毎日新聞社……(一五〇)
広告に関するお問い合わせは
03-3288-6174まで
お願いします。

No. 15

読者より

真央への想いに感銘

「浅田真央母・匡子さんが打ち明けた『娘への想い』」。「真央の人生を成功させることが、私の人生だと思ってる。そのためになら、何でもする」。その切なる想いに感銘を受けた。来たるべき全日本フィギュア、真央さんには母の想いを胸に全力を出し、表彰台で笑顔を見せてほしい。（神奈川・佐藤和夫・無職・79）

先ず議員より始めよ

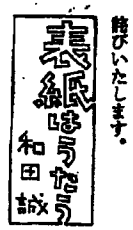
「野田民主　議員削減も公務員改革も先送る『国家の寄生虫』は当然の指摘である。社会保障と税の一体改革はやむを得ないとは思う。ただ話の順序が違うのでないか。先の参院選で民主党は衆院で八十人、参院で四十人を削減するマニフェストを掲げた。まず自ら痛みを引き受けるべきだ。（埼玉・永末晴成・無職・70）

被災地へのまなざし

マスコミが東北を取り上げる回数も少なくなり、次第に震災が風化しはじめている気がしていましたが、文春は違いました。グラビア「仮設住宅　独居老人たちの冬」からは、東北への思いが溢れています。これからも被災地の方々を、温かいまなざしで追ってほしいと思います。（千葉・二神雪子・無職・86）

【編集長から】

小誌10月27日号に掲載した「担当していた元看護師が語る　池田大作『創価学会』名誉会長『終末病室』本当の病状」の記事につき、創価学会より「該当する看護師は存在せず、証言は事実無根である」との抗議がありました。これを受けて小誌は再取材を行いましたが、証言者が看護師であるとの確証を得るに至りませんでした。病状についての記述も取り消し、ご迷惑をおかけした関係者にお詫びいたします。



（フロスティ・ザ・スノーマン）

アメリカ製の雪だるま人形です。クリスマス・シーズンにお似合いだと思って描きました。

題名はフロスティという名の雪だるまにシルクハットをかぶせたら、踊り出して子どもたちを喜ばせたという歌。西部劇俳優ジーン・オートリイが歌いました。この絵の雪だるまはフロスティかもしれません。

読者による人気記事ランキング

（12月17日現在）

先々週号（12月15日号）

1位 雅子さま「離婚説」も出た不適応10年『嘘の全真相』	889票
2位 「定年後のワークシート」	639票
3位 TBS「黒い亀田祭り」を告発する！	317票
4位 中国政府系「3兆円ファンド」に日本企業が呑み込まれる！	259票
5位 その後の「坂の上の雲」	220票

先週号（12月22日号）

1位 総力特集　危うし日本	116票
2位 雅子妃「悲痛なジレンマ」	62票
3位 浅田真央母・匡子さんが打ち明けた「娘への想い」	46票
4位 山本五十六と「5人の参謀」帝国海軍は人事で崩壊した	30票
5位 医師団の「週刊誌報道批判」他人のせいにするな	10票

注）ランキングはてこずるパズルの解答票をもとに作成しています。なお先週号の票数は発売2日後のものです。

投稿案内

★投稿をお待ちしています。日頃お感じになっていること、世相に対するご意見、編集部への生文やご提案、記事へのご意見など歓迎します。（400字以内。氏名・職業・年齢・住所・電話番号を明記のうえ、〒102-8008　千代田区麹町3-23　週刊文春編集部「読者より」係まで。掲載分には記念カードを差し上げます。（ご記入いただきました個人情報は、本誌への掲載と賞品の発送のためにのみ使用します）

編集部への情報提供は　Email：f-weekly@bunshun.co.jp
・メールでのご質問やお問い合わせには、お答え致しかねます。

No. 16

2012・7・19号 週刊実話

勃発！次期会長レース

池田創価学会 崩壊のXデー

短期集中連載

ジャーナリスト・山田直樹

①「泥沼の暗闘」

"学会のドン"が公の場から姿を消し、その動向が注目され続けている創価学会。その大教団の内部から、思わぬ権力闘争が聞こえてきた。Xデーに向けた次期会長レースが、ますます熾烈さを増していく。

「暴露封じ」で争奪戦が激化

池田大作名誉会長が長らく公の場から姿を消し、俄然、組織改編が注目される創価学会。その日本一の大教団の内情を伝える記事が、今年4月、月刊誌『FACT』に掲載された。

「創価学会次期会長に谷川事務総長が確定」と題された記事に、谷川会長内定情報が記載されていたのである。

同誌は、次のように伝えている（以下抜粋）。

《創価学会の池田大作名誉会長のXデーが噂される中、かねてより学会のホープと目されてきた谷川佳樹副会長（事務総長・54）の次期会長昇格が確定した。谷川氏の会長昇格の障害になっていた矢野絢也・元公明党委員長との断絶で、2月10日に和解が成立したためだ。

矢野氏は谷川氏ら学会幹部から「政治評論活動の妨害」などの人権侵害を受けたとして、学会と谷川氏ら学会幹部7人を提訴。これに対して、谷川氏ら週刊新潮の学会関連記事を巡り、矢野氏らに名誉を毀損されたとして訴えていた。

ちなみに、ここで名指しされた谷川佳樹事務総長は大卒東生が在籍する学会本部において、少数派の東大卒の副会長。秋谷栄之助氏から原田稔氏へと会長戦が移行した'06年当時にも、一時、「会長就任」が囁かれたほどなのだ。

一方、矢野氏は公明党と創価学会の密接な関係を暴露して以来、学会から「仏敵」と非難され続けてきた人物。最近週刊誌である『聖教新聞』紙上でも、長らく悪言雑言を浴びせられてきたが、同誌には谷川氏が会長に就任する理由がこう書かれているのである。

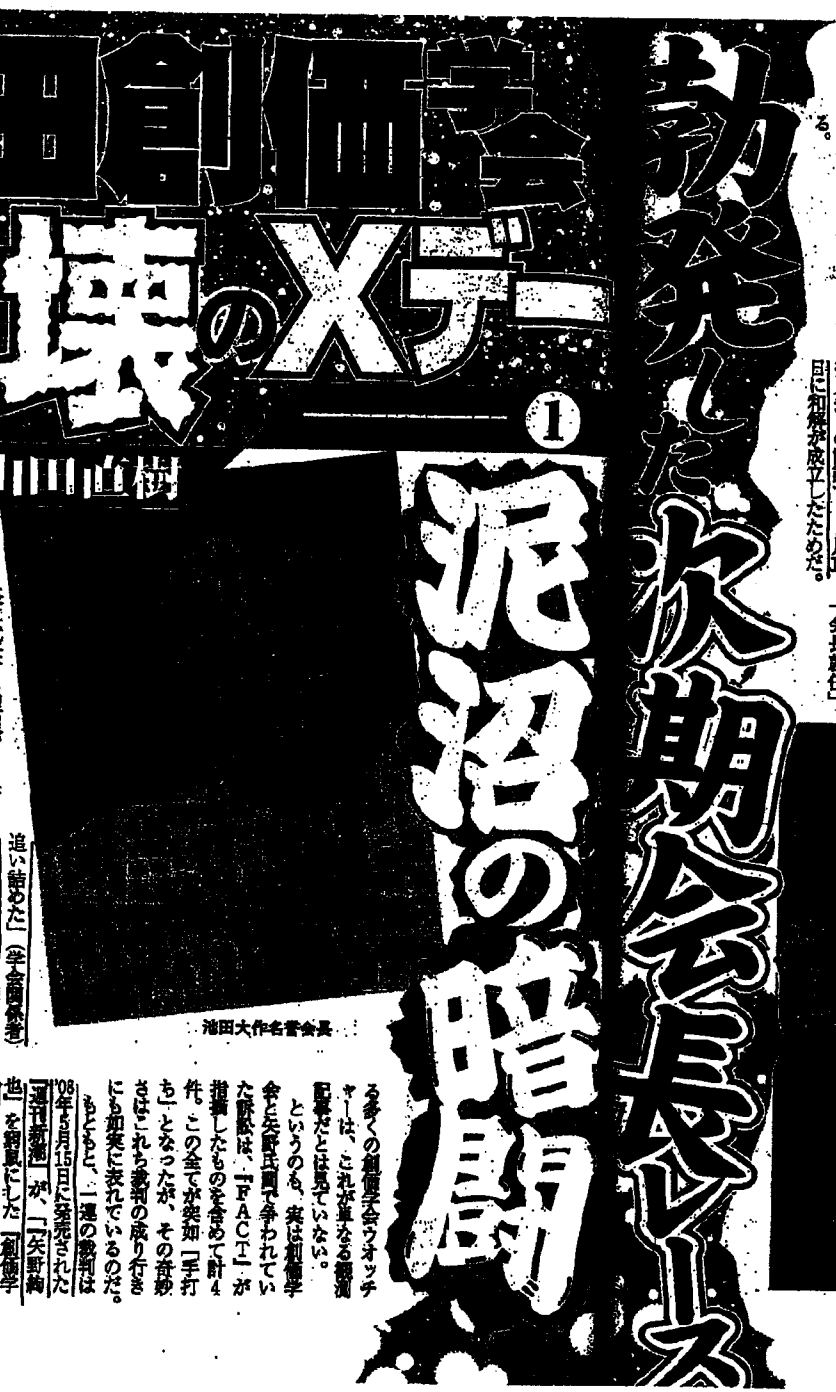
《学会側で和解を主導したのは谷川氏とされ、今回、矢野氏との和解を成立させたことで学会内での谷川氏の立場は「揺るぎないものになった」（本部の副会長）。なぜなら、谷川氏は「身体を張って矢野氏を説得し、追い詰めた」（学会関係者）ことで頭を上げたうえ、矢野氏を排したという「自らの汚点を消すことにも成功した」（同）からだ》

要は、この"学会最大の仇敵"との裁判に見事なケリをつけたことから、同誌は「谷川会長昇格」とする内定記事を掲載したのである。

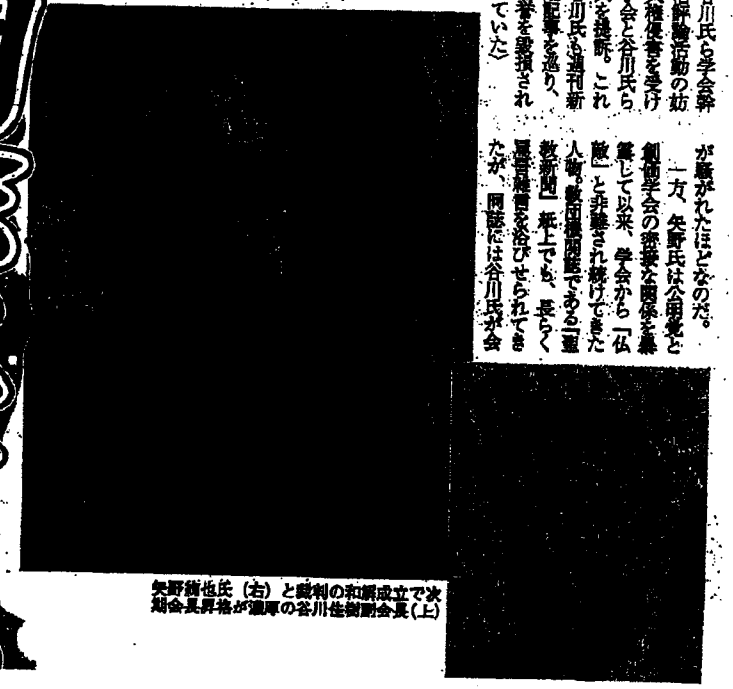
だが、筆者をはじめとする多くの創価学会ウオッチャーは、これが単なる観測記事だとは見ていない。

というのも、実は創価学会と矢野氏間で争われていた訴訟は、『FACT』が指摘したものを含めて計4件。この全てが突如「手打ち」となったが、その奇妙さはこれら裁判の成り行きにも如実に表れているのだ。

もともと、一連の裁判は'08年5月15日に発売された『週刊新潮』が、「矢野絢也「創価学会」の番犬と訣別中傷」と題した記事を掲載したことが発端だった。谷川氏が「人命に関わるかもしれない」、「息子さんは外国で立派な活動をしている。どうなってもいいのか」などと矢野氏を脅しとも取られかねない部分が問題となり、法廷闘争に発展したが、谷川氏



池田大作名誉会長



矢野絢也氏（右）と訣別の和解成立で次期会長昇格が濃厚の谷川佳樹副会長（上）

No.6

が矢野氏と『週刊新潮』を訴えた裁判は控訴審で、終始「学会有利」の展開を見せていたのである。

司法記者がこう話す。

「記事中の発言部分が、原告側が提出した音声録音になかったことから、一審では谷川氏側が勝訴。33万円の損害賠償を勝ち取った。ただ、一方で『原告側らの要求に従わないと、家族に何らかの危害が及ぶ恐怖を感じたことが推測される』と判断されたため、双方が判決を不服として控訴したのです」

ところが、二審になると、さらに学会に追い風が吹きだした。裁判長がワケありの人物になったからだ。

「実は二審の裁判長は、かつて『池田大作にレイプされた』と訴えた元学会婦人部女性らが起こした訴訟と同じ裁判長だったのです。同裁判は『訴権を乱用した訴訟』と断じられ、原告が門前払いを食らうという決着を見せたが、これが原因で二審も学会有利の裁判が展開すると評判だったのです」

実際、裁判長は一審が認めた「養育部分」に何度も疑問を呈し、矢野氏側には圧倒的に不利な予想された。

「和解」自体は裁判長が勧めたものだが、学会側は二審でも勝訴をもぎ取る可能性が極めて高かったのだ。

それが実際の裁判となったのには、明らかに谷川氏側の意図が働いたはず。

敵団内部は大揺れ

筆者は、そこには組織内で谷川氏が占めてきたポジションが複雑にからまっていると推測しているのだ。

すでに前述したが、谷川氏は秋谷会長が5期目の任期満了を迎えた06年当時に「次期会長就任」が囁かれた人物。ところが秋谷氏が続投し、わずか4カ月で引退すると、会長職は原田氏へとバトンタッチされた。

この秋谷氏の引退は、「池田名誉会長による実質的な解任だった」（学会関係者）ともっぱらだが、その陰に谷川氏も「出世レースから脱落した」（同）と見られていたのである。

だが、その内情は若干異なっていたようだ。

「谷川さんは'07年頃から愛知県選挙区をはじめ、現場の張り付きを精力的にこなしていた。ご学友の中心的人物で、組織内では次の会長レースが、『名誉会長の長男である池田博正副理事長を担ぐ創価大学出身者のご学友グループ筆頭である正木正明理事長と谷川さんの一騎打ちになる』と評判だったのです」（古参の創価学会活動家）

このため、昨年11月9日の原田会長の任期満了時にも、マスコミ筋には「谷川会長就任説」が駆け巡ったほど。結局、原田氏が続投したが、実はその裏では熾烈な次期会長レースが勃発していたのだ。

前出の学会関係者が言う。

「原田氏の満了時に間違いなったのは、谷川―矢野裁判の一審判決だったといわれている。天下の創価学会の会長が、『矢野氏を脅じたとも受け取れる事実がある』では、話にならないと見られたようです。要は、裁判が谷川氏の唯一のウイークポイントとして、組織内で注目されたのです」

こうした流れを見る限り、谷川氏が次期会長就任を見据えて、矢野裁判の打ち切りに動いたのはほぼ確実。そのためか、今では組織内からも「谷川待望論」が飛び出しているほどなのだ。

池田博正副理事長

国税が狙う池田個人資産

古参の創価学会関係者がこう話す。

「もともと、原田氏は若い世代への禅譲役と見られていた。その同氏が、名誉会長が公式行事に長らく顔を出さなくなった後に就任し、内部からは『それは名誉会長の意志なのか？』との疑問も出ていたのです。また、次期会長レースの対抗馬といわれる正木正明理事長は、池田チルドレン。そのため、『谷川氏が本命』との声も上がっているのです。ちなみに両者は原田さんの一回り下で、同世代です」

また一方では、その就任時期を観測する声も上がっている。

「谷川さんは仏敵である矢野裁判を見事に収束させたが、その一方、『池田家の金庫番』だった中西治雄氏は昨年末に脱会、仏敵・日蓮正宗側に寝返ってしまった。いずれは矢野のように学会の実態事業に及ぶ危険性をはらみ、組織内でも『なぜ、引き留め工作をしなかったのか』と原田会長への批判が上がりだしているのです。つまり、続投説と立場が逆転し始めている。谷川プレーンがこれを問題にすれば、8月24日の名誉会長の入信記念日、11月18日の学会創立記念日にも会長就任はあり得ると見られているのです」（創価学会の内情に詳しいジャーナリスト）

国税が厳しい目でにらむ

もっとも、創価学会には、これとは別に会長の首をすげ替えなければならない極めてナーバスな"お家事情"が存在するという。

'10年5月以降、公の場から姿を消した池田名誉会長は、今では『重病説』や『再起不能説』が公然と語られているが、同氏の病状が組織に思わぬ厄災をもたらしているのだ。

国税担当記者がこう語る。

「実は、学会はXデーに向けた国税対策に苦慮している。国税当局が『相続税の事前交渉に応じなかった』との情報があるからです。'90年～'91年の国税調査で、池田氏の個人資産を含む課税逃れのいきさつを、矢野氏が著作で暴露したことは有名だが、国税は以前から『学会には組織か、池田氏個人のものか判然としない資産が、美術品を含めて相当数ある』と睨んでいる。そのため、当局がリベンジに燃えているといわれているのです」

正木正明理事長

つまり、仮にXデーを迎えた時には国税が厳しい税務調査にあたる可能性が高く、裁判を打ち切った谷川氏の動きもこれに連動したものだと考えられるのだ。

「若手のホープである谷川氏は元来、組織防衛の考えが強く、会長就任にアクセルを踏み出したと見られている。いわば矢野氏の裁判和解は、これ以上の暴露到し、会長就任後に国税から追及されない組織改革を目指した動きと捉す者もいるのです」（前出・創価学会活動家）

ただし、気になるのは谷川氏が会長に就任した場合の人事だろう。いったいどんな面々が新体制を支えるのか？　そこには、まさに世代交代を象徴した人事が行われると見る向きが多いのである。

前出の創価学会関係者が、教団の次なる人事体制をこう考察する。

「仮に谷川さんが会長になれば、その右腕である佐藤副会長が、実務を仕切る事務総長などへと昇格する可能性が高い。佐藤氏は以前、野田佳彦総理と密談に及ぶなど選挙面の仕切りを着々とこなしているからです。また現在、壮年部長をしている赤本直樹副会長も、谷川プレーンで抜擢が期待されている。さらに、広報室や青年部筋にも谷川支持者が増えており、旧体制を一掃した改革が起きるかと見られている」

また、別の創価学会関係者はこう語る。

「問題は、創価学会の中でも元老院級の古参幹部として名高い、八尋頼雄副会長と長谷川重夫副理事長の了承を取り付けられるかだ。これをクリアすれば、谷川氏が会長に就任し、幹部人事が落着する可能性は十分にある。Xデーを旧体制で迎えるか、それとも新体制で水面下の激しい攻防戦が行われているのは確かなのです」

果たしてこの攻防戦は、どんな結末を迎えるのか。そのXデーが刻々と近づいていることだけは、間違いないのである。

No. 7

「アクセスジャーナル」のスクープ

2012/02/17
<ミニ情報>矢野絢也氏と創価学会が和解
カテゴリ: 政治 : 学会（公明党） : 執筆者: Yamaoka (2:10 pm)

元公明党委員長の矢野絢也氏と、創価学会といえば、いまや不倶戴天の敵といってもいい関係にある。

何しろ、昨年末には、矢野氏は『乱脈経理　創価学会 VS 国税庁の暗闘ドキュメント』（講談社）も上梓。これは学会の恥部中の恥部といってもいい脱税疑惑について、当時、池田大作名誉会長の命令で担当になった矢野氏本人が国税局と渡り合った内容を暴露したものなのだから無理もない。

大手マスコミではまだ一切報じられていないが、関係者によれば、去る２月 10 日、東京地裁で両者が争っていた訴訟４件につき、裁判長の和解勧告を受け入れ、両者は和解をしたという。

その４件とは学会側が原告が３件、矢野氏側が原告１件とされる。ちなみに、和解した際の学会側代理人弁護士は佐藤博史氏、矢野氏側は弘中淳一郎氏とのこと。

両者の間では、他にも争われている案件もあり、これですべての争いが終わったわけではない。

だが、今回の和解内容次第によっては、両者の対立に大きな影響もあり得るだけに、その内容はひじょうに気になるところ。池田名誉会長がすでに長く公に姿を見せておらず、後継者問題が浮上している状況下ではなおさらだ。

現在、詳細については確認中。判明次第、報じるつもりだ。

（上写真＝月刊『テーミス』11 年 11 月号）

……

2012/02/21
矢野絢也氏と創価学会が和解――その意味するもの
カテゴリ: 政治 : 学会（公明党） : 執筆者: Yamaoka (1:15 am)

本紙は２月 17 日、元公明党委員長の矢野絢也氏（冒頭写真。09 年７月１日、参議員会館で）と創価学会が、２月 10 日、争っていた民事４件につき和解したと報じた。

ただし、この時点で詳細な内容はまだ把握しておらず、この影響については不明とした。

その後、その詳細がある程度判明したので報告する。ただし、和解した場合、その和解条項を裁判所で閲覧できるケースもあるが、今回の件は一切非公開。しかも内容が内容だけに、関係者の口は一様に固く、基本的には外からはまったくというほど伺い知れないことを断っておく。

それから、本紙では第一報を報じた際、和解になったのは東京地裁で争っていた４件としたがこれは誤り。３件は地裁だが、１件は高裁だった。それから、この４件の内、矢野氏側が提訴した１件（残りの３件は学会側が提訴）とは、「評論家としての活動を辞めるよう強要された」などとして、創価学会と幹部を相手に５５００万円の慰謝料を求めた件を指す。

一方、学会側が提訴した件は、いずれも矢野氏が言論活動の一環として著書や週刊誌などの記事になったものに対する名誉毀損に基づく損害賠償や謝罪広告掲載を求めたもので、被告として矢野氏と共に出版元の講談社、新潮社も入っていた。

そして、本紙の取材では両出版社も和解に応じた模様だ。

また、この４件は、矢野氏が学会側と争っていた全訴訟であると思われる。

そして、矢野氏は学会の恥部を知る元大幹部で、学会批判の記事を次々と書いていたのだから、今回の和解がどのような内容かは不明ながら、少なくとも学会にとって大きなメリットがあるのはまず間違いないと思われる。

「学会側にすれば当初、すでに恥部中の恥部である脱税疑惑の著書（上写真）が昨年 10 月に出ており、和解など出来ないとの姿勢だった。だが、矢野氏はさらに執筆して行く意向で、いまからでも“攻撃”が止まれば十分メリットはあった。実はそれを阻止していたのは、誰も言わないが池田大作名誉

会長だけだったとも。その池田会長は体調を大きく崩し、実質、後継争いが始まっているなか、今後を見据え、実は池田会長以外の幹部は皆、これ以上、ダメージを食わないように本音は和解したかった。一方、矢野氏は矢野氏で高齢で、体調も思わしくなく、疲れ果てていた。そこに話が来て、半ば不本意ながらも乗ったということでは」（事情通）

では、実際のところ、今後、矢野氏は学会批判の執筆を続けるのか？

これについては、漏れ伝わって来るところでは、「今後、双方共に誹謗中傷しない」という和解条項もあった模様だが、では誹謗中傷ではなく真実なら書いてもいいことになるのか？

その辺は微妙で、外からは窺い知れない。

今後、実際に矢野氏がどう行動して行くのか、その動向を見守るしかないようだ。

……

2012/02/26

意思疎通できればあり得ない「和解」話――やはり池田大作・創価学会名誉会長は“脳死状態”

カテゴリ: 政治 ： 学会（公明党） ： 執筆者: Yamaoka (1:09 am)

本紙は２月 17 日、そして 21 日と、矢野絢也元公明党委員長側と創価学会側が和解したことをスッパ抜いている。

その取材の過程で、知り得た追加情報をお伝えする。

タイトル通り、この和解の話、池田大作・創価学会名誉会長（84）が元気なら、あり得なかったと思われる。なぜなら、池田氏は「矢野は絶対に許せん！」とその急先鋒だったとのことだからだ。

池田氏といえば、Wikipedia によれば、「２０１０年５月の本部幹部会以降、体調不良から創価学会内の公式行事を全て欠席、現在へ至る。そのため重病説が一部マスメディアで取り上げられた」となっている。

一方、最近１カ月の動向を「聖教新聞」でチェックすると、１月 26、27 日と同紙に、原発に依存しない社会を目指すべきとの提言が載ったり、２月３～５日、ギリシャで開催されたギリシャＳＧＩ（創価学会インターナショナル）に池田氏のメッセッジーが流れたとされる。

しかし、このような提言やメッセージは、有り体にいえば、池田氏が健康でなくても、池田氏の名前でと称して代理が可能なものだ。それが不可能な、本人自身が公の場に出席したとの情報は見当たらない。

もっとも、だからといって、池田氏が亡くなったとの報道もない。

こうしたなか、池田氏の健康状態は極めて悪く、「“脳死”“植物人間状態”と見ていい」との情報は、すでにかなり以前から一部関係者の間で囁かれてはいた。

だが、巨大宗教団体の実質トップの池田氏の動向だけに、これまで大手マスコミでも、池田氏健康問題に関する観測報道は皆無といっていい。だが、もはや池田氏は“脳死状態”に間違いないといっていいようだ。

「回復の可能性がある病気なら、その際、池田(名誉）会長の逆鱗に触れ、処分され得るから、矢野氏との和解話が進むわけがなければ、まして和解になるはずもない。かといって、池田会長が最近、矢野氏との件で軟化したとの情報もなければ、そんな条件が生まれてもいないですから。

消去法で行くと、今回の和解は、池田会長はもう“回復しない”と上層部が判断し、ポスト池田体制を見据え、今後のリスク管理上取った行動と思わないわけにはいかない」（学会関係者）

それに、現在の学会は原田稔（会長＝上左写真）－正木正明(理事長＝上右写真）体制だが、すでにポスト体制が決まり、その発表の具体的な日まで決まっているとの有力情報もあるのだ。

一方、今回の矢野氏と学会側の和解の事実、これまで大手マスコミでは一切報じられていないと思われるが、そこはまさに学会・公明党史上、歴史的といってもいい出来事であり、さすがにまったく無視というわけにはいかないようだ。

ある大手週刊誌がすでに取材を終えており、来週前半には特集記事が出る模様だ。

……

2012/02/27
＜記事紹介＞「学会と矢野氏が歴史的手打ち――」（『週刊朝日』明日発売号）
カテゴリ: 政治 : 学会（公明党） : 執筆者: Yamaoka (1:40 pm)

明日発売（都内一部では本日）の『週刊朝日』（３月９日号）が、本紙がいち早く報じた、創価学会と矢野絢也・元公明党委員長との“手打ち”の件につき、報じている（冒頭写真記事。２頁）。
本紙は昨日の関連記事の最後で、「ある大手週刊誌がすでに取材を終えており、来週前半には特集記事が出る模様だ」と記しているが、それはこの週朝のことだった。
週朝記事では、最近の池田大作名誉会長の動向には一切触れていないが、今回の和解、「ポスト池田」レースにも影響するのではないかとして、ポスト池田（会長）候補につき、ある見解を紹介している。
さらに興味深いのは、矢野氏との和解で、学会がホッとしているのは、指定暴力団「山口組」傘下の旧後藤組との癒着関係を暴露されなくなったことではないかとの見方だ。
旧後藤組の後藤忠政元組長が出版した、『憚りながら』（横写真）という著書がある。
同書は「創価学会との攻防」というタイトルで、１章分を割いて学会との関係の一部を暴露している。
詳細は同記事をご覧いただきたいが、「そんな池田が裏で何をしてたかといったら、山崎やＸ（藤井）をパイプ役にして、俺たちヤクザを散々利用し、仕事が終われば知らんぷりだ。それで俺たちがちょっとでも、もの言おうもんなら、今度は警察権力を使って潰しにかかる」との記述だけ見ても、国税問題以上に、暴力団問題がまさに学会の恥部であることが窺える。
この記述のなかには、矢野氏宛（当時は書記長）に後藤氏が抗議の内容証明を送ったことも記されており、矢野氏がこの問題を知る立場だったことが窺える。
だが、今回の和解で、矢野氏の口は塞がった。
一方、後藤氏はといえば、例の殺人事件の件で窮地に陥りそうで、現在、海外にいるとも言われ、とてもではないが、暴露などしている状況ではないようだ。
……

2012/03/07
創価学会ＶＳ矢野絢也元公明党委員長の「歴史的和解」――仕掛け人は仙谷由人元官房長官説
カテゴリ: 政治 : 学会（公明党） : 執筆者: Yamaoka (2:34 am)

本紙がいち早く報じた、「不倶戴天の敵」だった創価学会と矢野絢也元公明党委員長の２月 10 日の「歴史的和解」から約１カ月――ここに来て、この誰も予想だにしなかった件の仕掛け人につき、仙谷由人元官房長官（冒頭写真）ではないかとの説が出て来たので報告する。
仙谷氏といえば、官房長官や法務大臣などを務めたことを思えば、現在の党政調会長代行というポストは不服だろう。
そこからの巻き返しというか、実力を誇示すべく、先の農水省スキャンダルでも仕掛け人説が出ていたのは本紙で既報の通り。最近は、自民党の大票田を壊すべく東電の国有化に水面下で動いているとも報じられてもいる。
また、ここでもと思われるかも知れないが、学会と矢野氏の件といえば、ある意味、もっともしっくり来るのは事実。なぜなら、仙谷氏の公設第２秘書は矢野氏の息子・矢野清城であることは知る人ぞ知る事実だからだ。事情を良く知るという政界関係者が明かす。
「仙谷氏が動く契機になったのは、昨年 10 月に出た『週刊文春』の池田大作名誉会長の病状に関する記事（上写真）ですよ」。
昨年 12 月 29 日号には、この 10 月の記事につき、学会からの「該当する看護師は存在せず事実無根」との抗議を受け、証言者が看護師であるとの確証を得るに至らなかったとして、「週刊文春」は「病状についての記述を取り消し、ご迷惑をおかけした関係者にお詫びします」との文面を出している。これだけ聞けば全面謝罪と思うだろう。だが、その文面が載ったのは、最終ページの「読者より」

コーナーで小さく、実質的には謝罪とは言い難い。
「この記事を見た仙谷氏は、池田名誉会長は再起不能と見て、学会の弁護団のトップと親しいある経済人を送り、和解の件を打診したんです。
これに対し、和解する気はあるが、矢野はどうなのか？　と。矢野さんは難色を示したが、実は仙谷氏は矢野さんの代理人である弘中（淳一郎）弁護士と同じ東大出の弁護士仲間で、そもそも矢野さんに弘中弁護士を紹介しており、その関係から、以前から矢野さんは仙谷氏に裁判資料も渡し、相談に乗ってもらっていた関係なんです。さらに好都合なことに、学会側の佐藤博史弁護士は仙谷氏と東大時代の全共闘仲間だったんですからね」（同）
ところで、現在、学会は２大勢力に割れているという。
一方は、谷川佳樹学会副会長（事務総長）――佐藤浩副会長（広宣局長）――竹岡光城（広宣局広宣企画部）のライン。谷川氏は東大、佐藤氏は早稲田大卒で、池田名誉会長のカルト的路線には批判的。こちらが改革派。
もう一方は、現在№１の原田稔会長（東大卒。横左写真）――正木正明理事長（創価大卒。同右）のライン。このラインに、池田名誉会長の長男もおり、こちらが池田派とのこと。
「ただし、原田会長は優柔不断でどっちつかず。実は任期からして昨年 10 月一杯で原田氏は会長退任予定だった。だが、池田名誉会長の容態に加え、矢野氏の強烈な学会の脱税疑惑を暴いた本（『乱脈経理』＝下写真）も出て、バタバタしていたので続投となったんです」（同）
仙谷氏が和解の話を持っていったのは谷川ラインの方だったという。
「池田名誉会長が“矢野は絶対に許さん！”といっているんですから、順当にいけば、№２から繰り上がる正木氏の方では無理。池田名誉会長は基本的に創価大学出身者しか信用せず、池田名誉会長が元気なら後継者は正木さんだったでしょう。
これに対し、谷川さんも、池田名誉会長は再起不能と見て、ならばこれを機会に池田独裁体制を廃し、将来に禍根を残す矢野問題を解決しようということで動き、原田会長、八尋頼雄副会長（弁護士）も最終的に同意し、奇蹟の和解となったんです」（同）
表向きは、学会と矢野氏との間で争っていた訴訟案件が４つ（地裁３件、高裁１件）あったところ、内、高裁の方の加藤新太郎裁判長から和解勧告があり、これを関係当事者が受け入れた結果となっているが、実際は、以上のように、水面下で仙谷氏が仕掛けた結果というわけだ。
それを裏づけるように、最近は仙谷氏の元に、頻繁に白浜一良公明党参議院議員会長（横写真）が通っているとの情報も本紙の元には届いている。
ポスト順でいえば、谷川氏より正木氏の方が上だが、「正論を吐く谷川氏の方には人望がある。それに事務総長というポストは人事権を握っており、谷川氏の方がかなり優勢」（学会関係者）とのことで、このまま行けばこの５月には谷川会長が誕生するというのだが……。

＊　なお、昨年 12 月、上記・竹岡氏は結婚したが、その披露宴には谷川・佐藤副会長、白浜参議院議員会長の他、仙谷氏の代理の経済人、また野中広務元自民党幹事長も出席していた。

創価学会と"仏敵"矢野絢也元公明党委員長が歴史的手打ち

お蔵入りした「暴力団」本の中身

『ポスト池田』レースにも影響!?

創価学会の機関紙「聖教新聞」2月21日付の紙面の片隅に、小さなベタ記事が載った。見出しは「矢野氏との裁判終了」だ。

この記事によれば、矢野絢也氏と創価学会や学会幹部らの間で争われてきた訴訟について、

〈裁判長より、矢野氏と創価学会が争いを継続することは、両者の関係、その社会的立場から見て好ましいことではない、と勧告があり、これを関係当事者は受け容れ、2月10日、裁判は終了した〉

と記述されている。あっさりとした「締めくくり」を装ってはいるが、両者間で繰り広げられた「闘争」を知る人にとっては、これが"歴史的な手打ち"であることは論をまたない。

京大在学中に学会へ入会した矢野氏は、大林組から大阪府議を経て34歳で衆議院議員に初当選した。20年にわたって党書記長を務め、党委員長や常任顧問も歴任。1993年に政界引退し、政治評論家に転身した。

学会との対立は、矢野氏が月刊誌に寄せた手記に端を発する。(学会と公明党は政教一致といわれても仕方がない部分があった)との言及に学会側が敏感に反応。2005年春以降、幹部らが矢野氏に謝罪や撤回を迫り、自宅を訪れた元同会議員らが矢野氏の慎太郎であった手帳を差し出させるに至った。

その経緯を矢野氏が週刊現代や週刊新潮で暴露し、元同会議員らが名誉毀損に当たるとして提訴。矢野氏もまた手帳返還などを求めて応訴した。学会や学会幹部らも矢野氏と提訴し合い、両者の争いは泥沼の訴訟合戦へと発展していった。

マスコミ関係者がこう振り返る。

「矢野さんは一時、尾行や威圧行為でトーンダウンしたが、弁護団が結成され、学会の内幕を描いた『暴露本』が売れるうちに勢いがつき、聖教新聞の『口撃』でさらに対抗心が燃えてしまったようです」

「あ、あ、うぅ」と電話ガチャ切り

確かに、学会幹部らによる揺りようは凄まじかった。聖教新聞での座談会では、名前は明示されないものの、〈家族を捨てて、家族で引きこもったまんまの畜生!〉(06年8月30日付)

〈昔が「卑しいやつ」「ゲス野郎、ゲス野郎」と後ろ指をさしてゲラゲラ笑っている〉(05年11月14日付)

〈貧れなやつだ。かわいそうに、一生涯、家族や子孫までもが笑いものだ〉(同前)

といった強烈な言葉が飛び交った。学会にとって矢野氏は「仏敵」だったのだ。

対する矢野氏は、学会との"闘争史"を手記として講談社から出版した。これがまた新たな訴訟を生んだ。

これほどまでに激しくケンカしてきた両者が、なぜ和解に至ったのか。

その起爆剤は、矢野氏が昨年10月に出版した『国税経理 創価学会vs国税庁の暗闘ドキュメント』だった、との見方がある。

この本では、学会が国税庁の税務調査をどうしのいだかが描かれているが、矢野氏のあとがきには、こう記されていた。

〈この暴挙に私の怒りも限度を超えた。(略)私は学会・公明党の裏面史とも言える手帖を順次公開し、学会・公明党の実態を世に問うことにした。その第一弾が本書である〉

つまり、第2弾の『暴露本』を続けて出版する計画があると宣言したわけだ。

学会関係者が振り返る。

「第2弾がどれだけ書き進められていたかはわからないが、学会と暴力団との関係をテーマに、構成も決まっていたと聞いていた。学会の歴史を考えれば、元後藤組組長との関係が中心だったのではないか」

08年秋に解散した山口組の2次団体・後藤組を率いた元組長の後藤忠政氏は、10年5月に自叙伝『極道』を出版している。「創価学会との攻防」と題した章の中には、後藤組が学会のトラブル処理などを引き受けてきたなどと記されている。

こうしたかかわりについて矢野氏の視点から描くとすれば、実にセンセーショナルだが、この本を読むことはできそうにない。

出版関係者によると、今回の和解条件として、矢野氏の既刊本を増刷しないことと、矢野氏が学会の名誉を毀損する新刊本を出さないことが盛り込まれたという。その結果、『乱脈経理』で予告された第2弾は"お蔵入り"となったようだ。

学会としては、『暴露本』の乱発を防ぐという実を得た格好だが、電撃的な和解の背景には、学会の人事をめぐる「権謀」を感じる、との指摘もある。

長年の学会ウオッチャーがこう解説する。

「和解と聞いて思ったのは、もう池田大作名誉会長の意思が会の決定に反映されなくなったのではないか、ということ。池田さんは学会の最高権力者だが、84歳で重病説がたびたび流れている。学会にとっての最大の課題は、ポスト池田時代を誰がどう担うかです。その有力候補は、実質ナンバー3の谷川佳樹学会副会長(56)。ナンバー2の正木正明理事長(57)を飛び越えて若返りを進め、新しい指導者による長期政権を構立する構想があるようなのです」

谷川氏は東京大学経済学部を卒業し、三菱商事勤務を経て、82年に学会本部職員となった。全国男子部長や全国青年部長を歴任し、07年10月から事務総長の責任者である事務総長の任に就いている。

「谷川さんは05年当時は青年部の幹部として矢野氏に謗罪等を迫った一人で、裁判の原告や被告にも含まれていた。谷川さんを指すグループにとっては、矢野氏との訴訟は目の上のたんこぶで、『くだらないケンカを続けている場合じゃない』との思いもある。訴訟が終結したことで、体制移行の準備が万事整った、と言えるでしょう」(同前)

真相を問うと、矢野氏の事務所に電話すると、

「はい、どうも~」

と、矢野氏らしき男性が出たが、こちらが週刊朝日の記者だと名乗った瞬間、

「あ、あ、うぅ」

と唸って電話をガチャッと切った。再度、電話すると、妻らしき女性が、

「取材はすべてお断りしています。そういうことで」

と言って電話を切った。

他方、創価学会広報室は、和解の経緯については、

〈聖教新聞で報道の通り〉

とコメント。次期会長擁立に向けた動きは、

〈ございません〉

と否定し、池田名誉会長が最後に公の場に姿を現したのは〈一昨年5月の本部幹部会〉だとしながらも、近況をこう説明する。

〈最近も大変にお元気で、さまざまな連載の執筆や各地の会員を激励されています〉

「仏敵」との手打ちという異例の決断を下した創価学会は、これからどこへ向かうのか。 本誌・藤田知也

矢野氏(左上)との"手打ち"は池田氏の耳にも伝わっているだろうか。円内は聖教新聞の座談会に参加する谷川氏

北島康介を育てたコーチ直伝
バケる人に育てる 勝負できる人材をつくる50の法則 平井伯昌 好評発売中!! 定価1470円 日刊スポーツ出版社

No. 17

矢野絢也　年表

1932年4月27日生まれ（現在80歳）　出生地・大阪府八尾市
1951年3月　大阪府立山本高等学校を卒業。
1953年　創価学会に入会。当時、京都大学経済学部3回生だった。
1955年3月　京都大学を卒業。4月 大林組に入社。
1963年4月　大阪府議会議員に当選。
1967年1月　34歳で衆議院議員に初当選。直後の臨時党大会で公明党書記長に就任。
1970年　言論問題利用し、竹入らと公明党の学会（CP支配）からの独立を画策
1977年～79年　宗門問題に乗じて、藤原行正、AK、内藤国夫らとCP打倒を画策。
1986年12月　公明党委員長に就任。
1988年12月　明電工事件発覚。
1989年5月　公明党委員長を辞任。公明党最高顧問に就任。
1993年6月　政界を引退。以降は政治評論家に転身。「闇の流れ」「黒い手帖」等の連載・出版行う。
2005年4月　CPが杉山青、弓谷男を呼び、「最後の最大の敵である矢野をやる」と宣言し細々指示。
2005年5月14日　欧州から急きょ帰国し戸田国際に直行した矢野を谷川、弓谷らがつるし上げる。
2005年5月　創価学会から激しい非難を浴び、矢野は謝罪し、評論・執筆活動を自粛。夕刊紙に連載していたコラムも中止に。公明党OB3人に手帳を渡す。
2005年7月　弓谷男子部長解任事件（20日の全体会議で）
2005年7月　25日発売週刊現代「学会&公明党のタブー―矢野極秘メモ100冊が待ち去られた！」
2005年7月　公明党議員OB3人が、『週刊現代』記事で矢野と講談社らを提訴。
2005年8月　1日発売週刊現代「提訴は笑止、矢野氏が『手帖強奪』の真相激白」
2005年8月　公明党議員OB3人が、1日発売の『週刊現代』記事で矢野と講談社らを再提訴。
2005年11月　矢野が、手帳の返還と慰謝料を求め、公明党議員OB3人を提訴。
2007年12月　手帳裁判の一審判決。学会側全面勝利。学会側の主張を認め、総額660万円の損害賠償金の支払いと謝罪広告の掲載を命じ、手帳返還請求を棄却する判決を言い渡した。
2008年5月1日　創価学会を退会。
2008年5月12日　矢野が「評論家としての活動をやめるよう強要された」などとして学会と学会幹部を相手取り、5500万円の慰謝料を求める民事訴訟を起こした①。
2008年5月15日　週刊新潮「矢野絢也を窮鼠にした『創価学会』の脅迫と誹謗中傷」
2008年5月20日　谷川佳樹は、『週刊新潮』の矢野に関する記事で名誉を棄損されたとして、矢野や新潮社らに1100万円の損害賠償と謝罪広告の掲載を求めて提訴②。
2009年3月　手帳裁判の二審判決。学会側逆転敗訴。矢野側の主張を全面的に認め、持ち去った手帳の返却と合わせて300万円の支払いを命令。学会側による音声データの改竄を認定。
2009年6月　公明党議員OB3人が「二重権力・闇の流れ」「黒い手帖」に記載された虚偽の記述で名誉を毀損されたとして、講談社と矢野らを相手に6600万円の損害賠償と謝罪広告の掲載等を求めて提訴③。また「新潮45」2009年6月号の記事についても同様に名誉毀損にあたるとして3300万円の損害賠償等を求めて提訴した④。別件裁判でのICレコーダーの音声データ改竄認定の汚名返上を狙う。
2009年9月　最高裁が二審判決を支持、上告を受理しない決定を下し、学会側の敗訴が確定。
2010年6月　CPが脳梗塞で倒れる。
2011年1月　東京地裁が谷川勝訴の一審判決。矢野・週刊新潮・早瀬編集長に33万円の賠償金の支払いを命じたが、その一方で、**谷川が矢野を脅迫した事実は認定された。**
2011年4月　谷川矢野裁判、二審の裁判長が信平裁判担当した人物に交代。和解勧告の流れへ。
2011年10月　20日発売　週刊文春「池田名誉会長『厳戒病室』本当の病状」
2011年10月　21日発刊　矢野の暴露本第一弾「乱脈経理―創価学会VS.国税庁の暗闘ドキュメント」
2011年12月　週刊文春「読者より」投稿欄の中に「編集長から」（こんな小さなベタ記事で手打ち）
2011年12月　竹岡光城の結婚式（和解の舞台裏の面々勢揃い）
2012年2月　双方が裁判所の勧告を受け入れ、①～④の4件すべての訴訟を取り下げた。
2012年2月　アクセスジャーナルが矢野と学会との和解をスクープ。
2012年2月　週刊朝日3月9日号「（矢野・学会和解の陰で）お蔵入りした『暴力団』本の中身」
2012年3月　FACTA4月号「（矢野との和解で）創価学会次期会長に谷川事務総長が確定」
2012年7月　週刊実話7月19日号でFACTAの記事を「山田直樹」の名前で蒸し返す。
2012年9月　創大祭で九期生大会メッセージ、M木発言

資料⑪「御本尊の教義変更と会憲制定」画作事件 Ⓐ

2013/9/28

大御本尊問題の経過について

【1】

いわゆる「本門戒壇の大御本尊」と、総本部に安置される「創価学会常住御本尊」について、最高幹部の一部が、教義的な意義の変更を強硬に推し進めています。御本尊は、根本尊敬の対象であるゆえに、御本尊に関する教義は信仰の根幹をなしています。

現在、一部幹部が進めているような形で教義変更が拙速かつ拙劣に進められれば、日本でも海外でも会員の信仰が動揺し、組織に混乱が広がることは確実です。また、宗門からの攻撃にも十分な応戦ができず、学会が教義論争において敗北することは必至と考えられます。学会の存亡に関わる極めて危機的な状況にあります。

【2】

「学会常住御本尊」の意義づけについては、総本部の慶祝委員会のもと、専門の小委員会が、この９月に入って急遽、発足しました。出席者は、谷川事務総長、金沢組織総局長、秋谷議長、八尋弁護士、森田康夫氏。そこに教学部から遠藤総合教学部長、森中教学部長と宮地が加わりました。御本尊という最重要の課題にもかかわらず、総本部完成の２カ月前とスタートが余りに遅く、発足当初より、準備不足の感が否めませんでした。

それでも初めのうちは、議論を深めていくような雰囲気がありました。教学部側でも、忌憚なく意見を述べさせていただきました。

しかし、回を重ねるうちに、この小委員会の開催趣旨が、既に内々で決定した方針を教学部に承認させ、その方針に即した説明文を作成させるところにあることが露わになってきました。

【3】

教学部では、「戒壇の大御本尊」「創価学会常住御本尊」の意義づけについては、以前から研究を進めていました。この７月９日には、原田会長あてに「創価学会常住御本尊と広宣流布の使命」というリポートを提出しています。

その骨子は以下の通りです。

①御本尊の本質は「一念三千即自受用身」すなわち「南無妙法蓮華経即日蓮大聖人」という人法一箇の法体の顕示にある。

②「戒壇の大御本尊」も、法主によって書写された御本尊（以下、書写本尊）も、同一の法体が顕示されており、そうした本質次元では共通している。

③御本尊が御本尊として成立するためには、上記のように人法一箇の法体が正しく顕示されていることを第一の要件としつつ、「信心の本尊」であるゆえに、どこまでも正しい信心で拝するという第二の要件が不可欠である。

④「戒壇の大御本尊」における戒壇・本尊の意義も正しい信心が介在しなければ成立しない。また「一閻浮提総与」という意義も、広宣流布があって初めて成就するものである。

⑤「創価学会常住御本尊」は、戸田先生が「大折伏大願成就の大御本尊」として当時の日昇法主に申請されたものであり、戸田先生は、この御本尊を拝して 75 万世帯の願業を成就された。また池田先生もまた、この御本尊を拝して世界広宣流布を進めてこられた。その意味で、創価三代の師弟の誓願の結晶ともいうべき御本尊であり、当時の和合僧団の化儀に則り、法主の書写という形を取ったが、日蓮大聖人からの直授と拝するべきである。

「戒壇の大御本尊」が本体、他の御本尊は分身であるという論理から、あくまで「南無妙法蓮華経即日蓮大聖人」という人法一箇の法体の顕示が本質であるという、日寛上人が本来意図していた本尊義に引き戻すところに、このリポートの主たる目的がありました。

【４】

しかし、教学部としては、こうした教義の理解を徹底するには、主に以下の理由から、時間をかけて慎重に進めなければならないと考えていました。

①学会は、教義的に宗門の伝統を受け継ぎ、いわゆる「大御本尊」を「本門戒壇の大御本尊」「出世の本懐」「一閻浮提総与」といった最重要の御本尊として位置づけてきた。会員にも、何十年にもわたって、そうした方向で教育を徹底してきた経緯がある。

②学会の採用している御本尊も、すべて法主による「大御本尊」の書写である。「創価学会常住御本尊」、関西の「大法興隆所願成就」は第 64 世日昇書写。本部の「賞本門事戒壇正本堂建立」の御本尊は第 66 世日達書写。全世界のほとんどの会員は、第 26 世日寛上人書写の御形木本尊を受持している。信仰の実態において学会は、「大御本尊」あるいは法主書写の御本尊以外は、大聖人の他の真筆本尊をふくめ、大石寺門流以外に伝わ

るいかなる本尊も本尊として容認してきていない。
③宗門を批判する際、日顕の大御本尊否定発言や、大御本尊が「正本尊」として安置されている「正本堂」の破壊を論点としてきた。
とにかく、学会員が確信をもって日々の信仰実践に励めること、すなわち学会員の安心と幸福が最優先されるべきであり、総本部も御本尊も教学も、全てそのために存在するというのが教学部の真情でした。

【5】
ところが、こうした教学部側の思いは、全く受け入れられませんでした。
小委員会の結論は、次のような方向で確定していたのです。
①「戒壇の大御本尊」は、もはや謗法の宗門の本尊であり、功力もなく、学会とは何の関わりもない。その意味を否定しておかなければならない。
②総本部こそ世界広布の根本・中心であり、そこに安置される「創価学会常住御本尊」こそが「戒壇の大御本尊」に変わる新たな「大御本尊」である。
③こうした内容を、先生のご存命のうちに、先生のご意志として発表する。まさに、総本部完成の今こそ断行すべき時である。
教学部のリポート「創価学会常住御本尊と広宣流布の使命」が今言える限界のラインであると訴えても、それでは不徹底であり、全く駄目だと一蹴されました。

【6】
しかし、無理筋の結論を導こうとしても、無理なものは無理なので、小委員会の論議は紛糾を極めました。
教学部以外の5人は、論理としては完全に破綻していました。率直に申せば、素人談義の域を出ず、これが学会の最高首脳の教義理解かと別の意味で衝撃を受けました。
例えば、秋谷議長は「弘安二年の御本尊については、南無妙法蓮華経の法体を文字曼荼羅に図顕された御本尊であるが、唯一絶対の御本尊と大聖人が定められた証拠はない。日寛上人より『究竟中の究竟』等宗派の確立のために確定されたとも推定される」「弘安二年の御本尊も何の徳用も働かない。……他宗の身延派や、中山系、京都系が保持している真筆の御本尊と同じ事になる」と主張していました。
そう主張したい気持ちは理解できますが、それでは、相伝書、相承書、日興跡条々事などを盾に宗門から攻撃されたら、どう答えるのか、また逆に、「弘安二年の御本尊」を全く認めてこなかった身延派から攻撃された

ら、どう答えるのか。「大御本尊」に関する戸田先生や池田先生の発言、また教学的な主張との整合性は、どう付けるのか。不用意に教義を変更すれば、学会は四方八方から矛盾を突かれて、大混乱に陥りかねません。

宗門は、「大御本尊」について何百年にもわたる論争の蓄積があります。特に近年は、正信会との激しい論争を経験しているので、この論題について、学会が戦うのであれば、それ相応の準備が不可欠であることを訴えましたが。そうした経緯についても、ほとんど認識を持っていない様子でした。

【7】

また、聖人御難事の「余は二十七年なり」という大聖人の「出世の本懐」の表明についても、谷川総長は「『出世の本懐』の意味だって変えればいいんだ。独立した教団なんだから、変えてもいいんだし、変えられるんだ。南無妙法蓮華経の御本尊を顕したことにすればいいんじゃないか」と述べていました。もちろん御書の解釈を変更することはできるにしても、御本仏の「出世の本懐」について生半可な教義理解で軽々しく決められることではありません。

さらに、「末法下種の三宝」についても、現在は、公式には仏宝が日蓮大聖人、法宝が三大秘法の大御本尊、僧宝が日興上人になっているのを変更するのかという論議になった際、谷川総長は、「それも変えればいいんだ。何の問題ない」と述べていました。しかし、「それでは、歴代法主が僧宝であるという宗門に対して、僧宝は日興上人であると反論した学会の論拠が崩れてしまう」と申し上げると、「それでもいいんだ。宗門とは別の教団なんだから」という返事でした。「過去との整合性などどうでもいい。自語相違と批判されてもかまわない。完全に独立した教団として出発するんだから。結論は決まっているんだ。教義なんて、それを後付けすればいいんだ」と、谷川総長は何度も繰り返していました。

何でも自分たちで決められるという全能感がにじみ出ていて、何を言っても取り付く島がありません。支離滅裂な不毛な会議となりました。

【8】

口では勇ましく「宗門と最終決着をつける」と言っていましたが、それを断行しようという覚悟や責任感や能力があるとは到底思えませんでした。

また何より悲しかったのは、教学部以外の５人の方々の言葉に、会員の苦悩に対する慈愛が一かけらも感じられなかったことです。八尋弁護士や

金沢総局長は「変更しても、ほとんどの会員は付いてこれるでしょう。大体は大丈夫でしょう」と言っていました。一人残らず幸福にする、絶対に退転させないというのが、池田先生の御心ではないでしょうか。八尋弁護士については、ある人に「多少の退転はやむを得ない。9割は付いてこれる」という趣旨の発言していたとも聞き及んでおります。1000 万会員の1割と言えば100万人。100万人の同志を退転させ、地獄に堕とすというのでしょうか。

【9】

また小委員会で、秋谷議長は、師範会議に、婦人部の秋山さん・八矢さんが入っていることを、しきりに気にしていました。異議を申し立てそうなメンバーを変えるよう指示を出していました。当初から皆の合議で決定するというつもりはなかったのです。

【10】

御本尊の問題は、いつか完全に決着をつけねばなりませんが、それをやるには1ミリの狂いもないような論理構成を考えねばなりません。本部の方針が1ミリでも狂えば、現場では10メートル、100メートルの狂いとなって大混乱を引き起こしてしまいます。

「教学部は黙って従え」と言わんばかり会議が何度も続き、進退窮まって、教学部として9月19日の夜、原田会長に直にご指導を受けることにしました。

夜9時半過ぎに遠藤・森中・宮地の3人で会長のところに伺いました。この数日前にも会長のご指導を頂く機会があり、その折にも「教学部の皆さんの思いは、よく理解しました」とのことでしたので、率直に、紛糾する会議の実情をご報告しました。会長の話は、以下のように、全く予想に反するものでした。

①小委員会の方針は、全て先生のご指導を受けて進めていることである。きょうも、その点について先生のご指導を受けてきた。

②宗門問題で、大御本尊を巡る問題がまだ残っている。今こそ大御本尊とも決別する。大御本尊は、学会とは全く関係ない存在だ。

③学会常住御本尊が、新しい大御本尊という意義づけをするんだ。
それを総本部完成の新たな体制の出発する今、やるしかないんだ。

④全て先生のご意志だ。教学部は戦う覚悟がない。腹を決めなさい。

大変に厳しい叱責であり、教学部としては、先生のご意志ということですので、「分かりました。やらせていただきます」とお答えしまた。

【11】

会長からご指導を頂いた後、念のため、先生のご指導の細かなニュアンスを大山・第一庶務室長に確認しました。大山室長は、とても驚いた様子で、「先生は全くそのようなことを言われていない。学会が損をしたり、学会員が苦しんだりしないようにということで、先生は一貫されている。今までやってきたことが間違っているとならないようにというのが、教学に関する変わらぬご指導だ。慌てて事を進めるなどいうことは、一切言われていない。原田会長も先生の前では、『いろいろな意見がありますので、慎重の上に慎重に進めます』と言っていた。こんなやり方をしては、学会の信心も教学も崩れてしまうじゃないか」とのことでした。

会長が先生にご説明したのは、①宗門は700年、護持の名に隠れ、広宣流布を進めてこなかった、②だから、大御本尊を持っていても、功力は出ない、③大御本尊が一切の電源で、書写本尊が端子というような関係ではない、④学会常住の御本尊を根本に広宣流布を進めていく、という範囲だったようです。「先生のご意向のもと、大御本尊との決別を今この時に宣言する」という、先生のご指導は、全くの作り話だったのです。

その翌日、会長が先生にご指導を受けた際に同席されていた長谷川本部長にも確認しましたが、大山室長と全く同じ見解でした。

【12】

20日朝8時半から小委員会が行われ、そこでも議論が紛糾。教学部で、他の5人を事実上、論破する結末となりました。しかし、谷川総長は、こちらで用意した大御本尊を巡る教義的説明が気に入らなかったようで、会長が発表する趣旨説明文から、そうした箇所は全て削除することになりました。

20日午後3時から、執行部、ＳＧＩの首脳、教学部などが出席する会議が開かれ、出席者から、教義の根本を拙速に変えることについて、強い懸念が表明されて、実質的に、会長の方針が否決される形となりました。

【13】

にもかかわらず、既定の方針は、撤回されず、独断専行の状態が続いています。

教学部は、その後は、一切、意見を求められないようになりました。小委員会も開かれてはいません。学会教学の最重要課題であるにもかかわらず、教学部を完全に排除するという異常事態が続いています。会員の疑問

には、誰が答えるのでしょう。宗門と論争が起きたら、誰が戦うのでしょう。

【14】

9月25日には、ＳＧＩ主要国の中心者を招集した会議が開かれましたが、そこでも原田会長は、既に否定された方針を繰り返しています。各国の理事長たちに感想を伺いましたが、多くは、余りに拙速な発表に困惑していました。

論理性を重んじる欧米の首脳は、教義の根幹で論理的整合性が付かなくなることを心配し、各国に戻っても説明のしようがないと苦悩されていました。

大御本尊の問題は、日本の創価学会の下に各国ＳＧＩを位置づけるＳＧＩの新たな機構・規定とセットで発表されました。この点については、日本の侵略を受けたアジアの国々の首脳が、強い違和感をあらわにしていました。このまま独断専行が続くと、池田先生の作られてきた学会の信心、ＳＧＩの組織が大混乱に陥ります。未来永遠に大きな禍根が残ります。

大御本尊に関する見解の発表は、事実上、宗門に対する宣戦布告となります。大慶祝の時に、なぜ混乱と論争の火だねを蒔くのでしょう。勝つためには、それ相応の準備が不可欠ですが、なぜ何の準備もしないまま、負け戦に突入していくのでしょう。

池田先生が全世界の会員同志のために贈ってくださる総本部の完成を前に、このような事態が起こり、本当に先生に申し訳ない気持ちで一杯です。とともに「仏法に相違して己義を構えば之を用う可からざる事」という覚悟を決めております。

Ⓑ

2013/10/13

総本部の御本尊と日蓮世界宗創価学会会憲の問題点

1　御本尊の教義変更と会憲制定の計画

①いわゆる「戒壇の大御本尊」から完全に決別し、総本部に安置される「学会常住御本尊」をもって創価学会の新しい「大御本尊」とする、教義上の大転換の計画が進んでおります。その大転換が、総本部完成という今の時に合わせ、「池田先生の強い意向」として発表されるのです。総本部である「広宣流布大誓堂」に設置される池田先生の碑文にも、「学会常住御本尊」が「大御本尊」であると明記されています。

②さらに、総本部の完成とともに世界宗教としての体制も完成させるという構想のもと、全世界の創価学会の憲法である「日蓮世界宗創価学会会憲（世界創価学会会憲）」が制定される運びとなります。「会憲」には、「学会常住御本尊」を根本の大本尊、「広宣流布大誓堂」を根本道場とする旨が謳われています。また、世界創価学会会長には日本創価学会会長が就任するという規定が明文化され、日本創価学会会長が、教義・人事・財政・活動方針の全てにおいて世界をコントロールする体制が打ち立てられることになります。

2　計画が孕む問題性

この一連の計画を主導しているのは、秋谷議長、原田会長、谷川事務総長、八尋弁護士の４人です。

計画は、世界宗教としての体制の完成という大義名分とは裏腹に、世界宗教としての体制を崩壊させる危険性をはらんでいます。日本の最高幹部からも、教学部からも、各方面長たちからも、また世界各国の理事長たちからも、「信仰の根本の問題なのだから、もっと皆の意見を聞いて、もっと時間をかけて、慎重に進めるべきだ」と心配の声が上がっています。

にもかかわらず、秋谷、原田、谷川、八尋の４人は、「池田先生の強い意向」と「教義の裁定権は会長にあるという会則」を盾に、独断専行に近い状態で強行突破を企てています。

このまま計画が実現すれば、

①国内外の会員の信仰が根本から動揺し、組織も混乱し、日本と各国のＳＧＩとの関係も悪化し、結果として創価学会は衰退を余儀なくされます。

②また、全てが「池田先生の強い意向」として行われるため、池田先生の歴史と業績が致命的に汚され、一切の混乱の責めが池田先生一人に集中することは確実です。

3　問題の経過

①一連の計画は、秋谷、八尋を中心に、２、３年前から秘密裏に進められてきたようですが、詳細は不明です。

②本年春には、ＳＧＩ各国の首脳を集めて、「会憲」の概要が説明されています。

③御本尊の教義については、総本部の慶祝委員会（谷川委員長）のもと、９月に専門委員会が発足しました。メンバーは、秋谷、谷川、八尋、金沢、森田康夫に、教学部から、遠藤、森中、宮地が加わりました。

専門委員会は、御本尊の意義について議論を深めるというのは見せかけで、内々で既に決まっている方針を教学部に承認させ、その方針に沿った説明文を作らせるための場に過ぎませんでした。

教学部側は、いわゆる「戒壇の大御本尊」を巡る論議については、ある時期に決着をつけなければならないのは確かだが、学会が過去何十年にも渡って尊重してきた経緯があるので、教義の根幹が混乱したり、会員の信仰が動揺したりしないよう、慎重の上にも慎重を期すべきだと訴えました。

しかし、こうした訴えは、にべもなく撥ねのけられ、「付いてこられない会員が多少いてもやむを得ない。池田先生のいらっしゃる今やるしかないんだ」と、規定の方針を受け入れるよう強要されました。

③教学部が原田会長に窮状を訴えたところ、原田会長からは「全ては池田先生に御指導を頂きながら進めていることだ」と逆に叱責を受け、秋谷議長らの考えに従うよう指導されました。

その後、教学部として長谷川本部長と大山第一庶務室長に確認したところ、「全ては池田先生に御指導を頂きながら進めている」という原田会長の発言が事実と全く隔たっていることが判明しました。

その後も専門委員会が開かれるたびに、秋谷、谷川の方針に従うよう強要を受けましたが、教学部は「池田先生を苦しませたり、会員を悩ませたりするこ

とはできない」と自らの主張を譲りませんでした。

④9月20日には、日本の執行部、ＳＧＩの首脳、教学部などによる会議が開かれました。そこでも、原田会長の方針に多くの出席者から強い懸念が示され、原田会長は、事実上、その方針を撤回せざるを得なくなりました。

ところが、9月25日に世界の主要国の中心者を招集した会議で、原田会長は、一度撤回した方針を再度打ち出しました。さらに、日本創価学会会長が世界創価学会をコントロールすることを明文化した会憲を発表し、11月の来日の際に賛同の署名をするよう求めたのです。

こうした説明も、全て池田先生の強い意向であるかのような雰囲気で行われているため、各国の中心者たちも、ほとんど異議を唱えることはできませんでした。それでも、「創価学会は日本宗教である」として弾圧を受けてきた台湾の林釗理事長から、日本中心の考えが明文化されていることに率直な不安が表明されました。

各国の中心者たちは、日本の幹部の前では遠慮していても、「このようなことは、国に帰って説明できない」と一様に困惑し、苦悩していました。

⑤その後は、教学部が主張を全く曲げないため、４人の推進派は大幅に後退を余儀なくされ、10月３日の中央会議で、原田会長は再度方針を撤回する形となりました。それでも、方面長たちから、会長の説明に疑問が出され、答えられなくなった原田会長は、しばしば立ち往生する有様でした。

⑥にもかかわらず、中央会議の翌日、教学部に対して、既定の方針を貫くという原田会長の指示が谷川総長経由で伝えられました。10月末に再度、中央会議の意義を込めた方面長協議会を開き、師範会議、総務会、最高指導会議、各国ＳＧＩ首脳会議を通して、11月８日に全世界に向けて発表する算段のようです。

⑦しかし、会憲の条文の不備も次々と明らかになり、当初の計画はほとんど破綻状態です。それでも、秋谷議長、原田会長の意志は変わらず、事態は混迷の一途を辿っております。

4　計画がもたらす影響

以下、御本尊に関する教義変更、および会憲が実現した場合の問題点と影響を列挙しますが、何より重大なのは、池田先生に御迷惑が掛かることと、国内外の会員が苦しむこと、この２点です。

４－１　御本尊の教義変更がもたらす影響

①まず教義変更についてですが、総本部に安置される「学会常住御本尊」は日昇法主による「戒壇の大御本尊」の書写、国内外の会員が日夜拝している御形木御本尊は日寛上人による「戒壇の大御本尊」の書写です。本質次元においては、「戒壇の大御本尊」も、書写された御本尊も、南無妙法蓮華経という同じ法体が顕現したものであり、同質・平等と言えます。

しかし、書写された御本尊には、「之を書写し奉る」と明記されており、「戒壇の大御本尊」を必要以上に否定すれば、書写された御本尊自体の存在根拠が不安定化しかねません。会員が日夜拝している御本尊の根拠が揺らげば、会員の信仰が動揺してしまいます。

大聖人の「出世の本懐」についても、専門委員会の場で谷川総長は「『出世の本懐』の意味だって変えればいいんだ。独立した教団なんだから、変えてもいいんだし、変えられるんだ。南無妙法蓮華経の御本尊を顕したことにすればいいんじゃないか」等と発言しています。

教義は、一度変えたら後戻りはできません。変えるなら、完全な実証と理論の裏付けがなければなりません。失敗すれば、万代に禍根を残します。

しかし現時点で、十分な教学的準備はなされてはいません。

②続いて、合議の体制の崩壊の可能性についてです。全学会にとって最重要の課題でありながら、正常な意思決定の手続きが全く踏まれていません。推進派は、他の執行部に対し話し合いを拒絶し、独断専行で事を進めています。また、「全て池田先生の強い意向である」と説明する一方で、池田先生に対して当然するべき御報告を全くしていません。結果として、池田先生を利用して、自分たちの方針を押し通そうする形になっているのです。

一度、こうした意思決定が行われれば、合議の体制が崩壊してしまいます。

③さらに、会員の御本尊に対する信仰の動揺についてです。御本尊は、文字通り「根本尊敬の対象」であるゆえ、御本尊の教義が揺らげば、会員の信仰の土台が揺らぎます。「今まで信じていたものは間違っていた。やってきたことに

も意味がなかった」と、疑問を引き起こすことも必至です。

会員の教義理解の度合いも様々なレベルがありますので、必ずしも全ての会員が教義の変更を受け入れられるとは限りません。その結果、御本尊を巡る不毛な論争が沸き起こり、組織は分断され、場合によっては分派も起きかねません。「黄金の３年間」が「争乱の３年間」になってしまいます。

八尋弁護士は、周囲の人に「多少の退転はやむを得ない。９割は付いてこれる」という趣旨の発言もしています。谷川総長も「多少、血が流れるのはやむを得ない」と明言しています。

しかし、会員に無理なく理解させていくための準備は全くなされていません。

④最後に宗門からの攻撃についてです。教義の拙速な変更は、学会攻撃の格好の口実を宗門に与えてしまいます。教学部が懸念しているように、ある程度の道筋が見えているとはいえ、完全完璧な実証と理論の裏付けがあるとは言えない実情があります。

学会は、これまで、日顕の「戒壇の大御本尊」否定発言や正本堂破壊を大謗法として破折してきました。そうした論拠も自ら崩してしまうことになります。第一線の会員は、坊主や法華講などから、ここぞとばかり攻撃されると予想されます。

宗門事件それ自体が、「日蓮大聖人の法門を厳格に護る学会を、堕落・逸脱した宗門が破門した」という図式ではなく、「教義を変えた学会が、教義を護る宗門から破門された」という図式に変わってしまう可能性さえあります。

４－２　会憲制定がもたらす影響

①会憲には、上記の御本尊に関する教義変更が明記されています。「学会常住御本尊」を根本の大本尊、「広宣流布大聖堂」を根本道場と位置づけているのです。

②会憲には、それ以外にも多くの問題を孕んでいます。例えば、「会長」の条文には「（世界創価学会）会長は、日本『創価学会』の会長が就任する」とあります。

日本に圧倒的な経験の蓄積があるので、日本主導で世界広宣流布を推進することは、実際上のＳＧＩの組織運営としては何ら問題はありません。海外組織の中心者たちも、それで十分に納得しています。

ただ、難しいのは、それが「明文化」された場合です。

例えば、日本の副会長に女性は１人もいませんが、会則には「女性を副会長にしない」とは定められていません。女子職員は結婚すれば退職することにな

っていますが、雇用契約には「結婚したら辞める」とは定められていません。これらは、明文化されない「不文律」であり、「慣行」であり、「実際上の判断」です。もし、これを「明文化」すれば、「男女差別」の団体として社会的な糾弾の対象になってしまいます。

「日蓮世界宗」は「世界宗教」なので、その「世界性」「普遍性」「平等性」が問われます。この条文を読んだ海外の宗教学・仏教学の研究者から、「世界の会長を日本の会長が務めるという条文は、なぜあるのか。仏教の平等の精神に悖るのではないか」と疑問が呈された場合、全く答えようがありません。

日本の侵略戦争の犠牲になった国々から、日本優越主義と受け止められることも懸念されます。特に、韓国や台湾では、「日本の宗教である」ことが弾圧の理由になっています。日韓関係、日中関係も悪化の一途を辿っておりますので、更に事態が悪化した場合、再び弾圧や迫害が起きないとも限りません。

③会憲には、日本創価学会会長（＝世界創価学会会長）の権力を制限する規定は一つも定められていません。

池田先生がいらっしゃる限り、それでも何の問題もありません。今の「創価学会会則」でも、日本の会長の権力を制限したり、会長を罷免したりする規定はありませんが、池田先生が上から厳しく指導されているので、実質的に権力が制限されているのと同じ状態です。

しかし、遠い将来を考えれば、全世界の教義・人事・財政・活動方針といった重要事項について一人の人間が全権を握れる体制は極めて危険と考えられます。700年前の「日興遺誡置文」にさえ「時の貫首為りと雖も仏法に相違して己義を構えば之を用う可からざる事」「衆議為りと雖も仏法に相違有らば貫首之を摧く可き事」と、「貫首」と「大衆」の双方の権力を抑制する規定が存在しています。

各国ＳＧＩの中心者たちは、会憲の反民主的な内実に不安と恐怖を露わにしていました。

5　池田先生に攻撃が向かう可能性

①上記の全ては「池田先生の強い意向」として世界に発表されます。教義の不安定化も、会員の信仰の動揺も、組織の混乱も、全て池田先生お一人が責任を負う形となり、池田先生が集中攻撃を受ける構図となっているのです。

②池田先生の歴史と業績が否定されかねません。初代、第２代の教えを忠実に継承したことも、小樽問答で身延派を打ち破ったことも、正本堂を造ったことも、全ての意味が否定される可能性があります。

③池田先生の多くの著作がそのままでは使用できなくなります。これから出される著作は直せても、過去に遡って、全ての著作を改訂することは不可能です。結果として、池田先生の自語相違が歴史に刻まれてしまいます。

6、計画再考の必要

拙速に事を進めることのプラスよりも、圧倒的にマイナスが大きいことは明らかです。当初の目的であるはずの「世界宗教の体制の確立」が「世界宗教の体制の崩壊」につながりかねません。

①御本尊については、どのような方針を取るにしても、会員の機根を整えて、慎重の上にも慎重に進めるべきです。

②会憲については、世界広布の経験もない日本の弁護士が集まって机上の空論をこしらえるのではなく、世界広布の最前線で苦労されているリーダーの意見に謙虚に耳を傾けて、21 世紀という人権と民主の時代に相応しい内容を目指すべきです。

③世界広宣流布の未来を見据えて、「会員のため」「池田先生のため」という原点に関係者全員が立ち返り、現在進行している計画を再考していく必要があると切に望む次第です。

c

総本部の御本尊と日蓮世界宗創価学会会憲の問題点

１、御本尊の教義変更と会憲制定の計画

■いわゆる「戒壇の大御本尊」から決別し、総本部に安置される「学会常住御本尊」をもって創価学会の根本の御本尊とする、教義上の大転換の計画が進んでおります。その大転換が、総本部完成という今の時に合わせ、「池田先生の強い意向」として発表されるのです。総本部である「広宣流布大誓堂」に設置される池田先生の碑文にも、「学会常住御本尊」が「大御本尊」であると明記されています。

■さらに、総本部完成とともに世界宗教としての体制も完成させるという構想のもと、全世界の創価学会の憲法である「日蓮世界宗創価学会会憲（世界創価学会会憲）」が制定され、これに合わせて「創価学会会則」も改定される運びとなります。「会憲」には、「学会常住御本尊」や「広宣流布大誓堂」を信仰の根本とする旨が謳われています。また、「日本創価学会会長」が「世界創価学会会長」に就任するという規定が明文化され、「日本創価学会会長」一人が、教義・人事・財政・活動方針の全てにおいて世界のＳＧＩ組織をコントロールする体制が打ち立てられることになります。

■計画は十分な検討も準備も欠いたまま、拙速に進められており、学会にとって非常事態です。

①実現すれば、国内外の会員の信仰が根本から動揺し、組織も混乱し、日本と各国のＳＧＩとの関係も悪化し、結果として創価学会が衰退を余儀なくされることは必至です。

②全てが「池田先生の強い意向」として推進されているため、池田先生の歴史と業績が致命的に汚され、一切の混乱の責めが池田先生一人に集中することは確実です。

■教学部としては、「戒壇の大御本尊」を巡る論議については、ある時期に決着をつけなければならないのは確かだが、学会が過去何十年にも渡って尊重してきた経緯があるので、拙速に事を進めて教義の根幹が混乱したり、会員の信仰が動揺したりしないよう、慎重の上にも慎重を期して取り組んでいくべきだと訴えてまいりました。しかし、こうした訴えは、推進派の方々から、にべもなく撥ねのけられ、「付いてこられない会員が少しばかりいても仕方がない。多少の血が流れるのは当然だ。上がやると言ったら、その通りにやれ」など強要され続けております。

■９月 25 日には、世界の主要国の中心者を招集して会議が開かれました。各国の中心者たちは、日本の幹部の前では遠慮してほとんど異議を唱えませんでした。しかし多くの方々が、「このようなことは、国に帰って説明できません」と困惑し、苦悩していました。特に、

「創価学会は日本宗教である」として弾圧を受けてきた台湾の代表などは、日本中心の考えが明文化されることに強い不安感と不信感を表明していました。

■推進されている方々は、初めのうちは「学会常住御本尊」を「戒壇の大御本尊」に替わる新しい「大御本尊」と位置づけ、「戒壇の大御本尊」から完全に決別する方針に固執していました。それをもって「宗門問題を完全決着した業績とできる」と考えていたようです。日蓮大聖人の「出世の本懐」の内容や、聖人御難事の「余は二十七年なり」（1189 ページ）の解釈も全面的に変えると意気盛んでした。

しかし、教義の基本的な論理構成を安易に壊したら大変なことになるという教学部の度重なる反論に答えられず、大幅にトーンダウンしていきました。「日蓮世界宗創価学会会憲」でも、当初案で「学会常住御本尊」こそ「広宣流布の大御本尊」であると定めていましたが、それも断念し、現状案では「広宣流布の御本尊」と後退させているようです。

■ただ一方、「戒壇の大御本尊」については、「会憲」案で「（この会は）一閻浮提総与・三大秘法の御本尊を信受し」としていることから、「創価学会会則」の「一閻浮提総与・三大秘法の大御本尊を信受し」という条文や、勤行要典の「一閻浮提総与・三大秘法の大御本尊に南無し奉り」という御祈念文も、それに合わせて修正する方針を決めたとのことです。

「大御本尊」の「大」は、たった一字ですが、教義的には極めて重要な意味を持ちます。

そもそも「創価学会会則」は、2002 年に改定されたばかりです。

改定に際し、当時の斉藤教学部長は、次のように発表しています。

「（会則には）『一閻浮提総与・三大秘法の大御本尊を信受し』とあります。これは、創価学会に貫かれてきた『大御本尊への信心』の本義を示したものです。大聖人は、熱原の法難において民衆が不惜身命の信心を現したのに呼応して、弘安 2 年 10 月 12 日に出世の本懐として大御本尊を顕されました。幸福と平和を求めて真の強き信仰心を起こした民衆の心にこたえ、末法万年にわたる全民衆を救うために、日蓮大聖人は衆生救済・仏国土成就・広宣流布実現の大願を込めて出世の本懐の大御本尊を顕されたのです。この大聖人の心に呼応して同じく広宣流布の大願を起こし、民衆救済の実践に邁進していく強い信心こそ『学会の信心』です」

2002 年に決めたことを、わずか 11 年しか経っていないのに、全く正反対の方向に改めるというのです。

しかも、今回の改定案に「一閻浮提総与・三大秘法の御本尊を信受し」とあるなかに「戒壇の大御本尊」が含まれるか含まれないかついて、原田会長は「含まれる」と言い、秋谷議長は「含まれない」と言い、推進側の中でも全く見解が一致していません。しかも秋谷議長は「『戒壇の大御本尊は信受の対象ではない』と、とにかく、まず会長が大々的に発表してしまえばいいんだ。そのあとで上手く説明を作るのが教学部の役目じゃないか」と主張する始末です。

■なお、総本部に安置される池田先生の碑文にも、「学会常住御本尊」が「大御本尊」であると明確に刻まれています。この「大」の一字は、会長が自らの強い思いを込めて挿入したものです。「大」の一字が入った結果、宗門の攻撃の鉾先が池田先生に向かうのは100%確実です。

教学部では、7月の時点から、「学会常住御本尊」を「大御本尊」と表記すれば、必ず先生にご迷惑が掛かることになるので、とにかく先生の碑文だけは改めていただきたいと繰り返し要望書を提出いたしました。この11月23日には、修正のタイムリミットが迫っているので、通訳・翻訳者から会長に同様の要望が提起されました。会長は、いったんは修正を了承しましたが、翌24日には、それを翻し、「大」を入れたままにすると決定したようです。

「学会常住御本尊」については、他のあらゆる文書で「大」の一字を入れないことになったにもかかわらず、池田先生お一人が「大」を入れた形になっており、その影響を心から案じております。

2、計画のもたらす影響

以下、御本尊に関する教義変更、および会憲が実現した場合の問題点と影響を列挙いたします、とにかく全ての問題は、①池田先生に御迷惑が掛かる、②国内外の会員が苦しむ、この2点に集約されます。

■総本部に安置される「学会常住御本尊」は日昇法主による「戒壇の大御本尊」の書写、国内外の会員が日夜拝している御形木御本尊は日寛上人による「戒壇の大御本尊」の書写です。書写された御本尊には「之を書写し奉る」と明記されており、「戒壇の大御本尊」を殊更に取り上げて否定することは、書写された御本尊自体の存在根拠を否定することに直結します。会員が日夜拝している御本尊の根拠が揺らげば、会員の信仰が根本から動揺してしまいます。

教義は、一度変えたら後戻りはできません。変えるに際しては、確実な実証と理論の裏付けが最低の条件です。失敗すれば、万代に禍根を残します。しかし現時点で、十分な教学的準備は全くなされてはおりません。推進している方々は、見切り発車でも何とかなるだろうと、安易にリスクを過小評価しているのです。

■会員の御本尊に対する信仰の動揺も懸念されます。御本尊は、文字通り「根本尊敬の対象」であるゆえ、御本尊の教義が揺らげば、会員の信仰の土台が揺らぎます。「今まで信じていたものは間違っていた。何十年もやってきたのに意味がなかった」という疑問が広がったら、学会の存立に関わる危機です。

会員の教義理解の度合いも様々なレベルがありますので、必ずしも全ての会員が教義の変更をすぐに受け入れられるとは限りません。その結果、御本尊を巡る不毛な論争が沸き起こり、組織は分断され、場合によっては分派も起きかねません。「黄金の３年間」が「大争乱の３年間」になってしまいます。特に、海外の会員は、日本とは比較にならないほど教義に対して厳格ですので、教学部の対処能力を遥かに超えた事態が起きると予想されます。

現在のところ、国内外の会員に無理なく理解させていくための準備も計画も一切存在していません。

■教義の拙速な変更は、学会攻撃の格好の口実を日顕宗側に与えてしまいます。

学会は、これまで、日顕の「戒壇の大御本尊」否定発言や正本堂破壊を大謗法として破折してきました。そうした論拠も自ら崩してしまうことになります。第一線の会員は、坊主や法華講などから、ここぞとばかり攻撃されると予想されます。

宗門事件それ自体が、「日蓮大聖人の正義を護る学会を、堕落・逸脱した宗門が破門した」という図式から、「安易に教義を変えた学会が、厳格に教義を護る宗門から破門された」という図式に変わってしまいます。

宗門との真の決別は、「日蓮大聖人の正義を徹底して守り抜くこと」以外にないはずだと信じます。

■「日蓮世界宗創価学会会憲」にも多くの問題があります。

例えば、「会長」の条文には「（世界創価学会）会長は、日本『創価学会』の会長が就任する」とあります。

日本に圧倒的な経験の蓄積があるので、日本主導で世界広宣流布を推進することは、実際上のＳＧＩの組織運営としては何ら問題ありません。海外組織の中心者たちも、それで十分に納得しています。

ただ、難しいのは、それが「明文化」された場合です。例えば、日本の副会長に女性は１人もいませんが、会則には「女性を副会長にしない」とは定められていません。女子職員は結婚すれば退職することになっていますが、雇用契約には「結婚したら辞める」とは定められていません。これらは、明文化されない「不文律」であり、「慣行」であり、「実際上の判断」です。もし、これを「明文化」すれば、「差別主義」の団体として社会的な糾弾の対象になってしまいます。

「日蓮世界宗」は「世界宗教」なので、その「世界性」「普遍性」「平等性」が問われます。海外から「世界の会長を日本の会長が務めるという条文は、なぜあるのか。仏教の平等の精神に悖るのではないか」と疑問が呈された場合、全く答えようがありません。

日本の侵略戦争の犠牲になった国々から、特に、治安当局や悪意をもったマスコミから、日本優越主義と受け止められることも懸念されます。特に、韓国や台湾では、「日本宗教で

ある」ことが弾圧の口実になっています。日韓関係、日中関係も悪化の一途を辿っておりますので、更に事態が悪化した場合、再び弾圧や迫害が起きないとも限りません。

■「会憲」には、日本創価学会会長（＝世界創価学会会長）の権力を制限する規定は一つも定められていません。

池田先生がいらっしゃる限り、それでも何の問題もありません。今の「創価学会会則」でも、日本の会長の権力を制限したり、会長を罷免したりする規定はありませんが、池田先生が上から厳しく指導されているので、実質的に権力が制限されているのと同じ状態です。

しかし、遠い将来を考えれば、全世界の教義・人事・財政・活動方針といった重要事項について一人の人間が全権を握れる体制は極めて危険と考えられます。700年前の「日興遺誡置文」には「時の貫首為りと雖も仏法に相違して己義を構えば之を用う可からざる事」「衆議為りと雖も仏法に相違有らば貫首之を摧く可き事」と、「貫首」と「大衆」の双方の権力を抑制する規定が存在しています。

各国ＳＧＩの中心者たちは、「会憲」の反民主的・前近代的・権威的な内実に強い不安と恐怖を抱いています。

３、池田先生への影響

■全ては「池田先生の強い意向」として全世界に発表されます。教義の不安定化も、会員の信仰の動揺も、組織の混乱も、全て池田先生お一人が責任を負う形となり、池田先生が集中攻撃を受ける構図となっております。

■池田先生の歴史と業績が否定されかねません。初代、第２代の教えを忠実に継承したことも、小樽問答で身延派を打ち破ったことも、正本堂を造ったことも、宗門と戦って宗教改革を成し遂げたことも、広宣流布の歴史に輝く偉業の意味が否定されてしまいます。

■池田先生の多くの著作がそのままでは使用できなくなります。これから出される著作は直せても、過去に遡って全著作を改訂することは不可能です。結果として、池田先生の自語相違が歴史に刻印されてしまいます。既刊の『池田大作全集』には 450 カ所近く、小説『人間革命』『新・人間革命』には 250 カ所近く「大御本尊」に関する記述があります。未来永遠に広宣流布の根本指針となるべき先生の御著作ですので、これらの箇所をどうするかについては、時間をかけて慎重に検討していかなければなりません。にもかかわらず、推進派の方々は「私たちは、これから新しいことを始めるんだ。過去は過去だ。過去のものとして扱えばいいんだ」と、ひとかけらも尊重する姿勢がありません。

■とにかく、慌てて拙速に事を進めることのプラスよりも、圧倒的にマイナスが大きいことは明らかだと考えます。このままでは、当初の目的であるはずの「世界宗教の体制の確立」が「世界宗教の体制の崩壊」につながりかねません。先生を苦しめたり、会員を苦しめたりといった事態が起きないよう、教学部としては、たとえ我が身はどうなろうとも断じて信念を貫いていく決意でおります。